

中国帰国者用日本語教育指導の手引  
「異文化適応をめざした日本語教育」

文化庁文化部国語課

はじめに

中国からの国費引揚者の数は平成3年2月の時点で1万1,000人以上になっており、文化庁では、これらの帰国者に対する日本語教育を推進するために、昭和57年度より様々な日本語学習教材及び指導参考書を作成・配布してきました。

本書は、昭和62年奄に作成した手引において今後の課題として残されていた職場・対人接触場面について、昭和63年度より調査研究を行い、その結果を作成したものです。

本手引は、帰国者に日本語を教えている指導者に限らず、帰国者の定着を援護している方々や、外国人に日本語の指導を行っている方々にも読んでいただき、参考としていただきたいと思います。

最後に、本手引を作成するに当たり御尽力くださった委員の方々に深く感謝を申し上げますとともに、その他御協力いただいた方々に厚くお礼申し上げます。

平成3年6月  
文化庁文化部国語課

目次

はじめに

中国帰国者用日本語教育指導の手引作成検討会議・作成部会構成員名簿

第1章本書の目的と構成

第1節本書の目的

第2節本書の構成

第2章帰国者に対する日本語指導の現状

第1節実状調査の結果

1 機関数等の概要

2 実施形態別機関数

3 指導者について

4 学習者について

(1)対象別内訳

(2)年齢別内訳

(3)中国での学歴別内訳

(4)日本語学習歴別内訳

(5)中国及び日本での就労状況別内訳

第2節日本語指導内容・方法

1 学習期間等について

2 使用教材について

第3章指導の理念

第1節異文化適応をどう考えるか

1 異文化適応とコミュニケーション

(1)文化の相違

ア「相違」という言葉

イ「相違」の例

ウ「文化」の要素

エ文化と帰属意識

(2)人にとってのコミュニケーション

アコミュニケーションをどうとらえるか

イ言語能力とコミュニケーション能力

(3)異文化適応

ア異文化での適応

イ異文化適応の段階

ウ異文化不適応

エ異文化適応能力(異文化での自己実現のために)

2 Q & A

質問 1 日本語教室が溜まり場となる問題

質問 2 異文化適応と日本語指導

質問 3 よい人間関係を作るための指導

質問 4 家庭で中国語を使うことについて

質問 5 職場での日本的なコミュニケーションについて

質問 6 意思疎通が困難

第 2 節・学習をどう考えるか

1 自己学習能力の育成について

(1)「学習」とは

(2)自己学習能力の養成

2 指導者の役割について

(1)学習者を知る

(2)学習者主体の学習

(3)学ぶ学習者

3 Q & A

質問 7 学習意欲のない学習者に対する指導

質問 8 専業主婦に対する指導

質問 9 授業態度が悪く、学習意欲のない学習者への対処法

質問 10 消極的な学習者に対する対処法

質問 11 学力、学習経験の違う学習者が一つのクラスにいる場合の配慮

質問 12 週 1, 2 回の指導しかできない場合の工夫

質問 13 異文化指導と日本語指導の関係

質問 14 日本語を使わせる工夫はないか

第 4 章指導の実践

第 1 節指導法のいろいろ

1 文法訳読法

2 口頭法

3 コミュニケーション法

4 異文化学習法

5 まとめ

第 2 節指導法を決める際の留意点

1 帰国者に対する日本語指導の目的、内容と指導法

(1)指導の目的と指導法

(2)指導の内容と指導法

2 学習の過程と指導法

3 その他の条件と指導法

4 Q & A

質問 15 コミュニケーション重視の指導法と今までの指導法

質問 16 コミュニケーション重視の指導法と文法、発音、文字などの指導

質問 17 コミュニケーション重視の指導法と 4 技能

質問 18 学習者のニーズに応じた指導

質問 19 方言の指導

質問 20 教室の日本語と職場での日本語

第 3 節学習活動例

- 1 ゲーム
  - (1)ゲームを使った指導の特色
  - (2)指導者の留意点
    - ア ゲームの具体例 - 1「連想ゲーム」
    - イ ゲームの具体例 - 2「すごろく」
    - ウ ゲームの具体例 - 3「社長に伺ってきて」
- 2 役割演技(ロールプレイ, “ 表演小品”)
  - (1)「役割演技」の特色
  - (2)役割カードとその作り方
  - (3)指導の主な流れ
    - ア 事前準備
    - イ 「役割演技」の実施と演技後の検討
    - ウ 事後の指導
  - (4)指導者の留意点
    - ア 学習者がやる気になる場面, 役割の設定
    - イ 学習者の性格等に対する配慮
    - ウ 評価と訂正
    - エ 「役割演技」の位置づけとテーマ例
      - (ア)役割演技の具体例 - 1「誘う」
      - (イ)役割演技の具体例 - 2  
「引っ越し先で隣人にいろいろ尋ねる」
- 3 交流会
  - (1)「交流会」の特色
  - (2)指導の主な流れ
  - (3)指導者の留意点
    - ア 相手を捜して企画を練る
    - イ 日頃の指導の重要性
    - ウ 通訳を介した懇談会・討論会の意義の理解
    - エ 懇談会のテーマの選び方
    - オ 指導者の態度が重要
  - (4)具体的な活動例
    - ア交流会の具体例 - 1「中国を知ってもらおう」
    - イ交流会の具体例 - 2  
「日中交際事情についての懇談会」
- 4 総合活動(プロジェクトワーク)
  - (1)「総合活動」の特色
  - (2)指導の主な流れ
  - (3)指導者の留意点
    - ア 総合活動の具体例 - 1  
「住宅事情についてのミニ調査」
    - イ 総合活動の例 - 2「クラス新聞作り」
- 5 Q & A
  - 質問 21 日本事情・日本文化に関するテーマの扱い
  - 質問 22 日本事情・日本文化に対する関心
  - 質問 23 1 クラスを複数の指導者が担当する場合の分担・連絡
  - 質問 24 生活日本語の使用法
  - 質問 25 視覚教材の種類
  - 質問 26 視聴覚教材の利用法
  - 質問 27 インタビューの回答聞き取りの工夫

中国帰国者用日本語教育指導の手引  
作成検討会議・作成部会構成員名簿

【作成検討会議】

和泉清一	中国帰国者三互会	会長
小林悦夫	中国帰国孤児定着促進センター	教務課長
柴田俊造	九州大学留学生教育センター	センター長
高山知恵子	足立区立第四中学校	教諭
田中望	日本語教育研究所	所長
藤本祥子	大阪国際学院日本語学校	日本語講師
松本みどり	京都中国帰国者日本語学校	教務主任
水谷修	国立国語研究所	所長

【作成部会】

石井恵理子	国立国語研究所日本語教育センター	研究員
江村裕文	法政大学	講師
小田切由香子	NHK日本語セミナー	講師
小林悦夫	中国帰国孤児定着促進センター	教務課長
辰正子	中国帰国孤児定着促進センター	教務係長
田中望	日本語教育研究所	所長
田中令子	電気通信大学	講師
馬場尚子	中国帰国孤児定着促進センター	教務主任
藤田正春	富山大学教養部	助教授
水谷修	国立国語研究所	所長
山田泉	昭和女子大学文学部日本文学科	助教授
若山孝子	桜美林大学	非常勤講師

## 第1章 本書の目的と構成

### 第1節 本書の目的

昭和47年9月29日の日中国交正常化とともに、長い間中断していた残留孤児の帰国が再開されました。昭和20年頃、旧満州地区(現在の中国東北地区)では、家族と死別したり生き別れたりした残留孤児の方々にとってどんなにうれしい瞬間だったかしれません。その後、昭和50年には厚生省によって訪日調査も開始され、平成3年3月までに21回の調査が行われています。また、昭和60年3月からは、訪日調査などでは身元が分からなかった残留孤児の帰国受入れ制度が発足し、「未判明孤児」と言われる人たちが次々と日本に帰ってくるようになりました。

日中国交正常化(昭和47年9月29日)後の国費引揚者数  
(平成3年2月19日現在)

年度	帰国所帯数	人数
47	19	57
48	70	143
49	181( 1)	382( 5)
50	179( 9)	515( 30)
51	112( 12)	359( 43)
52	73( 13)	255( 56)
53	100( 20)	280( 74)
54	142( 24)	470( 80)
55	173( 26)	596( 110)
56	193( 37)	681( 172)

年度	帰国所帯数	人数
57	156( 30)	554( 120)
58	168( 36)	626( 154)
59	133( 35)	475( 155)
60	169( 56)	626( 258)
61	281( 159)	1,014( 645)
62	376( 271)	1,423(1,093)
63	365( 267)	1,353(1,097)
平元	338( 218)	1,167( 831)
平2	262( 162)	790( 509)
合計	3,490(1,376)	11,766(5,432)

(注)1 ( )内は中国残留孤児の内数。

2 合計の1,376世帯には、孤児夫婦が3世帯あるため、孤児の引揚者数は1,379人である。

しかし、これら中国からの帰国者にとって、日本に帰ってくるということはうれしいことや楽しいことばかりではありません。文化も言葉も違う日本でこれから生活をしていかなければならないのですから、緊張と不安も並々ならないものがあると思います。この緊張と不安を一日も早く取り除き、定着自立できるように、中国帰国孤児定着促進センターで4か月、中国帰国者自立研修センターで8か月の日本語教育や生活指導等を行うなど、関係省庁や地方公共団体、あるいは日本語教育関係機関やボランティアの人々が様々な支援を行っています。

文化庁では、帰国者の日本語教育を推進するために、昭和57年度より「中国からの帰国者のための生活日本語」や「看・听・学 - はじめての日本語 - 」などの学習教材や指導参考書を作成し配布するほか、昭和60年から中国帰国孤児定着促進センターや大学等の専門家からなる作成検討会議と作成部会を設けて調査研究を行ってきました。

この会議では、指導に当たっての留意点や、必要な教授内容の項目を各現場の実状に合わせて抽出し、実際の指導に組み立てていく方法を示した手引の作成を目的とし、生活場面に関するアンケート調査やインタビュー調査を行い、まず手始めとして、昭和63年3月には生活場面に着目した手引を作成しました。しかし、この手引では特に必要性があると思われる生活場面を中心に説明したものであり、職場や近所の人などとの人間関係に関することには触れていませんでした。そこで、職場・対人接触場面に関する調査を行うなど引き続き調査研究を継続し、今回の手引を完成しました。

日本語指導者の方々がこの手引や前回の手引を参考にして、それぞれの教育現場の実状に応じた、よりよい日本語指導を行っていただきたいと思います。

## 第2節 本書の構成

第1章は、本書の目的と構成について書きました。本書を使用する前に是非一度目をとおしていただきたいと思います。

第2章では、文化庁が調査した「中国帰国者に対する日本語指導の実施状況調査」の結果をもとに、帰国者に対する日本語指導の実施状況についてまとめました。

この調査は、平成2年6月1日現在で文化庁が都道府県、市町村及び日本語指導実施機関（団体）の協力により行ったものです。調査項目は、学習者関係としては、学習者数とその年齢別学歴別等の内訳のほか、就労状況について調査し、指導者関係としては、指導者数と中国語ができるかどうかを調査しています。また、そのほか、指導実施形態として、使用教材や学習期間、実施方法・形式についても調査を行いました。この調査結果から、全国の帰国者に対する日本語教育実施状況、指導内容・方法等についての現状が把握できるようになっています。

第3章は、「異文化適応」と「学習」という基本的な概念を考えると、帰国者に対する日本語指導を行う際に前提となる指導理念について述べています。

第4章では、いろいろな言語指導の考え方やそれに基づく教授法について、帰国者を学習者とした場合にどんな方法が考えられるか、また、実際に指導するに当たって、どのような点に注意する必要があるのかについて説明しました。さらに、実際の指導の典型的な例を最後に載せました。

以上が、この手引の構成概要です。本書は、一度読んだら終わりというのではなく、必要に応じて何度でも読み返していただきたいと考え、なるべくわかりやすく、見やすい構成、内容に作成したつもりです。また、第3章、第4章では以下のような配慮もしました。

### Q & Aについて

どちらの章も終わりにこの章の内容をより理解しやすくするために、質問とその質問に対する解説というQ & A形式の事例を示しました。この質問は、毎年夏に文化庁が開催している「中国帰国者に対する日本語指導研究協議会」や「中国帰国者に対する日本語指導者研修会」などで、実際に指導者の方から出されたものを採用しました。本書の理解を容易にするとともに、読者が現在抱えている問題を解決するための糸口とするなど、現場の実情に合わせて活用していただきたいと思います。また、Q & Aの質問部分の見出しを目次に載せました。探したいQ & Aは巻頭の目次を見ていただきたいと思います。

### キーワードと索引について

各章の解説文やQ & Aでは、重要語句や解説等のポイントとなる言葉を、左ページは左側に、右ページには右側に欄を設けて抜き出すとともに、本書の最後に索引を設け、どのページにどのキーワードがあるかをすぐ探せるように配慮しました。

最後に、本書を作成するに当たって、いくつかの取り決めをしておきたいと思います。

第一は、この手引が2冊目の手引となりますが、昭和63年に作成した手引と今回の手引とを、説明上区別する必要がある場合には、前回のものを「手引」<sup>1</sup>、今回のものを「手引」<sup>2</sup>と書き表しました。

第二は、この手引では、日本語を教える側の人を「指導者」、教わる側の人を「学習者」という言葉に統一しました。但し、「学習者」と言うより「帰国者」と言った方が、説明上わかりやすい場合については、「帰国者」という言葉を使用しました。なお、この手引で言う「帰国者」とは、国費・私費にかかわらず、中国から日本に永住の目的で帰国した人たちのことを言います。

第三に、説明するに当たって、帰国者とそれ以外の日本人とに分けなければ説明しにくい部分が出て来ます。どうしても他の言葉に置き換えられない場合に限り、便宜上「帰国者」と「日本人」という使い方をしました。

## 第2章 帰国者に対する日本語指導の現状

### 第1節 実状調査の結果

文化庁では、帰国者に対する日本語指導の実施状況を把握し、帰国者の日本語学習の促進、今後の指導内容・方法を検討する上での基礎資料を得るために、各都道府県、市町村の機関、団体、あるいは国からの委託により日本語指導を行っている機関を対象に、平成2年6月1日現在で「帰国者に対する日本語指導の実施状況調査」を行いました。

この第1節では、この調査結果の概要についてふれます。

#### 1 機関数等の概要

地区別	実施都道府県数	機関数	指導者数	学習者数	指導者1人当たりの学習者数
北海道・東北	6	14	84	233	2.8
関東	5	31	305	989	3.2
中部	5	17	154	537	3.5
近畿	5	23	131}	665	5.1
中国・四国	6	15	95	358	3.8
九州・沖縄	7	13	70	312	4.5
合計	34	113	839	3,094	3.7

(注)各地域の都道府県は、次のとおりです。

北海道・東北(7)...北海道,青森,岩手,宮城,秋田,山形,福島

関東(7)...茨城,栃木,群馬,埼玉,千葉,東京,神奈川

中部(9)...新潟,富山,石川,福井,山梨,長野,岐阜,静岡,愛知

近畿(7)...三重,滋賀,京都,大阪,兵庫,奈良,和歌山

中国・四国(9)...鳥取,島根,岡山,広島,山口,徳島,香川,愛媛,高知

九州(8)...福岡,佐賀,長崎,熊本,大分,宮崎,鹿児島,沖縄

以上の結果を見ると、各地区ほぼ同数の県で帰国者に対する日本語教育の指導を行っています。機関数で見た場合は関東地区、近畿地区が他の地域より多くなっています。機関数の多い5都道府県をあげると、東京、大阪、愛知、長野、広島という結果になりました。但し、ここで取り上げている機関数は、1機関が幾つかの教室を持っていたり、何種類かの講習会・個人指導を行っている場合でも、この表の数字は1機関と数えてますので、機関数が少ないということが講習会や個人指導の数が少ないことを意味していません。

また、指導者数については、関東地区が他の地区の2倍以上になっていますが、これを1機関当たりの指導者数(指導者数÷機関数)で考えてみると、北海道・東北地区6.0人、関東地区9.8人、中部地区9.1人、近畿地区5.7人、中国・四国地区6.3人、九州・沖縄地区5.4人となり、関東地区と中部地区はほぼ同じ程度の割合となっています。

それでは学習者数はどうでしょう。やはり関東地区が多くなっていますが、指導者数では中部地区が次に多かったのに対し、学習者数では近畿地区が多くなっています。しかし、指導者1人当たりの学習者の割合(学習者数÷指導者数)を考えると、近畿地区、九州・沖縄地区の値が大きく、それぞれ5.1人、4.5人であるのに対し、関東地区は3.2人と低い値になっています。

機関、指導者、学習者ともに関東地区に多く集まっていることが以上の数字からも分かりますが、他の地区と比べて、学習者数に対する指導者数が少ないかと言えば必ずしもそうとは言えないようです。かえって指導者1人当たりの学習者の割合を考えた場合には、機関、指導者、学習者の少ない九州・沖縄地区の方が高くなっています。

次に、これらの機関の指導の実施方法や形式はどのようになっているかを見てみたいと思います。

## 2 実施形態別機関数

実施形態 都道府県	講習会	個人	都道府県			市町村(区)			その他		国 委託	合計
			直接	補助	委託	直接	補助	委託	中学	ボランティア		
北海道	3			1		1				1		3
青森県	1	5				1	5					6
岩手県	1				1							1
宮城県	1				1							1
秋田県												
山形県	6				6							6
福島県	2	2			3						1	4
茨城県	5					1		4				5
栃木県												
群馬県												
埼玉県	3		1							1	1	3
千葉県	1				1							1
東京都	17	2	1		3	3			5	7		19
神奈川県	4	1			1		1			3		5
新潟県												
富山県												
石川県	1			1								1
福井県												
山梨県	1				1							1
長野県	6				1	2			1	2		6
岐阜県												
静岡県	1	1			2							2
愛知県	8			5			1			1	1	8
三重県												
滋賀県		1				1						1
京都府	1				1							1
大阪府	13	1		3	1				7	2	1	14
兵庫県	4	2								5	1	6
奈良県	2				1				1			2
和歌山県												
鳥取県												
島根県												
岡山県	1	1	2									2
広島県	5	1			4				1	1		6
山口県	1	2			1			2				3
徳島県		1	1									1
香川県	1									1		1
愛媛県												
高知県	2		1		1							2
福岡県	1	3		1	2			1				4
佐賀県	1				1							1
長崎県	1				1							1
熊本県	1	1			1	1						2
大分県		1	1									1
宮崎県	2	3								5		5
鹿児島県	3		1			1					1	3
沖縄県												
合計	100	28	8	11	34	11	7	7	15	29	6	128

(注1)所沢市の中国帰国孤児定着促進センターは該当欄がないため、ここでは埼玉県6実施形態「国からの委託」欄に入れてあります。

(注2)前述の機関数とこの合計数が違うのは、1機関で2種以上の講習会、個人指導を行っている場合があるためです。

### 3 指導者について

本調査において、指導者関係の調査項目は「人数」と「中国語が話せるか」の2点でした。

最初に述べたとおり指導者の人数は 839 人でした。また、指導者の中で中国語を話せる人は 382 人となっており、これは全体の 45.5%となっています。

機関として考えると中国語を話せる指導者が一人もいない機関数は 11 となり、ほとんどの機関に一人は話せる指導者がいることとなります。ただ、この調査で中国語を話せる能力の度合いは調査していませんので、どの程度話せるのかは分かりません。推測としては、指導者が自分の言いたいことの要点を学習者に知らせることができる程度と考えています。

それではこの中国語を話せる指導者は、中国語をどのように使用して指導しているのでしょうか。調査結果をまとめると次のようになります。

(1)使用しない(上記 11 機関を含む)	20 機関
(2)どうしても必要な場合のみ使用	75
(3)積極的に使用	17
(4)その他(未記入を含む)	16

「その他」には、例えば個人指導の場合に個々の学習者の学習レベルに応じて使い分けている場合や、入学時や初級段階の場合には使用し徐々に使用しなくなる場合、特別に設けた質問時間のみ使用する場合等がありました。

### 4 学習者について

学習者数は全体で 3,094 人であり、男女別では、男性 1,418 人、女性 1,469 人とほぼ同数となっています。以下、学習者関係の調査結果を対象別、年齢別、中国での学歴別、日本語の学習歴別、中国・日本での就労状況別にまとめてみました。

#### (1) 対象別内訳

本人	配偶者	子女	その他	不明
549	515	1,434	534	62

#### (2) 年齢別内訳

20 歳未満	20～29 歳	30～39 歳	40～49 歳	50 歳以上	不明
518	817	662	683	343	71

上記「20 歳未満」の学習者 518 人のうち、学齢児童生徒の数は 234 人となっています。

#### (3) 中国での学歴別内訳

大学卒業程度	高等学校卒業程度	中学校卒業程度	小学校卒業程度	小学校中退程度	学歴なし	学歴不明
166	588	1,083	600	248	173	236

見てわかるように、中学校卒業程度の学力を持った学習者が全体の 35%と最も多く、学歴のない人は 5.6%でした。また、この学習者の中で中国語による読み書きができ率い学習者の数は 165 人でした。

上記(2)からも分かるように、学習者には 20 歳未満の人が 518 人もおり、例えば小学校中退程度の学習者の中には、現在小学校に通っている人も含まれていますし、中学校に通っている学習者については、「中退」といった欄がないので「小学校卒業程度」の欄に含んでいます。したがって、この調査結果から学習者は学力が低いとは必ずしも言えません。

#### (4) 日本語学習歴別内訳

日本語学習歴あり						日本語学
6 月未満	6 月～1 年	1～3 年	3～5 年	5 年以上	合計	習歴なし
615	581	529	207	62	1,994	1,100

#### (5) 中国及び日本での就労状況別内訳

職業	中国での職業	日本での職業
専門的技術的職業従事者	233	12

(教員,土木・建築技術者,針、灸師等)		
管理的職業従事者 (会社・団体等の部課長,役員等)	63	6
事務事者 (一般事務員,会計事務員等)	186	25
販売従事者 (飲食店主、販売店員、外交員等)	146	62
農林漁業従事者 (農耕作業者,育林作業者等)	484	6
運輸・通信従事者 (自動車運転者,電話交換手等)	83	10
技能工,生産工程作業者及び労務作業者 (溶接工,修理工,印刷工等)	583	624
サービス職業従事者 (調理人,理容師,クリーニング工等)	58	71
その他'	229	174
無職(主婦を含む)	457	1,679
不明	572	425
合計	3,094	3,094

日本での職業において「無職」が多いのは、主婦も含んでいることのほかに中国帰国孤児定着促進センター等に在籍中の人も含んでいるためです。

## 第2節 日本語指導内容・方法

第1節では、機関数、指導者数、学習者数といった帰国者を受け入れる機関の現状について書きましたが、この節では、実際にこれらの機関がどのような体制で指導を行っているかを、引き続き調査結果をもとに紹介していくことにします。

### 1 学習期間等について

各機関は、帰国者に対する日本語指導をどのくらいの期間で、週何回行い、1回に何時間教えているのでしょうか。今回の調査結果では次のような結果が出ています。

(1)平均学習期間	10.0 か月
(2)週平均開催回数	3.0 回
(3)週平均時間数	8.3 時間
(4)1回平均時間数	2.8 時間

このように、平均して1年弱の期間に週3回3時間程度の指導を行っているという結果になりました。これは、総授業時間(週平均時間数×4週×平均学習期間)としては332.0時間の計算になります。

しかし、この数字には講習会形式で行っている場合と、個人指導で行っている場合を含んでいますので、次にこの二つを分けた場合についての結果を出してみます。

#### ア 講習会形式の場合

(1)平均学習期間	9.7 か月
(2)週平均開催回数	3.3 回
(3)週平均時間数	9.4 時間
(4)1回平均時間数	2.9 時間

#### イ 個人指導の場合

(1)平均学習期間	11.4 か月
(2)週平均開催回数	1.8 回
(3)週平均時間数	4.3 時間
(4)1回平均時間数	2.4 時間

以上の結果になりました。講習会形式と個人指導を比べると、1回の平均時間数はほとんど変わらないのですが、週平均開催回数は講習会形式の方が3.3時間と個人指導の2倍近くになっており、学習期間に関しては、逆に個人指導の方が講習会形式よりも約2か月長くなっています。また、総授業時間数を見ると、講習会形式は364.7時間、個人指導は196.1時間となり、講習会形式の方が2倍近くになっています。

### 2 使用教材について

それでは次に、授業にはどのような教材を使っているかを見てみます。

主教材としては、「中国からの帰国者のための生活日本語 Ⅰ, Ⅱ」(文化庁)、「日本語の基礎 Ⅰ, Ⅱ」(海外技術者研修協会)が特に多く、約40種類の教材がありました。小学校用の教科書を使用している機関も幾つかありました。また、副教材を見ると、主教材よりも種類が多く約70種類あり、上記主教材でも多かった二つの教材がやはり多く、そのほかに「やさしい日本語」(日本放送協会)や小学校用の教科書、自作教材が目立ち、就職や生活上の必要性からか、自動車免許用の教本を取り入れている機関も幾つか見受けられました。

「中国からの帰国者のための生活日本語 Ⅰ, Ⅱ」については、文化庁が関係各都道府県をとおして帰国者に配布していることも使用頻度が大きい理由と考えられます。また、「日本語の基礎 Ⅰ, Ⅱ」については、中国語版が出ており、「やさしい日本語」も中国語の対訳がついていることから、これが理由の一つではないかと思われます。

この調査で残念なことは、自作教材がどんな内容のものが分からないことです。今後、文化庁が教材や手引等を作成する場合の重要な資料とするためにも、機会がありましたら、自作教材についての調査も考えてみたいと思います。

以上で「帰国者に対する日本語指導の実施状況調査」の調査結果の概説を終わりますが、本調査に協力していただいた各都道府県や各機関等の担当者の方々に深く御礼申し上げます。

### 第3章 指導の理念

今、仮にあなたが中国人であることが分かって、望郷の念やみ難く日本で築き上げた生活のすべてを投げうって、経済大国の中国に一家で帰国したと考えてみましょう。

日本で蓄えた財産は、貨幣価値の関係でほとんど役に立たなくなってしまい、日本で身につけた職業の技術や知識、資格などがまったく使い物にならない。また、制度や習慣なども違いが大きく戸惑うばかりである。こんなときには、だれかに相談したいのだが、中国社会には人のつながりがまったくない。何より困るのが言葉がよく通じないことである。中国語の勉強は始めたが、この年では習ったそばから忘れてしまう。

せめて子供たちには、中国の優れた教育を受けさせて、よい会社に就職させたいと思ったが、中国では、受験は大変で、言葉や学習内容の違いなど様々な不利な条件を背負った帰国者の子供にはとても無理なようだ。その上、このごろ子供たちは、いじめられるから学校へ行きたくないと言い出した。

帰国直後は、中国の人々も優しく親切と思えし、近代的で物も溢れるほどある母国に感動したものだだったが、今は、家族にとって帰国してよかったのか悪かったのか判断ができない。いっそのこと北京や上海にでも出れば、また別の道が開けるのではないだろうか。い ら住めば都とは言っても、黒竜江省のこの小さな町では、このままの状態が続くだけのように入る。

長々しく、仮の話が続けましたが、日本で生活を始めた中国帰国者の多くが似たような思いをしているのではないのでしょうか。このような人たちが、「いろいろと苦労はあるが帰ってきてよかった」と思えるようになるためには、迎え入れる側は何をしたらよいのでしょうか。

帰国者が置かれているこのような状況の背景には、中国と日本との社会文化面の相違が複雑に絡み合った問題が多く存在しています。

日本の今の社会制度や人の意識は、帰国者の存在を考慮して出来上がったものではありません。帰国者を仲間の一員に加えた現在、日本社会や日本人は、これらの制度や意識をそれにふさわしいものに変えていく努力をすべきですが、ただ、早急に変えるのは難しい面も多いただろうと思われます。

迎え入れる日本人側も努力をしなければならないのですが、帰国者自身がしなければならないことも多いのです。文化の相違を乗り越えて、日本社会で生活者として、満足感をもって生きていくためには、自分自身を変えていくとともに、日本社会や日本人といった「相手」に対しても変化を促すことをしなければなりません。この自分をも相手をも変えていくというのは、単なる「気の持ち様を変える」ということではありません。心から納得して変えるのです。変わることが、世界観を広げ、これまで以上に行動能力を高めることにつながるのです。このような、自分の慣れ親しんだ文化とは違った環境（異文化環境）で、自分の内外に働きかけて双方に変化を促し、満足感をもって生きていける状態を「異文化において適応して生きている状態」と呼ぶことができます。

当然、異文化において適応して生きていくためには、能力が必要なのです。そして、その能力は、養成されるべきものなのです。

以上のように考えたとき、帰国者の日本語教育は、単に日本語という言葉の習得の面での援助をすればよいとは言えなくなるのではないのでしょうか。異文化で適応していくための行動・思考と言葉は一体化しているもので、これらが総合的に習得されたときにはじめて異文化適応能力の一部として役に立つものになるのです。

そこで、私たち日本語指導者は、日本語の指導が異文化適応のための能力の養成にどうかかわることができるかを考え、具体的な指導内容・指導方法に粗み立てることが必要になるわけです。

本章では、異文化適応とは何か、またその能力を養成していく過程との関連で、学習とは何かを考えたいと思います。

## 第1節 異文化適応をどう考えるか

私たちは、出張などで住み慣れた土地から別の土地に行くと、社会文化の違いに戸惑うものです。四、五年前の話ですが、東京圏で生活している友人が関西圏に出張した折、地下鉄に乗るために自動改札を通ろうとして、左手で左側の穴に切符を入れたら扉が閉ってしまって大変に恥かしい思いをしたと憤慨していただことがあります。今では東京圏でも自動改札は珍しくはなくなりましたが、当時はまだほとんど見られませんでした。大きな荷物を右手で持って立ち往生している友人の姿を思い浮かべ、気の毒とは思いましたが吹き出してしまいました。

国内でもこのような状態なので、外国などに出掛けると大変なハプニングが起こることもあります。海外旅行であれば、若者はむしろハプニングを求め「珍道中」の思い出を作ってくるということも多いようです。しかし、事故や事件につながるようなことも少なくないと言われます。まして海外で生活するとなると社会文化の違いは、生活の根幹にかかわる大問題でもあります。

自分の慣れ親しんだ文化社会でもっていた問題解決の方法が通用しなくて、自分の大人としての行動能力の喪失感を味わうこともあります。外国にやって来た当初には、一度失敗しただけで、電話を掛けたり、買い物や食事に出掛けたりするのも尻込みしてしまうことがあるようです。その後も多くの場合外国人は限定的な範囲でのみ現地社会とかかわると言われます（J・V・ネウストプニィー 1982年『外国人とのコミュニケーション』岩波新書 11ページ～）。

ところで、人は一生を通して自己実現の過程を歩むと言われます。「自己実現の過程」は、二つの側面が考えられます。その一つは、行動の側面で、よりよい生活を目指していく過程です。もう一つは、思考の側面で、（自分自身に対し）よりよく世界を説明していく過程です。人はまた、考えながら行動し、それによって得た体験によって考えたことが正しかったかどうかを確かめているのです。言い換えると、体験を概念化することによって、「世界とはこんなものだ」と仮説し、それを新たな体験によって検証しているのです。

人が成長していく過程では、常にこの仮説が破綻し、新たにより高次の仮説を用意しなければならなくなります。子供のころはこの「一つの仮説が破綻し、新たな仮説に移る」というサイクルが目まぐるしく進んでいきますが、大人になるとほとんどの人が、だんだんと停滞していくようです。それは、大人になるとそれまでに様々な体験をとおして、普通の体験では崩れない高次の仮説ができていますが、仮説が崩れるような体験を避ける能力をも身につけていることも原因と言えましょう。

小さな子供は、動物が好きで、すぐ近付いて行って手で触ろうとします。結果的には逃げられることが多いと思いますが、たまには引っ掻かれたり、つつかれたり、噛まれたりすることもあります。そのような体験を通じて危険な動物とそうでない動物を見分け、同じ動物でもどんなときは近付かない方がよいかを悟るのです。大人は安全だと分からない動物には近付こうともしないでしょう。

よく、「目から鱗が落ちる」などと言うことがありますが、これは、これまでの仮説が崩れより高次の仮説に移るような体験をしたことを比喩的に言ったものだと思います。今まで思いもつかなかったような世界の説明の仕方を悟ったことを表すものです。これまでの仮説が崩れることは、自己実現の過程を歩む人にとって痛快なことで歓迎すべきことなのです。

人が異文化社会に接すると、好むと好まざるとにかかわらず、これまでの仮説では通用しない状態をしばしば経験することはすでに述べたとおりです。このような状態は新たに高次の仮説に移る契機でもあり、本来疎むべきものではありません。しかし、古い仮説が崩れたままで、新しい仮説が発見できない状態が長く続くと自己の喪失感につながるが多いと思われれます。

異文化適応は、このような状態でも自己を失わず、新たな仮説を発見していく能力がある場合にのみ可能と思われれます。本節ではそのような能力を養成する方法について考えてみようと思います。

### 1 異文化適応とコミュニケーション

「人は一人では生きていられない」と言われます。また、人は社会的存在であるとも言われます。私たち人間は、ほかの人たちと何らかの関係を作り上げて生活を営んでいるとすることができます。身近な存在としては家族・親戚・友達などですが、近隣や地域社会の人々、職場や学校の人々など日常的に接する多くの人々との関係を保ちながら、また、旅先の駅のホームで乗るべき列車を訪ねた知らない人やデパートで服のサイズを尋ねた店員など一回限りで接する多くの人々とも関係を作り上げることによって、物質的にも精神的にも生活を営んでいけるわけです。

このような、ほかの人との関係を作り上げ、その関係を維持し、更に発展させていくために、「コミュニケーション」は必要不可欠なものです。

しかし、コミュニケーションは、意図するとなしにかかわらず、ほかの人々との関係にマイナスの働きをすることも少なくありません。相手とけんかをしたり、仲たがいをすることもコミュニケーションを通して行われます。また、コミュニケーションの仕方によっては、相手との間に、曲解や誤解が生

じ、結果的に相手との良好な関係を失うこともあります。

異文化間でのコミュニケーションの場合は、この曲解や誤解が生じる可能性が更に大きくなるのではないのでしょうか。文化が互いに違うことで、同じコミュニケーションの内容に対してその意味づけが食い違っている場合、あるいは、伝えようとずる内容が同じでもコミュニケーションの方法・形式が食い違っている場合なども少なくないと言えます。

帰国者と日本人のコミュニケーションを考えると、これまで、曲解や誤解が原因と思われるトラブルの例が、ほとんど無数と言ってよいほど報告されています。つまり、中国帰国者は、日本社会での生活を通じて、だれしものがコミュニケーション上の誤解を体験していると言うことができます。

私たちは、帰国者の日本社会でのコミュニケーション能力の向上を援助する者として、彼らが中国社会で進めてきた自己実現の過程を日本社会でも、人々とのよりよき関係を築き上げることによって、更に促進して欲しいと思います。帰国者のそのような状態こそが、日本社会で適応的に生活している状態だと考えるからです。そのためには、日本人とのコミュニケーションにおいて、文化の相違による互いの食い違いを最小限にずる方法や食い違いが起こったときの修復の方法の習得も目指したいと思います。更には、異文化社会でコミュニケーションの体験をするからこそ可能な、これまで理解していたのとは違った社会の成り立ちや行動様式、価値観などの存在に気付き、自分の内なる文化を客観化することをも目指したいと思います。

これらのことに貢献できる日本語教育に近づくために、まず日本社会で帰国者の方々が適応を果していく上での問題点をコミュニケーションとの関係で更に詳しく見ていくことにしたいと思います。

## (1) 文化の相違

### ア 「相違」という言葉

帰国者が日本社会に接触する場合の「文化の相違」ということが話題になると、「日本人でもお互いに違いがあるし、同じ帰国者で

あっても人によってずいぶん違うようだ。文化の相違よりも個人差の方が大きい」と言う人がいます。また、「人としての共通点から見れば文化の違いなどは些細なものだ」と言う人もいます。

この意見も正しいと思います。日本人であっても、年齢や住んでいる地域、社会的立場及び個性などで言動に違いが出てきます。しかし、この場合、種々の階層や個性を越えて、日本人としての共通の特性が見られるのではないのでしょうか。ここで問題となっている文化の相違とは、この「特性間の隔たり」のことなのです。

更に、それぞれがもっている文化が違って人間としての共通性の方が大きいことも事実です。だからこそ、文化の相違を乗り越えて互いに人としてのコミュニケーションが可能なのです。しかしだからといって、文化が互いに違っているということを見無視してよいということではありません。互いにそれぞれから見て相手の文化が自分の文化と違っているのです。どちらの文化が優れているとか劣っているとかいうものではないのだという認識をもち、互いに相手の文化に敬意を払うことができはじめて、人としてのコミュニケーションができるのです。互いに合う合わないはあっても、本来人の個性に優劣がないように、文化の違いは、相対的なもので優劣はないのです。これまで、「相違」といつてきましたが、異文化間のコミュニケーションで最も大切なのはこの「相違」という概念だと思われま

### イ 「相違」の例

それでは、文化の相違は具体的にはどのように現れるのでしょうか。『手引』でも触れましたが、箕浦は、アメリカで生活することになった日本人と日本で生活することになったアメリカ人の引越してきた当初の状況について次のような例を挙げています。(箕浦康子 昭和62年文化庁「日本語指導研究協議会」西日本地区での講演)

アメリカに赴任することになって、日本人家族が引っ越してきた。すると、しばらくして近所の人達が次々に、家で焼いたクッキーや庭の花などちょっとした物を持って訪ねてきて、隣人として歓迎の意を表し、「慣れないことで戸惑うこともあろうが、何かあったら遠慮なく相談してくれ」と言ってくれる。日本人家族は、心から感謝するとともに、「アメリカはさすがに国際的で、外国人まで温かく迎えてくれる。外国生活でどうなるかと心配していたが、この分ならうまくやってくれるかもしれない」と安心する。

ところが、日本に赴任することになったアメリカ人家族の場合はどうだろうか。引っ越しが済んで数日経っても隣近所のだれも歓迎のあいさつには来ない。そればかりか、塀越しに顔が合っても目をそらされる。アメリカ人家族は、「やっぱり、国で聞いてきたとおり、日本人は外国人を受入れようとしない。仕事のためとはいえ、これから家族がこの国でやっていくのは厳しいことだ」と

悲嘆にくれる。一方、近所の日本人も、はじめは、引っ越しのときに見ていて、「我々も国際化したものだ、外国人のお隣さんができた」と好意を示していたものの、いつまで経っても引っ越しのあいさつにも来ないので、「隣に来たのはアメリカ人のようだが、やはり日本人を蔑視している。越してきても、あいさつにも来ない」と思ってしまう。

箕浦は、この二つは、単に引っ越しのときのあいさつの慣習の相違による互いの誤解に原因があると言うのです。アメリカでは、越してきた家族に、近隣の家族が歓迎のあいさつに行くことになっているのですが、日本では、越してきた家族が、近隣の家族に仲間入りのあいさつに行くことになっているので、アメリカに行った日本人はその誤解がプラスに働き、日本に来たアメリカ人はマイナスに働いたにすぎないと言うのです。

これなどは、文化の相違によって、コミュニケーションのきっかけが、うまく作れるか、コミュニケーションが断絶してしまうかを示していると言えましょう。

もう一つ、これも『手引』でも触れたことですが、中国帰国者と日本社会について別の例を挙げてみましょう。

日本人は中国文化を身につけた人々に対し「自己主張が激しい」と言うことがよくあります。反対に、中国人や帰国者もそうですが、欧米人など多くの外国人も、「日本人は思っていることをはっきり言わない」と言うことがあります。そのことは次のような誤解につながり、トラブルを生むことがあるわけです。

ある帰国者の家族が、自治体や住民の援助を受け地域での生活を始めた。しかし、あらかじめ厚意として住宅や家具調度などの最低限の生活必需品を用意したが、更に次から次と欲しい物を要求してくる。自治体などでは、「そこまでは、難しい」などと言っても、「別の地域に定着した帰国者は、こんなものももらった、こんなこともしてもらった。」と例を挙げて、重ねて要求してくる。はじめはそこまで言うのならと、何とか無理をしてそれに応じていたが、あまりに度重なるので、とうとう自治体も地域の人々も音を上げてしまった。

日本は察しの文化であり、「言わなくて分からないやつには、言っても分からない」と言うことさえあります。はじめは、帰国者家族が新しい生活をしていくのに最低限こんな物は必要だろうと察して、用意してあげたのでしょう。地域側は、これらの厚意を帰国者側もきっと察してくれているはずだと認識の下に、「十分とは言えないかもしれないが、更に我々でできることがあれば言ってくれ」などと日本的な社交辞令を言ったかもしれません。

ところが、中国には、「言わないことはだれも分らない」という諺があるとされます。何も言わないのにこれだけしてくれたのだから、言えばもう少し援助してくれるだろうと考えて、とにかく言っておかなければ損をするかもしれないということで要求したのだろうと思われまふ。そうしたら、それに対応してくれたので、それではもう少しと、更に要求を続けたのだと考えられます。帰国者には、きっぱりと断らない以上、日本人側がどう思っているかを察することなど思いも寄らなかったのです。

もちろん日本人も相手に何かしてもらいたいと要求することはあります。しかし、それを婉曲に表現し、何とか相手に察してもらえよう工夫をするし、相手が示している婉曲な諾否の反応を察して互いに傷つけ合わないような手段を採るのです。ここには、言わないことに価値を置く文化と言うことに価値を置く文化との相違があるわけです。

紙幅の関係で二つの例しか挙げられませんが、このような事例は枚挙に暇がないのです。正しく、文化には相違があり、常にコミュニケーション上の誤解につながる要素となると言うことができるのです。

特に、後者のように直接利害に関係のあるコミュニケーション内容であると、大きなトラブルに発展しやすいので、相互に注意しなければならないのです。

## ウ「文化」の要素

それでは、「文化の相違」と言う場合の「文化」とはどんなものを指しているのかを、簡単に整理しておきます。文化の構成要素については、これまで様々な学説が示されていますが、ここでは帰国者の定着問題を考えるために便利と思われる三つの要素に分けるものを示します。三つとは次のものです。

(ア) 社会の成り立ちに関する側面

(イ) 個人や集団の行動様式に関する側面

(ウ) 人の価値観に関する側面

これらは、別々に存在するわけではなく、人の生活上の具体的な行動では、総合的にかかわってくるものです。例えば、「小包を出す」という一つの行動には、(ア)としては、郵便行政のシステムや宅配便との関係などがかわってきます。(イ)としては、小包をどう作ってどういう方法で依頼するかな

どがかかわってきます。(ウ)としては、だれに、どんな時に、どんなふうに、何を小包として送るかなどが関係してくると思われま。

ここでは、その具体的な一つの行動を、「文化の相違」という面を配慮して達成させるということを目的とし、そのための行動能力の養成の方法を考えると、分かりやすくするために、便宜的に三つの要素に分けておこうというのです。

前に挙げた自動改札の例であれば、(ア)に対する知識の問題が大きいと考えられ、上の引越しの例であれば(イ)と(ウ)とに多く関係があり、帰国者に対する援助の例であれば、(ア)(イ)(ウ)すべてにかかわっているなどと、問題を三つの側面のどれが、どのように相違しているのかを、分解して整理するための方便として、役に立つと思います。

## エ 文化と帰属意識

では、なぜ文化の相違などといったことが起こるのでしょうか。

先に、「人は社会的存在である」と言いましたが、生まれたときから何らかの社会集団に属していると言えます。小さくは家族から大きくは人類という集団までの各層に属しているのです。また、成長とともに、乳児、幼児、少年という年齢による集団が変わっていき、それに伴って社会的な単位としても、家、地域の子供の社会、保育園・幼稚園、学校と属する集団が変わっていきます。

このそれぞれには、集団としての枠組みを規定し、集団としての存在を保つために、何らかの「規範」があると考えられます。この規範に基づいて、集団に所属する個人に対し、期待される役割と期待される行動の様式が決められているのです。個人がこの期待に沿っている場合は、褒められ、沿っていない場合は罰せられるのです。人は、その集団に帰属意識がある限り、自分の内部にその集団に属するにふさわしい価値基準を作り上げ、「構成員の一人」となっていくのです。

今、「規範」と言ったものを、ある集団の奥に潜んでいる文化の核と言い換えてもよいでしょう。そうすると、個人がその文化の核に沿って行う思考や行動の様式、個人が参画しているその社会の仕組みなどを、ある集団の表面に現れた文化と言うことができるでしょう。

もちろん、集団の規範ははっきりと明示されていないものの方が多いと思われま。先に、「一般に、日本社会という集団では、察するという行動が期待されているが、中国社会では、はっきり言うという行動が期待されている」と言いましたが、相反するこの二つの行動の規範が、それぞれの集団の構成員間では、普段は意識化されることはなく、行動はそれにのっとってなされているのです。

「子供には国境がない」と言われますが、成長するに伴ってそれぞれの国の文化を映す鏡として、その国の子らしく育っていきます。子供が採った一つ一つの行動について周りの者から評価が下され、子供はそれらを総合しながら、半ば無意識的に、その国の文化を自分の中にも移し入れていくのです。集団によって、新しくその集団に帰属した者に対し、文化は伝えられ、受け継がれていくのです。

また逆に、何らかの影響によって社会の仕組みや構成員の内面的な変化が起こると、集団の規範も変化していくこともあるのです。

## (2) 人にとってのコミュニケーション

### ア コミュニケーションをどうとらえるか

「コミュニケーション」という外来語は、すでに日本語になじんでいる言葉ですが、「意思の疎通」と日本語で置き換えられることがあります。しかし、コミュニケーション学という学問の分野では学者たちがより広い概念でとらえているようです。ここでは、帰国者の異文化適応との関係でコミュニケーションをとらえればよいので、必ずしも学者の論を学ぶ必要はありませんが、「意思の疎通」という概念だけでは不十分な点もあるので、以下若干の説明をしておきたいと思いま。

まず、人が二人以上いると、必然的にコミュニケーションが起こると言われます。例えば、あなたが道を歩いていたら、向こうから通行人が歩いてきて擦れ違ったとします。このとき相手と話しもせず目も合わせなかったとしますが、十分相手との間でコミュニケーションが起こっているというのです。相手からあなたはいろいろなことを伝えられ、あなたも相手にいろいろなことを伝えたというのです。

「何も伝えられてもいないし、伝えてもいないはずだ」と不思議に思われるでしょうが、このときの通行人があなたの家族だったらどうでしょうか。近づくにつれ互いに相手を認め、「何してんの、こんなところで？」などと尋ね合うといったことになるのではないのでしょうか。

そうならなかったということは、すれ違った相手の性別、体格、年格好、服装など相手に関する情報や、時間と場所と想定する相手がいる確率などの外的な条件との関係を瞬時に判断し、相手は知らない人だと結論づけたわけです。それだけの判断をするのに十分なメッセージを相手は伝えてきたと考えられます。また、あなたも同じように相手にメッセージを伝えたということなのです。

更に、だれもいなくても、エレベーターに残された香水の香りやせっかく掃き清めた玄関先に残された泥の足跡などの「残置物」は、こちらの感情に訴えかけるのに十分なメッセージだと言えます。

ここで、重要な点として、注目しておきたいのはコミュニケーションは言語だけでなされるのではないということです。通行人の例で言うと、身体的な特徴、動作や顔の表情、相手との接近距離や触れ合い、服装、視線、時間など、また香水などの香り、足跡などの残置物、話すときの音声の特徴や書くときの筆跡、沈黙などすべて相手にメッセージを伝える要素と言えます。これらは、「非言語コミュニケーション要素」と言われています。

また、どういうときに手紙を書いて、どういうときに電話を掛けるか、手紙は職場に出すか、自宅に出すか、どういう状況のときにどういう話題を出すかなどコミュニケーションの方法に関する知識も重要なものです。

子供は言語と同じように、実際のコミュニケーション経験を積み上げることなどを通して、これら、非言語コミュニケーション要素やコミュニケーションの方法に関する知識も、それぞれの文化に適合したものを学んでいくのです。つまり、これらもまた、当然のことですが、学ばなければ身につかないということも重要な視点です。

## イ 言語能力とコミュニケーション能力

上で述べてきたように、人がコミュニケーションを進めるためには、いわゆる言葉の4技能が正しく運用できることは、一つの条件であって、それ以外のコミュニケーションに関する諸能力や社会文化的な知識があることも大切な条件となるのです。

むしろ、帰国者のように、言葉がある程度のレベルに達する前から、なんとか日本社会で生活していくための行動能力をもたなければならないという状況にある場合は、これら、言語以外の諸能力・諸知識の養成は、必要不可欠と思われるます。

日本の生活の中でのコミュニケーションをとおして、言語の運用とそれ以外の諸能力・諸知識を獲得していくことが大切となるのです。それは、普通の日本人がそれらを獲得していく方法と同じと言えます。これらの個々の要素はこれまでも例を挙げてきましたが、独立に存在するのではなく、一つの意味のあるコミュニケーション活動の中で相互に有機的に関連しているものであり、コミュニケーション能力とは、行動・思考のための総合能力と行うことができるのです。

コミュニケーションの総合能力を養成するためには、まとまりのあるコミュニケーション場面を体験することが不可欠と考えられます。その最も理想的なものは、学習者にとってそれを行うことが必要な、実際のコミュニケーション場面でしょう。日本語指導者は、学習者とともに、それらはどんな場面かを考えて、その場面を設定することが必要となると考えられます。

## (3) 異文化適応

### ア 異文化での適応

人生は、よく旅に例えられます。「山あり谷あり、雨の日も風の日もあるが、春風に吹かれ、お花畑の小道をたどるときもあろうし、旅先の町で人の心の温かさに触れるときもあろう。困難なことも、道連れとともにそれを乗り越える努力をする過程で多くのことを学ぶことができる。そして、より大きな困難にも立ち向かうだけの力を蓄えることができる。楽しい、素晴らしい経験をとおしても多くのことを学ぶことができる。そしてその旅は、実りあるものとなる」と言うのです。

結婚式での先輩の人生訓のようですが、人生の一面を比喻していて、多くの人に共感されるものでしょう。

帰国者が日本という異文化社会で、適応し、人生を送っていくことを考えると、どうしても、「人生は旅」という言葉を思い出してしまいます。このことは、先に、「人は、一生、自己実現の過程を歩む」と言いましたが、それとも関係づけることができます。帰国者は、人生の旅あるいは自己実現の過程を、日本社会に移し、家族とともにその行程を進めていくのです。いくら「真の故郷」であっても、中国社会との相違は大きく、困難もそれだけ大きいのは仕方ないことでしょう。しかし、だからといってその困難は乗り越えられないものではありません。中国社会で、様々な問題を解決してきたことから言って、だれでも十分に乗り越えていけるだけの基礎能力はもっているのです。あとは、その力を、日本社会でも通用させる方法を見つけていけばよいのです。

ここで、わたしたちが、帰国者の日本定着を支援する側の者として考えておきたいと思うのは、帰国者が中国で身に付けてきた旅人としての問題解決の能力をどう見たらよいかということです。

「中国で通用する問題解決の能力と日本で通用する能力は別のもので、日本で生活するためには、新しく日本で通用する能力を身につけなければならない」という立場を採ることもあるでしょう。また逆に、「問題解決の基本的な能力は、どちらの社会で身につけようとそう違いはない。帰国者は、日本社会で問題を解決していく過程で、新たな問題解決の方法を獲得し、これまでの能力に積み重ねていくのだ」という立場を採ることもあるでしょう。

この「手引」では、後者の立場を採っています。前者の立場を採る場合は、「物を買ったり、食堂に入ったり、バスに乗ったりといった行動ができる・できないに関した能力については、基本的な能力は共通と言ってもよい。しかし、人間関係を作っていくなどということになると、中国の方法に頼っているのは逆効果になるのではないか」という意見が出るでしょう。正に先に挙げた自己主張の例などその典型のようですが、更に一步進めて考えてみると、新しくよき人間関係を作るためには、互いに相手の気持ちをよく知るという方法は間違っていないはずで、その方法は文化によって相違があるということを発見し、それに対応する能力を身に付けることが大切なのです。その能力も双方がこれまで「一つのことは、幾つかの違った見方ができる」という問題解決の基礎的な認識を身につけていけば、努力によって獲得することができると思われます。

以上のような視点から、帰国者が日本社会で旅を続けていく能力を「適応能力」とすると、原が言うように、「われわれが支援すべきなのは、(帰国者の)日本への適応ではなく、日本での適応である」(原裕視平成2年文化庁「日本語指導研究協議会」西日本地区での講演)ととらえるのがよいのではないで

しょうか。そのような理由で、ここでは、「異文化での適応」という言葉を使っているのです。

#### イ 異文化適応の段階

それでは、異文化での適応はどうすれば可能かを考えたいのですが、これは、簡単に結論が出る問題ではありません。そのことを考える前に、ひとまず、どのような段階を追って異文化において適応している状態に到達するかを帰国者の場合をモデルとして見てみたいと思います。

ただし、この異文化適応の段階は、二つに分けて考えます。一つは「異文化」に、もう一つは「適応」に焦点を当てたものです。

前者は、教育あるいは学習面から見た適応ということができます。それは、次のような3段階が考えられます。

(ア) 日本で体験する不可解な物事に気づき、それが文化の相違によることを理解する段階

(イ) 自分が身につけている中国文化も日本人(日本文化を身につけた者)から見たら不可解なのだというを理解する段階

(ウ) 文化の相違を調整して、日本人に真の自分が伝えられ、真の相手が理解できる段階

林さんという帰国者が、交通の遅れによって職場に遅刻した場合の「自問」という形を採ってこの3段階を考えてみましょう。

まず、(ア)の段階では、次のようなことが起こるのではないのでしょうか。

家から駅まで行くのに道路の渋滞でバスが15分ほど遅れてしまった。急いで出社すると、同僚にどうしたのか聞かれたので、理由を伝えた。そして早速仕事にかかったが、上司にも呼びつけられて「具合でも悪かったのか」と聞かれたので、「渋滞でバスが遅れたただだから大丈夫だ」と答えたが、なぜか知らないが不機嫌な顔をしていた。こちらも自分のせいで遅刻したわけではないのに、気分はよくなかったが、そのまま仕事を続けた。

その後、今度は電車の故障で遅れたときに、たまたま一緒になった同僚が、駅に着くと延着証明をもらい、電話で会社に連絡までするので、その分早く会社に行った方がよいのと思ったが、黙ってそれに従った。その上、出社するとすぐに上司の所へ行って、自分が悪いのでもないのに謝った。さすがにこれには抵抗があった。しかし、上司は機嫌がよく、「それじゃあ、こっちから庶務には言っとくから着替えて仕事にかかってくれ」と言うのだ。このときは、この上司は自分にへつらう部下が好きなのだったと思った。

しかし、その後も、同僚が遅刻するときは、同じようにするし、上司が遅刻したときにも、庶務課から、雪で電車が遅れているという連絡が入って、「今、主任から、30分ほど遅れるそうです」と我々にさえ伝えてくる。出社してきた主任は「悪い。悪い」と我々にも謝った。日本では、遅刻するときはできるだけ早く来ようとするのではなく、まず連絡して、出社したら謝るのが慣習のようだ。しかし、仕事では合理的な日本人にしては、どうしてそうするのか訳が分からない。

(イ)の段階も同じように考えてみます。

もしかして、こちらが、日本人のすることを合理的でないと思うように、日本人もこちらがすることを合理的でないと思っているのではないだろうか。わたしも中国では、工場で係長をしていたが、仕事にいい加減な者が何人かいて、時間どおりに来なかったり黙って休むことがあったが、来るのか来ないのか分からなくて、その日の予定が立たないで困ったことが度々だった。もし、電話があって遅刻するか休むのかを知らせてきたら一日の作業の予定が組めて便利だったろうと思う。しかし自分が悪くないのに謝るとするのは、どうも抵抗がある。一般に日本人は、軽々しく謝りすぎるように思う。

(ウ)の段階と言え、次のようなものでしょう。

日本人の多くはよく働き、だからこそ経済も発展しているのだと思う。遅れるときに、少しでも早く行こうとするのではなく、電話で連絡するのはなぜか、自分が悪くなくて遅刻したときにも謝るのはなぜか、自分で考えたことが正しいのかどうか同僚のSさんに聞いてみることにした。

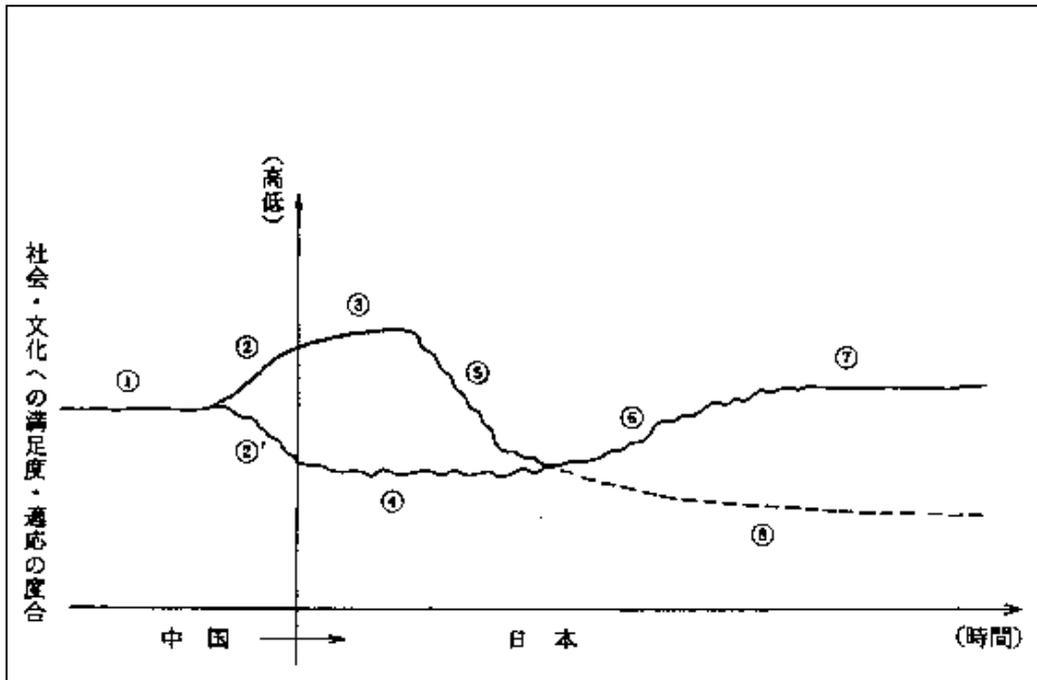
(Sさんから聞いたことは、次のようなことだった。「あまり考えたことはなかったが、突発的な出来事で遅刻する場合などは、まず連絡するのが常識になっている。子供たちも学校を休んだり遅刻したりするときは、親が連絡帳に書いて判を押して友達に頼んでクラス担任まで届けてもらうことになっている。なるほど、林さんが言うような理由があると思う。でも謝るとするのは、日本人が謝るのが好きだというわけではない。なにか相手に不愉快な思いをさせたからには、こちら例にも責任がないことはないと思う。バスの故障であっても、始業時から終業時までには決められていて、その時間はその人の作業を当てにしているのだから、その期待にこたえられなければ、自分が悪いが悪くないかにかかわらず、謝ってもよいのではないか。むしろ相手から謝られれば、その後、そ

の相手を、道路の渋滞など予測可能な事態も見込んで、余裕をもって出社してくれる頼れる仲間として、評価されるだろう。頭を下げるのは、ただなんだから、謝って済むことならいくらでも謝ってよいのではないか。謝っている相手をそれ以上責める人はいないはずだ」と言うのである。Sさんの言うことも日本では納得できると思った。）

Sさんには、これからも、つい中国の習慣で謝まらなかつたり、ほかのことで日本人が変だと思ふことをするかもしれないが、そのときは、日本人の「奥ゆかしさ」で黙っているのではなく、それはおかしいと率直に指摘してほしいと頼んだ。

以上は、段階を追って異文化を理解して、その中で行動能力をつけていく例ですが、日本で生活していれば自然にこのような段階を踏んで異文化適応能力が発達していくとは考えられません。人によってはいつまで生活しても(ア)の第1段階にさえ至らない人もあるようです。いつまでも、「日本は変だ、日本人はおかしい」と言う人も少なくありません。それを乗り越えて、(イ)の第2段階、(ウ)の第3段階に移行していくためには、何らかの方法で、その能力を養成していかなければならないと考えられます。

さて、ではもう一方の「適応」に視点をおいた適応の段階ですが、心理面から見た異文化適応の段階ということができるでしょう。これについては、(社)全国社会福祉協議会の『入郷随俗』の解説に詳しいのでぜひ参照いただきたいと思います。ここでは、『入郷随俗』で提示している段階を、以下抜粋して示すにとどめます。



- 中国社会で適応した生活
- 帰国前の昂揚期
- 帰国前の不安と心配の時期
- 日本社会・文化とのハネムーンの時期
- 現実が見えてきて不安定になる時期
- 不安定期あるいは不適応状態の持続期
- 適応開始の時期
- 適応安定期
- 不適応状態としてのカルチャーショック症候群

## ウ 異文化不適應

前ページの『入郷随俗』の段階では、適應の段階だけではなく不適應状態も含まれています。からの中で、        、        だけが真の異文化適應している状態と言えます。それ以外で、特に        や        の異文化不適應の状態というのは、精神的に大きな問題があるわけです。

では、「異文化不適應」とは、どのような状態で、どのような問題があるのでしょうか。詳しくは、『手引1』の8ページの「心の問題」という項目、先の『入郷随俗』の8ページの「定着・自立への障害と異文化不適應の現状」という章などをぜひお読みいただきたいと思います。ここでは、異文化不適應の例を一つ挙げて簡単に説明します。

一家で日本に移り住んで1年半になる日本人孤児の夫の劉さんは、中国では溶接の技術が認められ現場主任だった。日本語などの勉強を1年間した後、身元引受人の紹介で溶接工場に就職した。しかし、機械が違うので戸惑うだけではなく、見た目ばかりを気にしているようで、「仕上げが雑だ」と言われるなど面白くないことが続いたので、3週間ほどで辞めてしまった。身元引受人には、何とかして続けるように説得されたが、日本では、職業は自分で選べるのだから勝手にさせてもらいたいと言った。しかし、その後身元引受人の態度が変わって、新しい就職先の面倒もみてくれないので、劉さんは、身元引受人が前の溶接工場から賄賂でももらっていたのではないかと思っているのである。

2か月ほど、ぶらぶらしていたが、市役所の係官から職業安定所に行くように勧められ、今の鉄工所に溶接工として就職した。しかし、ここでもまた技術が違うということで、若い溶接工の下について見習いから始めることになった。機械の操作などが複雑で、若い工員から叱られたり、ばかにされたりする日が続いている。それでも、またすぐ辞めたらだれも面倒を見てくれないと言われているので、何とか1か月は勤め、給料ももらった。しかし、いくら頑張っても技術はなかなか身につかないし、日本語がよく分からないので、日本人同士が話していると何を言っているかが分からない。自分の陰口を言っただけにして笑っていると思うこともある。毎日毎日が苦痛ではないと言っているのである。

家に帰っても、子供たちは日本語が上達し、このごろでは兄弟同士、日本語で話すことが多くなった。中国語で注意をしても、日本語で口答えをしたり、時には、親の日本語を下手だと言って笑ったりもする。

最近、職場でも日本語で受け答えすることができなくなってしまった。週2回夜に行っていた日本語教室にも足が向かなくなった。先生や帰国者の仲間からも誘われるが、その度に頭が痛くなって吐き気がする。「日本語が怖い」という気持ちで、どこでもよいから日本語が聞こえない所に行きたいと思うようになってしまった。いっそのこと、自分の両親も兄弟も長男夫婦もいる中国に帰ろうかとも思っていると言っているのである。

さて、いま劉さんの状態を例に挙げましたが、典型的な異文化不適應状態を示していると思われます。心身の状態としては、職場での毎日毎日が苦痛だということ、他人が自分のことをばかにしていると思ってしまうこと、日本語教室に行かなければならないときになると頭痛と吐き気が起こること、日本語が聞こえない所に逃げて行きたい気持ちであること、中国に帰りたいこと等が挙げられています。

劉さんの例で言うと、異文化である日本社会の生活で、これまで中国社会で身につけてきた、大人として、溶接工として、そして家の主人としての行動能力（問題解決の能力）とそれによって認められてきたそれぞれの立場での権威が崩れてしまっているのです。つまり、このような自己の能力の喪失感によって、心身に異常を来している状態と考えられます。

日本語教室に誘われると頭痛と吐き気が起こるといのは、いわゆる心身症の状態で、自分の能力の喪失感の原因の一つである日本語の学習に対する嫌悪感を、体の状態が知らせていると考えられるわけです。

このような状態では、劉さん自身が、何よりも自分の有能さに変わりがないことを確認できなければなりません。そのためには中国語で話せる場を確保すべきです。特に家庭では、日本社会にあっても、日本語ができる方が中国語ができることより優れているわけではないということを皆が理解し、家族同士が同等にコミュニケーションできる中国語の価値を尊重することが大切でしょう。

職場でも、帰国者を仲間としてその立場を尊重し、日本語が不十分だとか日本の技術をもっていないとみなすのではなく、自分たちも中国語が不十分であり、中国の技術をもっていないということも自覚し、劉さんが徐々に慣れていけばよいとしなければならないのです。可能であったのなら、高等職業技術専門校（職業訓練校）など損益などを考慮しなくともよいところで技術訓練をしておくといわれます。

日本語の学習についても、指導する側が、必要性を強調するのではなく、過度な要求によって学習者

に心理的に負担を掛けないように配慮して、学習者が自分のできる範囲で学んでいけることを主に、それぞれの帰国者の日本社会での必要な生活行動能力を養成する目的で、カリキュラムを計画することが望まれます。さらに、併せて日本語教育に、日本社会での異文化適応能力をも養成する目的を加えることが必要と思われます。

## エ 異文化適応能力（異文化での自己実現のために）

それでは、異文化適応能力を養成するためのガイドラインは、どのようなものなのでしょうか。残念ながら、これについては、ガイドラインなどはないというのが正しいでしょう。それは、帰国者のそれぞれが中国での生活をとおして身につけてきた問題解決の仕方にも相連があり、また、帰国者に接する日本人側にも同じことが言えるからです。

しかし、基本的には、文化の相違を理解し、互いに相手文化を尊重し、表面に現れた相手の文化は、現状では何らかの必然性があるのだということが判断できることが最小限必要だと言えます。上の林さんの例でも、林さんは、遅刻する場合、日本社会のやり方が中国とは違っていても、「自分は、それをこう思うがそれは正しいのだろうか」といった柔軟な観点をもち、自分の判断を絶対のものとしなかったことは、その後の理解につながっていると思われます。

実際の体験の一つ一つを通じて、自分なりにこうではないかと仮説を立てて、新たな体験によってそれを確かめていき、最終的な結論を下すのはできるだけ先に延ばすということが異文化適応能力の基本だと思われます。

このような、異文化適応能力の基盤となる性格面での特質について、近藤はC・アンドリューの論を紹介しています（近藤裕 1989年『異文化適応講座』TBSブリタニカ25ページ）。そこには、10の項目が挙げられていますが、その中でも、「判断保留の能力 - 価値判断、評価をする自分の価値観や自文化独自の価値体系を理解するとともに、自文化にはなく相手文化にある価値観と、その意義を理解する。性急な評価や断定的な評価を保留する、など。」は、上のことと関係が深いと思われます。さらに、異文化において「たぶんこうではないか」という仮説さえできない不安定な状態にあっても耐えられる性格も大切だとよく言われます。

このような性格は、もともと備っているのではなく、異文化体験を通じて徐々に作られていくものだと思います。異文化適応を目指した日本語教育は、このような遇応に役立つ性格を、帰国者自身が形成していくことを支援することを目的として内容・方法を開発しなければならないと思います。

## 2 Q & A

### 【質問1】日本語教室が溜まり場となる問題

私の日本語学校では、教室がサロン化したとでもいうのか、学習者の溜まり場ようになり、日本語の学習に来るといよりも、学習者同士の情報交換の場といった状態です。これをやめさせて学習させたいのですがどうしたらよいでしょうか。

【解説】日本語教室は、帰国者の日本語学習のために設けられているものです。そこで日本語を学ぶのはそっちのけで、情報交換ばかりをしているという状態に対し、指導者として戸惑われるのはもっともだと思います。それでなくても、週一、二度の少ない学習の機会なのですから、なんとか学習に集中してもらいたいものです。

それでは、学習に集中させる何かよい方法があるのでしょうか。そのことを考える前に、ひとまず、なぜ教室がサロン化するのかを考えてみましょう。

34 ページに、異文化不適應に陥った劉さんの例を示しましたが、この例ほど深刻でなくても帰国者の多くは、日本社会において、中国社会で身につけた問題解決能力が思うように発揮できずに、欲求不満の状態にあると思われます。そのような仲間が集って、「同病、相哀れむ」式のやり取りができることは、自分だけではなく、皆、大変なのだということが分かり、頑張る意欲にもつながらずと思われず。また、何よりも、普段、家族など限られた相手に対してしかできない、中国語で互いに互いをぶつけ合えることは、自分が自分であること（アイデンティティー）が確認できる貴重な時間であると言えます。日本語力の高い留学生などでも、「日本での生活で大切なことは何か」という質問に、「母語で思い切り喧嘩ができる相手を作ることだ」と答えています。このことは、自分を他人にぶつけることができはじめて、自分自身が確認できるということを象徴しているのではないのでしょうか。自分を見失わないということが、適應の最低条件だと思われず。

また、もし、帰国者が日本で生活するために互いに役立つ情報交換をしているとすれば、言葉が不自由な分を補い、行動能力をつけることにプラスになります。さらに、行動を通じて言葉も含めたコミュニケーション能力を養成することにつながり、むしろ歓迎すべきことでしょう。

以上のように考えると、日本語教室の役割である、日本での適應のための諸能力を養成するということがと教室のサロン化は矛盾しないことになりず。しかし、日本語学習ということを見ると不満が残るのではないのでしょうか。

それでは、日本語学習とはどうあったらよいのでしょうか。それは日本語学習をどう考えるかということとかがわってくるのです。このことについては、第4章とも関係してきますので、詳しくはそちらを御覧いただきたいのですが、経験的に言うと、「学習者にとって、本当に必要なコミュニケーションを行うことが、コミュニケーション能力を養う最も効率的な方法だ」と考えられず。

ですから、サロンでの話題に沿って、学習者に興味のあるものを選んで、日本語でのコミュニケーション能力及び実質行動能力の養成につなげていってはどうかと思われず。

例えば、商品を安く購入するためには、どんな店でどうやって購入したらよいかを、「物の値段調べ」や「日本人に問い合せる」といった授業に組み立てることが可能だと思われず。

また、日本人や帰国者の先輩との交流を通じて、日本語によるコミュニケーションも含めた総合的な問題解決能力を養成する授業に組み立てることが可能だと思われず。

日本語の指導とは、日本語の構造体系を、指導者が決めた手順で、効率よく覚えさせるというものだけではないはずず。学習者が学びたいという内容を、学習者の望む方法で学んでいくといったものでもよいはずず。むしろ、帰国者にはそのような方法が適している場合が少なくないはずず。

### 【質問2】異文化適應と日本語指導

私は、日本語指導者として帰国者の方々と接してきましたが、最近いろいろな研修会などで講師の話聞いてみると、「異文化適應」とか「精神衛生」など直接日本語教育とはかかわりのない話題が多いと感じられず。日本語指導者は、日本語だけ教えればよいと思われず。

【解説】帰国者は、私たち日本語指導者から見て「学習者」ですが、一方では、生活の場を日本社会に移した「生活者」でもあるわけず。そして、私たちが日本語の指導をしていることには、帰国者が日本での生活をよりよく送れるためという目的があります。言葉の学習は、教養とか研究のためではなく、まさに、生活に密着しているのです。

この第3章では、人が人として生活していくためには、ほかの人々と何らかの関係を築かなければならず、その関係を築くためにはコミュニケーションが必要不可欠だということを見てきました。日本で生活する以上、コミュニケーションは、日本人と日本語ですることが多くなるということはしかたありません。

そのためには、中国と日本との文化の相違から生じる問題を、互いの努力で克服しなければなりません。少数派である帰国者は、多数派である日本人に圧倒され、自分自身を見失って、自分を過小評価してしまうことがあり、結果として、なるべく日本人、日本社会と触れ合うことを避けるということになりがちです。しかし、それでは、いつまでたっても有能な自分を取り戻すことができず、精神的に充実した生活を送ることはできません。

私たち日本語指導者は、二つのことを考える必要があります。まず一つは、日本社会と積極的にかかわっていくために必要な、コミュニケーション能力を具体的な状況を設定して学んでもらうことです。このとき、大切なことは、その学ぶ過程が、日常生活をとおして、自分で学んでいく「学び方を、学ぶ」ことに役立つものにするということです。どんなに時間をかけても、教室ですべてのことが学べるわけではありません。特に、帰国者が学ぶのは、生活力です。この能力は、ほとんどの場合、成長し、年をとりながら、体験をとおして学んでいくものです。学校で直接教えてもらうことは、そう多くはないのです。

もう一つは、日本社会で生活の中から学んでいける心を作っていくということです。まず、心を開いて新しい社会での体験を自ら進んで求めていけるようになってもらいたいものです。更に、心を守ることも大切です。生活とは、人々相互の利害と一体化したものでもあります。その中で文化の相違から互いに誤解し合い、相手を責め、更には自分をも責めるということが起こることもあるでしょう。「相手」とは、人の場合だけでなく、日本社会であったり国家としての日本ということもあります。このことは、日本語教室の中でも日々起こっていることを思い出せば十分だと思います。このような、文化の相違や相違が原因で起こる誤解などに耐えられる心を持ち、それを解決していく能力も大切な生活行動能力の一つなのです。

このような指導を目指すのであれば、「言葉」という単位ではなく、更に大きな「コミュニケーション」という単位の能力の養成が必要です。そのためには、文化の相違ということがどうしてもかかわってきて、生活者である学習者の心理面をも考えて、指導を組み立てることが重要です。このように総合的な能力の指導を目指す以上、指導者としても「異文化適応」とか「精神衛生」といったことの知識が必要なわけです。

ただし、日本語指導者はその方面の専門家ではありませんので、状況によっては、カウンセラーや精神科の医師、心理学者などとの連携も必要です。私たちは、怪我や病気のときに売薬で治療するか医者にかかるかを判断したり、怪我や病気にならないうちに、自らの判断で対処するとか、予防注射や専門家のアドバイスに頼るとかを、決断していますが、異文化適応や精神衛生のその程度は基礎知識が必要ということなのです。

### 【質問3】よい人間関係を作るための指導

教室で日本語を学習する時間が短いため、取り上げる学習項目が限られてしまいます。周囲の人とうまく協調してやっていける人間関係が作れるように、生活面の指導もしたいのですが、なかなかできません。結局、学習者自身で努力するしかない状況ですが、指導者から何かアドバイスできることはないでしょうか。

【解説】異文化社会で適応していくためには、いろいろな形で他の人々との関係を築いていくことが必要不可欠であることを繰り返し述べてきました。特に、中国が人脈（人と人とのネットワーク）を大切にし、人脈がないと生活さえしにくい社会なので、帰国者は、日本で日本人とよい人間関係を築きたいとの思いが強いと考えられます。

しかし、20 ページ、「相違の例」で、示したように、文化の相違などによってよい人間関係を築くのは簡単でないのが現実です。日本人は人の気持ちを思いやると言われますが、残念ながら、それは、「ウチ」の者に対してであり、「ヨソ」の者にはなかなか心を開かないというのが定説です。

ある大学病院の精神科の医師は、治療を担当した患者の中で症状の重い患者は、留学生が一般の学生に比べ明らかに多いということを指摘し、更に、抑鬱症状の患者の7例について、すべてが失恋がきっかけとなって症状が出たと報告しています。これは、日本での学生生活を通じてなかなか日本人の仲間にも恵まれず、たまたま知り合って関係を深めた相手との別れにより、自己を喪失した状態に陥り、抑鬱の症状として現れたと考えることができるのではないのでしょうか。

人は、ほかの人と関係を作り、相手に自分を写すことで、はじめて自分の存在意義が確認でき、それによって心を平常に保ち、一人の人間として活躍できるのです。人は、ほかの人から認められると、より一層張り切って、更により結果を生み出すものです。逆に、ほかの人から悪い評価を得たり、無視されると、何ごとにも消極的になり、投げやりになることもあるのではないのでしょうか。帰国者の定着が、うまくいくかどうかは、人との関係をうまく作れるかどうかにかかっていると断言してもよいでしょう。

それでは、どうしたら帰国者が日本社会で、よい人間関係を築くことができるのでしょうか。もちろん

ん、帰国者同士の間関係も大切ですが、それは、中国での経験に従えば、だいたいよいと考えられますので、ここでは、日本人と様々な立場で関係を結び、維持・発展させていく方法について大切なことだけ述べておきます。

最も大切なことは、中国と日本では文化に相違があることに気づき、人間関係を築く方法も例外ではないことを、理解することでしょう。更に、違いは、体験をとおして一つ一つ発見していかなければなりません。その過程で、自分が理解できないことがあっても、「日本人（あの人）は、こうだめだ」と結論をくだしてしまうのではなく、「何か理由があるのではないか」と、判断を保留し、だれか信頼できる人に尋ねたり、別の体験で確認するなど、気長な対応が大切です。文化の違いを、個人の人格がおかしいと勘違いすることのないようにしたいものです。

逆に、自分を正しく相手に理解してもらうことも、大切なことです。自分の行動が中国式で、相手に理解されないことがあるかもしれません。相手にそのことを伝えて、「おかしいところは、遠慮な 教えてくれ」と言うておくこともよいでしょう。

このようなことは、能力として養成されるものです。そして帰国間もない時期に、帰国者がどのような人々（一回限りの関係、近隣や職場での恒常的な関係、身元引受人や役所の職員、子供の学校の関係者などその他特別の関係等）と接触するかを考えて、それぞれ具体的な場面を設定して、日本語でのコミュニケーションと一緒に学習活動として組み立てることが大切です。指導に取れる時間は限られていますが、総合的な学習が可能ではないか、第4章の指導例も参考にして、もう一度考えていただきたいと思えます。

#### 【質問4】家庭で中国語を使うことについて

親は、子供が中国語を忘れるのではないかと心配し、二世である子供は、親の日本語能力の低さから、親として尊敬する気持ちを失い、軽蔑したりすることがあると言うのですが、家庭では日本語と中国語のどちらを使うように指導したらよいのでしょうか。

【解説】質問のような件は少なくないようです。34ページの「不適応」で例とした劉さんも家庭的には同じような苦労をしているわけです。

帰国者が、家庭で中国語を使った方がよいのか日本語を使った方がよいかは、事情によって違うわけですが、異文化社会での適応過程という精神的にも不安定な状況では、生活の基盤となる家庭でのコミュニケーションだけは、できるだけ密にとるべきだと思います。家族が皆、日本語で十分に自分が表せるという場合は、家庭でも日本語を話せばよいわけですが、もし家族の中のだれかが中国語でなければ不十分にしか自分が表せないならば、家庭内共通語として中国語を用いるべきでしょう。

また、二世・三世の子供たちに、もともと自分の母語である中国語や母文化である中国文化の保持を奨励することは、二つの面で必要なことと考えられます。

その一つは、質問3でも述べましたが、人は自分の存在が認められてこそ、その持っている能力を更に発揮すべく努力すると考えられるからです。自分の中にある中国語や中国文化についての能力が認められてこそ、日本語や日本文化を学ぼうという意欲が湧くはずで、不自然に日本語・日本文化に迎合するのでは、友達にも、完全に認められないはずで、むしろ、自分が身につけている中国語や中国文化を友達に認めてもらうことが必要でしょう。そのためには、学校の担当教師などにも協力を得て、子供の社会でもそれらを認める雰囲気を作らなければなりません。

もう一つは、子供たちの将来を考えて、中国語や中国文化についての知識は、ほかの日本人の子供にはない長所であり、日本語や日本文化の知識の不足を補って余りあるものだとすることを理解させる必要があります。一般的に言って、子供たちは、比較的短期間に、日本語や日本文化になじんでいきます。そのときに、中国語や中国文化も身につけていることは、多重言語・多重文化者として、国際化が進展している今日、誇るべきことです。

ところが、最近、日本人の帰国子女についての研究では、日常の生活で使われる言葉（生活言語）と物事を論理的に考える思考のための言葉（知的言語）には、習得上区別があり、後者（知的言語）については一つの言語をある程度自分のものにしないうちに、別の言語を導入し、どちらの言語も中途半端な状態が続くと、どちらの言語でも論理的な思考が不十分にしかできなくなることがあるという報告があります。具体的には小学校中・高学年では、学習の言語を一つに統一した方が無難だということです。帰国者の子供たちの場合、普通の小学校に通学するならば、学習の言語については、早く日本語でできるようにした方がよいと思われます。このことについては、指導者は、あらかじめ知識を蓄えておくことが大切でしょう。（小野博：海外帰国児童・生徒の英語と日本語語彙力の変化）

もし、子供たちが、親たちを日本的でないことで軽蔑したり、日本人の友達に会わせるのをはばかっているなど、家族の結束が崩れかけている場合などであれば、何とかして、結束を強め、皆で日本社会

と積極的にかかわっていこうという気持ちを取り戻す必要があります。小学校高学年以上の子供であれば、親たちの歴史などについても自ら知っていこうとさせることも一つの方法かもしれません。

いずれにしても、日本語よりも何よりも、家族は大切なものだということには間違いありません。

#### 【質問5】職場での日本的なコミュニケーションについて

はっきり言えば通じると考え、遠慮した表現を使おうとする気持ちがなく、職場でも孤立しがちな学習者がいます。また、日本人の婉曲的な感情表現が理解できないため、日本人は言うこととすることが違うと思っています。どのように指導したらよいのでしょうか。

【解説】日本人は、外国人の多くに対し、意思表示をはっきりし、自己主張が激しく利己主義だと感じるようです。多くの外国人もまた、日本人は物事をはっきり言わないので、何を考えているのか分からないと言います。

このように文化によって行動様式が相反する場合は、どちらか、相手のやり方に従っても実害がない場合、そちらが相手に合わせるというのが鉄則です。この場合、外国人は日本式の方法に合わせたくても、日本人は自己主張をしないとと思っているのですから、日本人が率直に自己主張をすればよいわけです。外国人は、それを正当な行為と考えるわけですし、自己主張しすぎる利己的な人とは思わないのです。とは言え意識を変えることは簡単ではありません。

21ページの例にも引きましたが、帰国者としては、要求に対してできないことはできないと言ってくれた方が理解しやすいのです。無理をしてやってくれながら、どうにもできなくなると、最後に、人格に関することとして、すべてを否定されるのでは理解できないと思われまます。

外国人との接触がそんなに多くない日本人は、行動の「美意識」として、相手に察してもらうことを期待する日本式の形での要求表現しかできないのが普通でしょう。逆に、日本人は、相手の立場になって、相手がしてほしいと思うだろうことを察し、可能なことならば、できるだけそれにこたえることが善意だと考えるのです。ですから、相手から直接的な表現で要求されると、(帰国者や外国人が自分をはっきり表現するといっても、日本人と同じように、そう簡単に相手を批判する訳はないにもかかわらず)単なる要求だけで

なく、自分(たち)が、そのことを察することができず、配慮が足りなかったことを指摘されたとも思ってしまうことがあるのです。慌ててそれに対処しようとしませんが、相手の要求をかなえられないときには、婉曲な断り方をします。しかし、相手はその表現を断りだとは気づかず、率直な要求と婉曲な断りが繰り返され、互いに自分を正当化するために、日本人は「帰国者(外国人)は自己主張が強い」という日本的な判断によりレッテルを貼ります。帰国者(外国人)は、日本式の婉曲な自己主張が理解できず、「日本人は、何を考えているのか分からない」という中国(外国)的な判断によりレッテルを貼ります。

自分の表し方の相違は、職場でのコミュニケーションでは、特に問題が多いのです。企業は営利を追求する組織であり、そこで働く職員には、それぞれの役割に応じて営利を生み出す責任が課せられているわけです。本来、曖昧なコミュニケーションは、誤解を生み利益を損うことにつながり、日本人同士でも、避けるべきこととされます。しかし、日本人と帰国者ではその程度に違いがあります。

日本人側は、率直な表現を心掛、帰国者側は、日本人の言ったことを、自分なりの表現で言い直して、確認するなどの方法を身につけることが、大切です。

また、帰国者側の自己主張についても、日本人側にある程度理解してもらわなければならない面もありますが、特に日本人が好ましく思わない自己主張はどんなものを理解し、それに対処することも必要です。一つの方法としては「言い方が下手ですが」とか「おかしかったら言ってください」などと枕言葉を言ってから、意見などを述べることもよいでしょう。

教室では、帰国者が経験したことをもとに話し合い、相違を発見し、皆で、どう調整したらよいかを考えるという方法が効果的でしょう。この話し合いは、日本人や帰国者の先輩などにも加わってもらい、必要なら通訳をつけて、「率直」な意見交換とすべきです。

#### 【質問6】意思疎通が困難

私は、簡単な中国語しか分からないし、学習者は、まだ日本語があまりできないので、互いの言いたいことが正しく伝わらないことや理解し合ったつもりで誤解していたということが時々あります。誤解を避けるためには、どんな点に注意すればよいのでしょうか。

#### 【解説】これは、指導者と学習者とのコミュニケーションの問題です。

基本的には、学習者集団と指導者集団とは、何らかの媒介語によってある程度の実質的なコミュニケーションが図れなければなりません。何をどう学ぶかという根本的なことを学習者と指導者が確認した上でなければ、指導はできないと考えるからです。

学習者の中に、日本語ができたり、それ以外の媒介語で指導者と話ができる者がいなければ、どうしても指導者集団の中に中国語が堪能な人がなければならぬわけです。もし、そのような人がいなければ、何らかの形で、通訳をお願いすることが必要だと考えます。

特に、教室の期が始まったときや新しい学習者が入室したときのガイダンスの期間や、実習、見学といった日本人との交流活動を行うときには、注意事項の徹底のためばかりでなく、それらの活動を学習者主体とするために、少なくとも学習者の参加意識を高めた上で実施するために指導者と学習のコミュニケーションは大切です。

面倒なことも多いと思いますが、なんとか通訳の協力者を捜してほしいものです。

しかし、通訳者は、日本語も中国語も完璧である必要はありません。地域に住んでいる中国語を学習中の日本人や中国からの留学生とか研修生など、意外と少なくないはずで、それらの人の協力を仰ぎ、多少時間をかけて、多少の誤解は恐れず、しかし、皆で誤解を避ける配慮をしながら話し合うということが大切なのです。

ほとんどの機関で、何かあったときなどに、学習者の中で一番日本語ができる者に通訳を頼むということをしていると思います。これも重要なのです。

むしろ、互いにコミュニケーションをとろうとする努力こそが必要だと言えるでしょう。このような実際に必要なコミュニケーションをなんとか図っていくとする過程で、学習者も、コミュニケーションを図る工夫など、実際から学ぶことは多いはずで、

ところで、指導者は中国語ができなければならないのか、ということが話題になることがあります。皆さんはどう思われますか。

これは、考え方にもよりますが、複数の指導者がいる場合は、中国語ができる指導者と、できない指導者の双方が必要だと思います。

「指導者は一方的に教え、学習者は一方的に覚える」という学習観に立たない限り、学習者と指導者のやりとりの中に、必然的に相手から聞き出したい情報というものが生れるはずで、もし授業で「家族の紹介」という話題の学習が組まれているとしたならば、指導者には、学習者の、中国に残っている家族はいるのか、その人たちは何をしているのか、将来日本に来るのかなどが本当に聞きたい情報でしょう。また、学習者には、指導者が若い場合なら、結婚しているのか、いないのか、子供は何人かなどは、かねがね聞きたかったことでしょうし、年配の場合ならば、子供の職業やいつごろ結婚させたいのかなどが聞きたいことだと思います。

このように学習者のコミュニケーション能力を養成するうえで必要不可欠なことは、コミュニケーションの内容に対する興味と、発話や聞き取りを行いたいという意欲とがつながっているようになることです。せっかく実際のコミュニケーションが行われようとしたときに、中国語の分かる指導者が、学習者に「日本語で教えてください」などと指示することは、もったいないことです。このような場合、中国語があまりできない指導者となれば、日本語を媒介とした真のコミュニケーションができ、更にそれを上手に言う練習の意義も理解されるのです。

国語能力ただし、指導者が、中国語を学ぼうとすることは、学習者に近づこうとすることですし、重要なことは言うまでもないことです。

## 第2 節 学習をどう考えるか

### 1 自己学習能力の育成について

帰国者が日本社会で適応して生活していくには、種々の能力を身につける必要があります。そして、その能力は、本来自分自身で身につけなければならないものです。

それは、日本語教室などで指導者が教えるには、個々の帰国者のすべての状況がカバーできないという点で、量的にも質的にも限界があるからです。つまり、指導者は、学習者にできるだけ多く知識を与え、訓練を繰り返すことによって適応のための能力を高めようとするのではなく、学習者ができるだけ早く自分で自分の能力の養成ができるように、学習者が学び方を学ぶための援助をすることが必要だと考えられます。

ここで考える日本社会で適応していくための能力とは、日本という異文化社会に必要な「自己実現のための問題解決能力」を指しています。そして、その能力は、新たに作り上げるのではなく、中国社会で身につけた生活上遭遇する様々な事態にどう対処したらよいかを判断し行動する能力（これを「問題解決能力」と言いました）の上に積み上げられるべきものだと考えます。

本項では、帰国者自身が、日本社会の日々の生活体験をとおして、主体的に学び、これらの能力を養成していくために、初期の、学び方を学ぶという段階で、指導者側が把握しておくべき「自己学習能力」という視点について触れておこうと思います。

#### (1) 「学習」とは

小さな子供は、自分をとりまく環境から絶えず学んでいます。はいはいを始めたばかりの時期は、親は子供から目が離せません。手当たりしだい物をつかんで口に入れます。親は、危険なものは、子供の手の届かないところに置くように心掛けますが、それでも思いがけない物や一時的に置いたものに触れたり、口に入れたりすることがあります。火の点いたたばこをつかんでしまったり、ヘアピンを飲み込んでしまったり大変なことになります。

しかし、これらの体験をとおして子供は、安全なものや危険なものを区別する直感を養っていくわけです。ただ、これだけでは、動物の行動とあまり変わりがありません。ところが、人は、これらの体験を重ねながら、それを概念化することができます。つまり、子供にとって不快な体験と、親の「ばっちょよ」、「あちちよ」、「あぶいよ」といった言葉や声の調子などを結びつけ、自分の行動を操作する判断の基準にするということが出来ます。個々の体験を概念化し、それによって未知の事態でも類推によって対処しようとするわけです。少し大きくなって一語文を話せるようになると、一人で遊びながら、綿ぼこりなどをつかんで、「ばっちょ、ばっちょ」などと言っていることがあります。物を観察して、これまでに作り上げた概念に照らし合わせて判断して、自分の行動を自らが規制しているのです。

さらに成長すると、観察、体験した事実が、これまでの概念で判断できないことに対し「どうしてよ」、「なぜ」と疑問をぶつけることがあります。小学生ぐらいになるとなかなかおもしろいことに注目して、それを概念化しようとします。

テレビのまんがを見ながら、「どうしてナウシカ(まんがの主人公)って、独り言が多いのかな」と、疑問が湧きました。その疑問が別のテレビまんがを見ながら、「そうか。(まんがの主人公が)独り言、言わなかったら思ってること分かんないんだよね」と仮説にまで発展します。そして、まんが本を見ながら、「やっぱりそうだよ、まんが(の本)だと話したことも、考えたこともみんな書いてあるもんね」と、仮説を検証し概念に作り上げるといことをします。

このような、自らが体験したことから仮説を立て、新たな体験によってその仮説を検証し、概念化していく行為を、「学習」あるいは「学び」と呼びます。人は、生れながらにして、学ぶ存在なのです。学ぶことで、よりよく行動することができるようになり、行動することで学びが促進されるわけです。こうして問題解決の能力が養成されるのです。

このように考えると、学習とは個人の体験と密着した行為で、本来、個人に属したものだと言えます。つまり、人は、生れながらにして、学びたいことを学ぶ存在なのです。

#### (2) 自己学習能力の養成

学ぶということが、個人に属した行為だと言いました。しかし、学ぶ能力を養成するということを考えてみると、そこに自分以外の人の影響を無視することはできません。

例えば、小さな子供の場合は、親の影響は強いものがあります。前述の例で言うと、子供にとって危険な行為と判断した場合は、そのことが危険であることを教え、何が何でも止めさせようとするわけです。そのためには、いわゆる「愛の鞭」まで使うわけです。

また、子供の方でも、親の顔色を見たり、少し大きくなると、言葉によって親の意見を求めたり、積極的に他者である親の概念を、自分の判断基準にしようとしています。そのとき親は、自分の見識に従って

二つの対応のどちらかをしています。その一つは、素直に自分の既存の概念によって、判断を下すものです。もう一つは、無視したり、「おまえは、どう思う」などと言ったりして、一時的に子供自身に判断を委ねるものです。いずれにしても、その後の子供の言動は、親の判断で評価されることが多いのです。

人は、「人に教える存在」だと言えるでしょう。

学校というものの存在を考えると、個人が自己実現の過程を歩むために問題解決の方法を学ぶ場としての機能と、社会の要請に従って個人を期待される方向に成長させる場としての機能を併せ持っていると思われまます。

そこで、教える側の姿勢が問題になるのです。つまり、これまで後者の視点が強過ぎたのではないかということです。学習者が何を学ぶべきかは、専門家である教える側が考え、どう学ぶべきかも教える側が考え、いかに学んだかも教える側が評価するということが多かったのではないかということです。

学ぶということが、個人に属した行為ならば、何を、いかに学ぶか、それをどう評価するかに、学習者自身が専門家である指導者とともに積極的に参加していなくてはおかしいはずです。

まして、学習者が学ぶことそのものを目的としているのではなく、実社会でよりよく生きていくために学ぶのだとしたら、また、教える側がそのために必要なすべての事項について教えることが不可能なら、学習者は実社会で生活しながら学んでいく方法を学ぶことが必要です。それには、学習者が自らの学習に主体的に関与していくシステムを作ることと、学習の場と生活の場の距離をできるだけ近づけることが大切です。つまり、学習者の実際の体験を基に学習を組み立てたり、学習者にとって必要な体験の機会を作って、その体験から学ぶようにするわけです。

生活していくための問題解決の能力は、総合的、実地的な能力です。「材料を買ってきて、調理して、食べる」ということだけでも、社会、理科、算数、家庭科、国語などから人付き合いの能力などまで、総合的、実地的な能力が要求されるわけです。総合的、実地的能力は、実際の体験によってしか学ばません。

学習が活発に行われるためには、学びたいという学習者と教えたいという指導者の共通にかかわれるテーマで、双方とも主体的に参加意識をもって、学び方を学ぶために、実際の体験をとおして学ぶことが肝要だということです。これによってこそ、学習者の自己実現のために必要な真の自己学習能力が養成されると言えましよう。

## 2 指導者の役割について

帰国者が日本社会で生活していくために必要な問題解決の能力を養成するためにも、自己学習能力の養成という視点が重要なことは理解されると思います。そして、帰国者に日本語を指導する側としては、「指導者は教えて、学習者は覚える」といった教育、学習観を転換する必要があります。

本項では、そのために指導者の役割はどうあったらよいかを考えたいと思います。

### (1) 学習者を知る

指導者にとって、一人の学習者は、何人もいる学習者の中の単なる一人かもしれません。その学習者が、うまく学ばなくて思うような成果を収めることができなかつたならば、ほかの学習者と比較して何がまずかつたのかその原因を探り当て、どうすればよかつたかを考えます。その結果を次のコースの教育に反映させていくことによって、「学習者」という全体に対してはプラスになっていくわけです。

よく、学習者の多様性と言いますが、厳密に言えば、何をどう学んだらよいかは、学習者一人一人によって異なっていると考えられます。それは、日本語習得のレベルの差についてだけ言われるのではありません。学ぶ内容も、学ぶ方法も、本当にその個人に合ったものとするには、一人一人に違ったものを用意しなければならないということです。それは、例えば次のようなことです。

積極的に会話をした方が口頭能力が高まるといっても、中国語でも無口な学習者に、日本語で積極的に話させるというのは、無理があると思われる。

中国で郵便局を利用したことがない学習者に、郵便局場面での会話だけを練習させても戸惑うばかりでしょう。

また、学習の経験そのものがなかつたり、少なかつたりする場合には、学習の意義を強調しても、自分自身に苛立ちをつのらせたり、学習を断念させるということにつながることもあります。

さらに、印刷工場で働いていて、これからもそれを続けようとしている帰国者に、貿易実務に携わったときの行動能力をつけることを目指して学ばせることは、自分の生活とどう関係しているか理解できないということで、学習動機、学習意欲の面で問題があると思われるのです。

これら、学習者に対し、指導者が一斉授業で教えることなどできないと考えるのが妥当でしょう。そうかといって、すべてを個別指導とするのでは、指導者の負担が大きすぎて無理がありますし、学習者に完全に合った指導ができるとは限りません。個々の学習者に効果的な指導・学習は、上で述べたように、学習者個人が日々の生活体験を通じて学んでいくための学び方を学ぶことにあります。そこに指導者の存在の価値があるわけです。

学習者の多くも、適応能力をつけていくためには、指導者に教えてもらわなければならないと思っています。教えてもらえば適応能力はつくものだとも思っています。指導者は、まず、これをたすことが必要です。しかし、決して指導者から見放されたと思わせてはいけません。逆に、帰国者がいかに多くの能力を身につけているかを本人に気づかせることが大切です。その上で、日本社会でよりよく適応していくためには、更にもどのような能力が必要かを自分から見つけ、それを身につける方法を学ばよいのだということを理解させることです。

そのためには、指導者は個々の学習者の状況について、プライベートなことに立ち入り過ぎない配慮は必要ですが、性格面から生活形態まである程度把握しておきたいものです。

指導者が、個々の学習者の日本社会での適応能力とは何かを把握するためには、生活者としての学習者個人についてどれだけ想像力が働くかが鍵になるからです。言い換えると、同じく生活者である指導者が、学習者の生活実感を自分のものにしてこそ、学習者の適応にとって何が必要かを、学習者とともに考えることができるということです。

指導者が、学習者と人として向き合い、学習者が学ぶことを一緒になって考えるという関係を築くことができはじめて、学習者も学ぶ主体が自分であることに気づき、何を、どう学ぶかに責任をもつのは自分だということ、しかし、学習者の立場で考えて支援してくれる指導者がいるということが理解できるのです。

### (2) 学習者主体の学習

自己学習能力を育てることが大切なわけですが、ただ学習者に、「何をどう学ぶかは自分で決める」と言っても、すぐに決められるものではないでしょう。

普通は、学習内容と学習方法は、専門家である指導者が、学習者にとって何が必要か、またどう学ぶのが効率的かを判断して決めるものだと考えられています。学習者もそう思っている場合が多いのです。

そこで、指導者から学習者に対して、日本での生活でどんなところに問題があると思うか、あるいは、あつたかなどを問いかけて、学習者同士で話し合うことから始めなければならないこともあります。また、すでに定着している帰国者の先輩などから地域社会での付き合いや職場についての話を聞いたり、これから多くの帰国者がすると思われる体験、例えば「日本人の家に招かれる」という体験を実際にし

てみることから、学ぶべきことを考えるということもあるわけです。

いずれにしても、指導者側からの働きかけが必要になることも多いのです。しかし、学習者に、実際の体験で何が必要かを判断させ、何をどう学ぶかの気づきを促し、決定を委ねることが大切なのです。

指導者がルールを敷き、指導者が先頭になって学習者を引っ張っていくという形での学習では、いつまでたっても学習者の自立は果たせません。指導者は裏方に徹して、学習者にできるだけ実際に近い体験をさせ、そこから必然的に学びが起こるよう、環境を準備するという役割が求められます。

また、指導者には、日本社会と学習者をつなげる大切な役割があります。「実際に近い体験」とは、日本人や日本社会と生活という次元でかかわっていくことです。教室などに日本人を協力者として招いて、学習の場面を現実の生活場面に近づけたり、学習者の生活の中での問題解決の過程を学習活動の素材として、生活場面を学習場面に近づけていくわけです。

そこで、指導者は、一般日本人と学習者の間に入って、互いの調整役を引き受けなければならないことも多くなります。場合によっては、学習者側の立場に立って、日本人側に「帰国者」に対する理解を求めることも大切な役割になります。

さらに、指導者も日本人の一人ですから、学習者である帰国者と利害が一致していなければなりません。日本人の意識で学習者の行動を見ることができるようですが、学習者がどうしても日本人・日本社会に受け入れられないような言動をしている場合など、「日本人としてはこう思うが」と客観的に伝えるべきでしょう。そのことで、学習者に考えるきっかけを与え、自己学習能力を伸ばすことにつながると思われま。

### (3) 学ぶ学習者

先に、「指導者は教えて、学習者は覚える」といった教育・学習観を反省すべきだと述べましたが、指導者が一切教えないと言っているわけではありません。どんな人同士でも、知らないことは知っている人に教えてもらうわけです。指導者は、学習者が知りたいか知りたくないかにはかかわらず何でもかんでも皆教えて、学習者はそれをきちんと覚えればよいという受身の学習には問題があるということです。

実際、指導者にとって教えるという行為は、なすべき大切な役割には違いありません。しかし、学習者が考えたり、やってみて判断すべきことまで先に教えてしまっは、専門家として芸がないというものです。むしろ、学習者が自ら考えたり、やってみたいと思うようにもっていく、ときには、一緒に考えたり、やってみたりすることが大切でしょう。

子供が靴を履くのに手間取っているからといって、親が履かせていたのでは、いつまでたっても履けるようにはなりません。むしろ、応援しながら待ってあげる親でなければならないのです。指導者も学習者も、人としては同じ大人です。あるときは学習者に教えられ、応援されることもあってよいわけです。

自分が孤児になった背景や文化大革命中の苦勞、子供のために帰国を決意するまでのいきさつ、家族や関係者の援助と本人の努力など学ぶべき面が多くあります。指導者と学習者という大人同士が向きあって、互いに相手と学習する場を共有しているという事実は、絶えず自覚していきたいと思います。

(写真)

### 3 Q & A

#### 【質問7】学習意欲のない学習者に対する指導

私のクラスの学習者は、やったことが全然身につきません。前の日にやったことを次の日にはまったく新しいことのように勉強しています。また、宿題を出してもやっぴこないし、授業の予習を全然してこないなど、家でまったく勉強しません。もう少し自発的に勉強してほしいと思うのですが、どのように指導したらよいでしょうか。

【解説】質問の学習者の場合、どうやって勉強していったらよいのかという学習の方法が身につけていない、又は身につける機会を逸したというケースが多いと考えられます。

帰国者にとっての学習とは、まず、日本社会での適応を促すものでなくてはなりません。つまり、日本での生活を念頭に置いたものであるべきです。したがって、机上の学問だけでなく、なるべくやったことを身につけるための実際の経験を学習者にさせることです。

実際の体験をさせることができない場合でも学習者が頭で理解したという段階だけではなく、実際の生活場面に近づけて、どのように使うのかという段階までもっていかなければなりません。このような学習意欲の薄い学習者には、指導者は学習者の興味・関心がどこにあるかを探り、意欲を引き出しやすい学習項目を設定することが必要です。

そして、質問の学習者のように、なかなか覚えることが難しい人には、その日にやったことを確実に身に付けるために、やはり家庭学習が必要になってくるでしょう。ただ、このような学習者の場合、宿題の出し方にもちょっと工夫がいらします。「このテープを20回聞いて同じことを5回吹き込みなさい。」とか「この文をノートに50回書いて100回読みなさい。」というような無味乾燥で、機械的な作業を要求するのでは学習者は始めからやる気が起こりません。学習者にやる気を起こさせるには、何のために練習するのかという目的が分かっているなければなりません。また、あまりに時間的、能力的に負担となるような内容でもやる気にはならないでしょう。

例えば、次のような宿題も考えられます。授業の終わりにその時間に学習した場面や語彙を復習しながら、指導者がテープに録音していきます。各時間にこの作業を繰り返し、最後の時間にその日の宿題として「家でもう一度聞いてきなさい。」というように指示します。その時に語彙表をプリントにして渡すともっと親切でしょう。また、余裕のある学習者には、関連語、学習した場面の応用場面を別のテープに録音してあげてもいいと思います。

ここでもう一つ大事なことは、宿題もやりっぱなしで終わるのではなく、その結果をきちんと評価することです。できたのはどこまで、できていないのは何についてかを学習者に伝え、できるだけほめたり励ましたりしてあげましょう。また、指導者側も学習者のできなかったところを検討し、その学習者にとって無理な課題ではなかったかを確認しておく必要があります。

このような学習者は、学習の習慣化や記憶の保持など、時間がかかるので、意欲を失わせないように気長な指導が必要です。

#### 【質問8】専業主婦に対する指導

家事に従事して働かずにいるためか、日本語を勉強しても覚えられないと決めつけてしまって、家族に頼ってしまう主婦に、勉強させて自信をつけさせたいのですが、どう説得したらよいでしょうか。

【解説】かなり年齢の高い学習者にとっては、日本語の学習や日本の事情について学ぶということは、多大な努力と負担を強いられることです。そんな苦勞をしなくてもそれなりに自分にとって充実した生活を送れるとすれば、それにこしたことはありません。

しかし、現実的に考えると、日本にいて生活している限り、何らかの形で日本社会や日本人との接触・付き合いを持つことは、日本での第二の人生を有意義に過ごすことにつながると思われます。つまり、主婦であっても地域の人たちと人間的な触れ合いを持ち、日本語は不自由であっても、社会の一員として生活することは大切なことです。

家事に従事している学習者でも、日々接触する「日本語」や「日本社会」は存在します。

例えば、家族のだれもいないときに電話がかかってくることもあるでしょう。また、だれかが訪ねてくることもあるでしょう。ちょっと外に出たら近所の人とそれなりにあいさつしたり、話を交わしたりしなければならないこともあるでしょう。子供が学校へ行っているとしたら、学校の担任の先生と話をしなければならないこともあるかもしれません。

【質問7】で取り上げた問題とも関係しますが、学習の意欲には、その事柄に対する関心と、成功の経験を通じて得られた自信が不可欠となります。指導者にとっては、学習者の興味、関心がどこにあるか、どの程度のことなら達成できるかをまず考えなければなりません。

まず、身近なことから、あまり負担にならない程度から始めましょう。

日本語が必要だからといって、日本語のあらゆる面をすべて指導する必要はありません。「日本語ができなければいけない」という発想ではなく、「日本語が少しでもできれば、それだけ世界が広がる」といった前向きの発想を採れば、指導項目は本人の生活の範囲から拾えるはずで、対人場面以外でも、買物が好きならば広告の読み取り、テレビの歌番組が好きならば歌と、いくらでも広がります。本人が実際に困っていること、やりたいと思っていてできないことが必ずあるはずで、そうしたことが日本語を使ってできるようになれば、本人にとって大きな自信につながるはずで、重要なのは学習と生活とを結びつけてとらえられるように導くことです。最後に一つ付け加えますと、この質問にある指導者側の「説得」という姿勢は手段とは言えません。

家族がどんどん外の世界とのコミュニケーションを進めていき、主婦である学習者が取り残されるような感じを持つという事例は少なくありません。こうした場合、やはり家族の中での役割、ひいては社会の中での役割を自分自身で意識できるようにもっていきたいものです。「説得」というよりは、むしろ、身近なところから一つでも二つでも自分でできることを増やしてあげることが先でしょう。

#### 【質問9】授業態度が悪く、学習意欲のない学習者への対処法

授業中居眠りをしたり、おしゃべりをしたり、勝手な行動をとる学習者には、どのように対処したらよいでしょうか。

【解説】まず、質問のような行動をとる学習者と個別に話し合うなどして、どうしてそのような行動をとっているのかを確かめる必要があります。例えば、授業中に居眠りをするという行動一つをとっても、指導者側からすれば、せっかく自治体の協力で場所を提供してもらい、帰国者のためにと思って日本語を教えているのに、居眠りをするとは何事かといったとらえ方をしてしまいがちです。しかし、学習者にも言い分はあるはずで、慣れない日本での生活に緊張している上に、今まで仕事をしていたので疲れているとか何か理由があるはずで、授業中におしゃべりをするというの、自分の隣の人が分からないところを親切に教えているのかもしれないし、自分が現在の授業を十分に理解していることを他の人に知ってもらいたいのかかもしれません。また、授業が理解できないというような授業内容が原因でおしゃべりをしてしまう場合もあるでしょう。

このように、指導者と学習者が話し合っ、互いの了解があった上で、教室内での居眠りやおしゃべりにどう対処するかを考える必要があります。例えば、これからの10分は、分からなくても指導者の日本語だけに注目して類推する時間だと約束して授業に集中させたり、学習者にレベル差がある場合は学習者同士が中国語で教えあう時間をとったりするなど、授業にメリハリをつけ、学習者にも学習内容や学習方法について示し、今は何をやる時間なのかを分からせながら授業を進める必要があります。今、何を学習しているのか、また、これから何をやるつもりなのか分からない状態では、学習者も不安ですし、集中できません。このままでは、教室内の雰囲気も散漫なものとなり、自然と私語が多くなるものも仕方ありません。

また、複数の指導者が担当している場合に、こうした対応の仕方をあらかじめ学習者に知らせるような方法を採用するときは、指導者によって対応が異ならないように、連絡を取り合うことが必要です。学習者が授業に対してあまり積極的でないのは、かなりの部分が指導者側に問題があると考えた方がよいでしょう。その時間のために準備した学習項目が、学習者の興味や関心を引かず、学習者がもっと別のことを知りたがっている場合は、準備したものに固執するより興味のあることに方向転換することも必要です。

また、コミュニケーションと指導においては、学習者がただ静かに指導者の言うことを拝聴しているといった雰囲気は、あまり好ましいものではありません。自由活発な、皆が言いたいことを言えるような雰囲気がむしろコミュニケーションを促します。

指導者が、自分が学習者として指導を受けたときのスタイルに固執し、それこそが学習者のあるべき姿だと思っているならば、それにも問題があります。

このように、何か問題が顕在化したらすぐに問題の所在を明らかにし、指導者と学習者が協力して問題を解決していけるような関係をつくっていく努力が必要です。

#### 【質問10】消極的な学習者に対する対処法

消極的な学習者がいて、あててもなかなか発話しようとしません。こういう場合、どのような対応、指導を行えばよいでしょうか。

【解説】学習者が、なかなか発話しようとしないうちに、単純に、消極的なためだと結論を出してしまわずに、ちょっと考えてみる必要があります。このような反応の理由、原因にはいろいろ考えられますが、ここにいくつかあげてみることにします。

第一に、学習者が、どうすれば指導者の求めていることに答えられるかを理解していない場合があります。その人の前に何人かあてて例を示しているのだから、理解しているはずだと短絡的に考えることはできません。そういうやりとり自体にどういう意味や効果があるのかを、学習者が理解していないため期待した反応が出てこないこともよくあります。こういった場合は、その練習の目標を、事前に、できるだけわかりやすく説明する必要があります。

第二に、自分の答えが間違っているのではないかという不安で消極的になっている場合です。このような不安にかられる原因としては、一つは以前同じような状況になったとき、その学習者は答えたけれども、その答えが間違っていたためにクラスメートから笑われ、非常に恥ずかしい思いをしたというような場合です。こういうときには、学習者が教室に来ているのは、日本語を覚えるためであり、何かを覚える場合に最初から間違えずにできるということではなく、指導者自身も英語や中国語を覚えたときには何度も間違っただ、ということをお話してはどうでしょうか。二つ目は、中国で一人前の大人として生活していた自分と、日本で一から始めなければならない、しかも思うように日本語を覚えられない自分との落差から内向的になってしまっている場合です。三つ目としては、出身地や学歴等が原因で、帰国者同士がいじめたり、いじめられたりしている、ということも考えられます。このような場合は、結構その根が深いので対処が難しく、クラス分けを考え直すといったことが必要になる場合もあります。

第三に、学習者の個人的な、いわば性質による消極性の場合があります。いかに配慮したとしても、指導者から個人的に指名されること自体が、学習者の大きな負担となる場合もあるのだということを指導者は認識しておく必要があります。もし、あてられることが負担となるような人であれば、クラスで座っていることだけでも、自分ではやっとの思いでやっていることなものですから、その上、あてられては精神的に極限状態に追い込んでしまうことにもなりかねません。指導者は、クラス内が緊張でピリピリしているといった状態にならないように、みんなが楽しく和やかな雰囲気になるような配慮をしなければなりません。また、学習者が落ち着いて学習できるように工夫することも指導者には必要です。例えば、質問をするときは、まず、学習者全員に向かって問題を投げかけ、心の準備のとき間を与えてから指名したり、答えるときには座ったままで気楽に答えられるように配慮するといったようなことです。その他、個人的に指導の時間を設けるといったことも有効です。

#### 【質問11】学力、学習経験の違う学習者が一つのクラスにいる場合の配慮

日本語力が大体同じ学習者を同一クラスにしたのですが、近頃、理解力に差が出てきて、文法説明のときや、学習項目を決めるときに困っています。どのように指導したらいいのでしょうか。

私の教えている日本語教室は、全くの初心者から、かなり意思疎通のできる人までを二つのクラスに分けて教えています。したがって同じクラスにずいぶんレベルの違う学習者が混在していて、指導しにくく困っています。しかし、これ以上細かくクラス分けをすることは物理的に不可能です。

指導方法を工夫することで少しは改善できないものでしょうか。

【解説】日本語力の大体同じ学習者を集めてクラス分けをすると次第に学習者の力に差が出てきて、クラス運営が、やりにくくなってしまいう傾向があります。これはどうしてでしょうか。

まず、学習者の年齢差があります。当然若い人の方が覚えるのは速いでしょう。次に、学習者一人一人の潜在的な学習能力に差があることが考えられます。始まった時点では同じ程度の日本語力を持っている学習者でも、社会経験の有無、学習に対する慣れ、勘の良さや理解力によって差が出てくるでしょう。

したがって、クラス分けの際に、日本語力以外の要素を加味する必要があります。また、学習目的があまりにも違う学習者を一つのクラスにすることは避けた方がいいでしょう。

さて、すでにあるクラスで、学力差が顕著になって、一つのクラスとしての授業が成り立たなくなってきたような場合にはどうしたらいいのでしょうか。期の途中でもクラス替えができることが一番望ましいのですが、様々の理由により、そのままのクラスで運営していかなければならない場合には、学習者の目的や興味によっていくつかのグループを作り、そのグループごとに課題を決めて活動するといった方法が考えられます。また、文法などについては、教室内では遅れがちな人のレベルに合わせて説明し、余裕のある学習者には自習できる教材を与えるなどの方法があると思います。

また、指導者にとっては準備に負担がかかりますが、学習時間のうち、前半は初心者のグループを中心に、後半は既習者のグループを中心に指導し、一方の、指導を受けていないグループには課題を与えておくとか、よりできる学習者が手分けをしてそうでない学習者に教えるという時間をとるとか、または、お互いに協力して一つの課題を遂行していくといった方法も考えられます。物理的に教室を分けることができない場合でも、複数の指導者で指導することにすれば、多少雑音は混じりますが、クラスを分けた場合と同じ効果をもたらすことができます。

グループ自体も固定しないで、学習項目によっては、年齢で分けたり、男女別にしたり、興味や趣味で分けることもいいでしょう。

また、役割演技など、コミュニケーションも重視した活動を増やすのも有効です。コミュニケーション重視の活動ならば、日本語力だけにこだわらず、それ以外の手段を駆使することも求められるので、多少日本語のレベル差があっても一緒に活動することが可能です。この場合、指導者は評価の観点を文法上の誤りなどには置かないようにすることが必要です。

最後に、余談になりますが、小学校等においても、生徒数が少ないために、1年生から6年生までを一つの教室に入れて指導しているような複式学級が、全国で7、000以上もあります。ここでの指導はどのように行っているのでしょうか。

いくつかの方法があるようですが、現在では「わたり指導方式」が多いようです。

「わたり指導方式」というのは一つの教室をある程度同レベルの学習者（例えば1年生と2年生）にグループ分けし、先生が個々のグループの学習を見てまわる（わたり歩く）方式です。先生が見ていないグループは、自習をしたり1年生の勉強を6年生が教えるなどの活動を行っています。いろいろな点で質問の場合と違うとは思いますが、参考までに指導方法を尋ねてみたいかがでしょうか。

#### 【質問12】週1、2回の指導しかできない場合の工夫

教室では、指導者の指示に従って練習するのですが、自分で勉強しないために、週1、2回の指導では、忘れてしまったことを思い出させるだけで精一杯です。何とか限られた時間を有効に指導したいのですが。

【解説】前回やったことを忘れてしまうと言うことは、週1、2回の指導ではある程度仕方がないことかもしれません。家で勉強しないというのも、学習者が、仕事や家事などをしなくてはならないなどの事情によって勉強する時間がないという場合もあります。あるいは、学習者に自学自習の習慣がない場合も考えられます（この質問については【質問7】学習意欲のない学習者に対する指導の「宿題の工夫」を参照）。また、授業の工夫も大切です。週1、2回の指導時間の全部を、前回の学習項目を修得していないと先へ進めないような積み上げ方式の授業にしてしまったのでは、ついていけない人が増えるのも当然です。

このように、単発の授業しか行えない場合には、その時間だけで完結でき、学習者にも達成感が得られるような内容の方が適していると言えます。例えば、それぞれの学習者が日常生活の中で抱えている疑問や問題を出してもらい、それについて問題解決の方法を話し合う場にしたり、逆に指導者側から学習者がぶつかると思われるような問題を提起して、考えさせるなどの方法をとるのもいいと思います。例えば「割り勘」や「接客の方法」について、一般の日本人にインタビューしたテープや、実際にお客を接待している場面をビデオ化しておく、日中間の習慣の違いがはっきりわかって話題にしやすくなります。また、「こんな時はどうする？」というようなタイトルで学習者から集めた問題で、「役割演技」の授業を組んでみるものいいでしょう。

短い時間を有効に使って指導するには、学習者の動機の高い部分を学習者が達成感を持つような形で指導するという工夫が必要となります。また、指導の時間を学習者の家庭学習と結び付ける工夫も必要でしょう。

#### 【質問13】異文化指導と日本語指導の関係

学習者が自立するためには、日本語だけを教えるのでは不十分だという気がします。日本の文化や生活習慣などについての知識も必要だと思うのですが、日本語の指導としてはどのように対処したらよいのでしょうか。

実際の指導で適宜文化的な背景について説明しているのですが、学習者は日本語の勉強には興味を示しますが、生活や文化に関する事柄にはあまり興味を示してくれません。どのようにすれば学習者が興味、関心を持つようになるのでしょうか。

【解説】 学習者が実際にふさわしい場で、ふさわしい相手にふさわしい方法でメッセージをやりとりするといったコミュニケーション能力を身につけるには、日本の社会や生活に関する知識や理解を深めることも必要です。

例えば、上司が締め切った部屋で「今日は暑いね。」と言ったとき、単に今日の天気について言っている場合もあるでしょうが、クーラーをつけて欲しいとか、何か冷たい飲物が欲しいということを相手に伝えたくて言っている場合もあります。このように、一つの表現でも、場面、その前後関係、相手、時などによって様々な意味や形があるわけですから、文法的に正しい文だからと言って、その場にふさわしい表現であるかどうかは別問題です。このような言葉の使用上の機能も、学習者に十分知ってもらう必要があります。

また、実際に起きている帰国者のトラブルを見ても、原因は日本語という言語能力にある場合よりも、日中の生活習慣や価値観の相違にある場合の方が多いようです。

したがって、質問者が気づかれたように、日本の社会や生活についての知識を指導するということは、帰国者に対する日本語教育において欠かせないことでしょう。しかし、このような知識と日本語力は、コミュニケーション能力においては相互補完的な役割を果たしますから、どちらかが先というのではなく、並行して指導していく必要があります。

質問のように、学習者が文化的な面を学習するのはどんな理由からでしょうか。

いろいろな理由が考えられますが、特に多いケースとしては日本での生活経験が浅く、実感として日本社会を捕えられていないため、自分の置かれている状況を把握できていない場合や、言葉を学習するということが、文法や単語を覚えることであり、言語に対する知識さえ完全に覚えれば日本で生活するのに不自由はしないという学習者が過去に受けた外国語学習経験が影響している場合があります。このような言語学習観による場合は、この信念を動かすのは簡単なことではないでしょう。しかし、日本語を学習して間もないときはいいのですが、学習者の日本語が上達するにしたがって、周囲の人がマナーや行動様式面などの適切さを要求するようになり、言語の習得だけでは意思が通じないという新たな壁にぶつかることとなります。そうなれば、必然的に日本の文化、生活習慣に対する興味も必要性も感じてくるでしょう。

質問の場合は、まだこの必要性を感じていないため意欲的になれないようです。このような場合には、指導者としては、折にふれて日本語の背景にある日本の文化や日本人の価値観などに学習者が触れられる努力をし、文化的側面から話題にしやすい事例を集めておく必要があります。

日本での生活が浅く、問題の所在がわからない学習者には、先輩帰国者の失敗談や成功談などを伝える(できれば、実際に先輩に協力してもらい、話してもらおう方がいいでしょう。)と効果があります。また、学習者が興味を持ちそうな場面をテレビドラマからとったり、日中の文化や習慣の相違点を扱った「入郷随俗」などのビデオを使って、わかりやすく問題を提示していくといいでしょう。社会事情に興味のある学習者には、新聞もいい教材になると思います(次頁の例を参考)。その他にも近所の人などをよんで、身近な生活の中から、日中の相違点について話し合う懇談会を開いてみるのもいい方法だと思います。この場合は、主な目的は日本語を覚えることではなくて、日本の社会や習慣に興味を持ってもらうことですから、学習者の日本語能力によっては、指導者が中国語で通訳したり、話の内容でわかりにくい部分だけ中国語で説明を加えたりしてもいいと思います。

このように、学習者の関心や状況を見ながら活動方法を選んでいけば、除々に日本の文化や生活習慣に関心を持つようになり、自分から問題を提供できるようになります。

(新聞活用例)

新聞の内容(昭和63年12月の朝日新聞より抜粋)

禁煙マンションが登場

吸った人はすぐ退去です 佐世保

入居者や来客が一度でもたばこを吸ったら出ていってもらいます。長崎県佐世保市若葉町にこんな「禁煙マンション」が完成、このほど入居が始まった。建設した不動産会社社長で禁煙運動家の山口宏太さん(44)は「たばこの煙をまき散らして迷惑をかけている人への警鐘です」といっている。マンションは鉄筋5階建てで1DK10室、5LDK1室と1階に事務所1室がある。5LDKに山口さん一家が入居したほか、二世帯が入居している。

入居者が契約時にサインする誓約書によると、入居者や来客が一度でもたばこを吸うと、即退去、敷金を放棄、そのうえ30万円の賠償金と室内改装費を支払わなければならない。給湯設備、冷暖房、調理器などのエネルギーは電気だけ。健康に良いうえ、火災の恐れが少なく、内装や設備がニコチン・タールで汚れないから維持・管理が楽、と三つの利点がある。と山口さん。

米国にある「禁煙ホテル」がヒントになった。「吸わない人は今まで黙ってがまんしていたんです。禁煙のアパートやマンションを増やしますよ」と山口さんも意を強くしている。』

質問項目

このマンションは、どこにありますか。

このマンションを建設した不動産会社の社長は、何という人ですか。

この社長は、どうして「禁煙マンション」を建てたのですか。

このマンションには、今、何世帯が入居していますか。

入居者が一度でもたばこを吸うと、どうなりますか。

来客が一度でもたばこを吸うと、どうなりますか。

このマンションの室内の給湯設備、冷暖房、調理器などは、どんなエネルギーで動きますか。

のエネルギーを利用することで、どんな利点がありますか。

1 . 2 . 3

このマンションのヒントになった「禁煙ホテル」は、どこにありますか。

この社長は、これからも「禁煙マンション」や「禁煙アパート」を建て続けたいと思っていますか。

【質問14】日本語を使わせる工夫はないか

帰国者だけの教室なので、休み時間も授業中も中国語ばかりを使っています。また、家でも中国語だけを使っており、職場でも帰国者の仲間がいるために日本語を使うことがあまりなく、日本語がなかなか進歩しません。

日本語を使って話そうとしなければ、いつまでたっても日本語を身につけることはできないと思います。なんとか日本語を使うためのよい工夫はないでしょうか。

【解説】「日本語を使って話そうとしなければ、日本語を身につけることはできない」というのは、一面では言えることかもしれませんが、この学習者のように、日本語を使う必然性、あるいは使う場が少ない場合、「いつでも日本語を話すようにしなさい」と要求すべきなのでしょうか。中国語で通じる家族や職場の同僚、クラスメートの間で、あえて日本語を使用するというのはやはり不自然ですし、日本に来て間もない帰国者の不安定な心理を思えば、家族や友人など中国語母国語話者間の中国語使用は、認めるべきでしょう。しかし、日本に住み生活する限り、日本語を使用することは必ずあるはずで、この学習者のように仕事についていけば、職場において日本人の同僚や上司との接触は避けられません。仕事上の意思疎通がうまくいかなかったり、誤解をしあったりということは、即、自分の生活に関わってくる問題だということを、まず学習者に考えさせます。そして、職場で起こり得る場面や、必要なやりとりを抽出して学習項目として設定すれば、身近な問題として、自分に必要な日本語として学習していけるはずです。また、忘れてはならないのが、「教室」が日本語が使える生のコミュニケーションの場であるということです。教室は、指導者と学習者という関係以前に、日中の異なる文化、言葉を持つ者が出会う場、本物のコミュニケーションの場と言うことができるでしょう。もちろん、指導者の中には中国語が堪能な人もいますが、少なくとも、授業中においては日本語の使用を心がけるとか、学習者が中国語で聞いてくるのは仕方がないとしても、指導者が答えるときには日本語を極力使用するなど、学習者の前での指導者としての姿勢を徹底させていけば、学習者も、教室内での態度を変えていくでしょう。

中国語のできる指導者は、中国語の分からない日本人と学習者がコミュニケーションを行う機会を設ける努力をする必要もあります。逆に、中国語のまったくできない指導者でも、なんとか理解できそうな日本語を選んで使ったり、通じない部分を身振り手振りや表情、絵など、言葉以外のコミュニケーション手段で補えば、学習者もそれに答えてくれるはずで、指導者に求められる条件の一つは、積極的なコミュニケーションの意志を持つことでしょう。

この他に、指導者は、意思を伝えるのに完全な日本語を使用する必要はないのだ、ということを学習者にわからせることも必要です。意思を伝えることが第一の目的であり、話しの要点がわかれば細かいところは気にしないといった、心に余裕を持たせることも特に初期のうちは必要です。このために、指導者はわからせる工夫をしながら、日本語のシャワーを浴びせるのがいいと思います。

最後に、学習者に自発的に日本語を使用させるためには、指導者は、日本語の発話を求め過ぎないように注意しなければなりません。学習者の中には失敗への恐れ、自信のなさから身構えている人も少なくないからです。「日本で生活しているのだから、日本語を使用しなさい」とか「日本語がうまくなると、友達ができないぞ」といった指導者が励まそうと思ってかけた言葉も、負担や焦りとなってしまふ可能性が高いのです。

指導者としては、学習者が現在持っている日本語力、言葉以外のコミュニケーション手段で可能なこと、知ることができることを提示し、現在学習者自身が持っている日本語力で、こんなことができる、こんなことも聞けるといった日本語力に対する可能性を広げてやり、コミュニケーションへの自信をつけさせることです。学習者の日本での世界が広がれば、自ずと日本語の使用の機会も増えてくるはずです。

## 第4章 指導の実践

交通機関等の発達に伴い、国際的な往来・交流が急速に拡大してきています。私たちの周りでも海外旅行や留学、海外出張、海外駐在などで外国に行く人が多くなり、もはや外国に行くということがそれほど珍しいことではなくなってきました。同時に海外から日本にやってくる人々も多くなり、その目的も多様化してきています。外国の進んだ制度や技術を学ぶために文献を翻訳することが外国語学習の主な目的であった時代から、いろいろな分野の人々が直接外国人と交流し面と向かって話し合うために外国語を学ぶ時代が変わってきているのだと言えるでしょう。

国際的な交流の拡大・多様化に伴って、外国語学習の需要も拡大・多様化してきました。そしてこの需要に対応するために、特にここ数十年の間に、日本語教育も含めた外国語教育の方法はめまぐるしい発展進化を遂げてきました。この間に外国語教育の基本的な考え方や方法もその主流が何度か入れ替わったりしましたし、外国から新しい方法が紹介されるとそれが一時的に流行するということもありました。そして今なおそのような状況が続いていると言うべきなのかもしれません。

外国語学習の指導法を考える場合には、その目的、学習期間、学習者のレベルや個性、学習環境、指導者の力量、その他の条件を考え合わせて最も適した方法を探るようにしなければなりません。現在日本語教育において多く採用されている方法であっても、特殊な目的や特殊な条件をもった学習者であれば、その有効性は小さくなります。いろいろ変遷のあった外国語教育にあって、なお新しい指導法が生まれ続けていると同時に、成立の年代の古いいろいろな指導法が今も並存して生き続けているのは、主流と言われる方法だけでは対応できないケースが増えていることの証明とも言えます。

さらに、その特殊な目的や条件が決して特殊とは言い切れなくなってきていることも、背後にある大きな流れとして注目しなければなりません。学習の目的や条件を重視し、その要請に応えようとすれば、今まで同じ枠で大雑把にくくっていた学習者群をも細分化し、区別して扱わなければならなくなってきます。このようにして特殊なものが増えてくると、結局は特殊なものも珍しくなくなり、特殊ではなくなってくるのです。別の言い方をすれば、学習の特殊な目的条件に適合した特殊な方法が当たり前になりつつあると行うことができるでしょう。さらに別の表現を借りれば、日本語教育もオーダーメイド化してきていると言えるのです。そして、中国帰国者に対する日本語指導は、この日本語教育の多様化の典型例のような存在なのです。

日本語教育と言われるものが、小中学校などで行われている国語教育とは似て非なるものであることについては今さら言うまでもないかもしれません。国語教育が日本語を母語とする人々（主に子供）に対して日本語で日本語を教育するものであるのに対し、日本語教育は日本語を母語としない人々に対する日本語の教育のことで、当然ながら、何のために、何を、どう指導するかはまったく違ってきます。

中国帰国者に対する日本語の指導もこの意味では国語教育ではなく日本語教育に含まれますが、といって、現在一般に行われている日本語教育の考え方・方法をそのまま借りてくれば済むというわけではありません。これは、先にも述べましたが、日本語教育の目的や条件が特殊であり、それに応えようとする限り、方法も異なってこざるを得ないからです。

中国帰国者に対する日本語指導の目的や指導に際しての基本姿勢とでも言うべき「指導の理念」については第3章ですでに述べました。この第4章では、第3章で述べた指導理念を実際の指導活動としてどのように具体化するかについて述べます。まず第1節で、現在日本語教育で用いられているいろいろな指導法についてわかりやすく整理して紹介し、第2節ではそれらいろいろな指導法と対比しながら、また、第3章で示した帰国者に対する日本語指導の理念との関係を踏まえながら、中国帰国者に対する日本語の指導法がどうあるべきかについて考えます。そして第3節では、それを実際に実践した例を紹介します。

第1節でいろいろな指導法を紹介するのは、従来の手法に慣れている指導者や入手しやすい教材に頼って指導している指導者に、自分が使っている方法をより相対化して見直し、それがどういう考えに基づいて何をねらった方法なのかを再認識してもらうためです。

帰国者のために帰国者に適した方法で教えたくても、手に入る教材が従来の方法によるもの以外はないし、中国帰国者用の教材があってもそれをうまく使いこなせない、現場に適した教材や指導法を開発したくても時間的な問題や指導者の力量の問題からなかなか難しい、というのが中国帰国者に日本語を指導している多くの現場の実状でしょう。この現場の実状からすれば、部分的に従来の方法を使いながらも、徐々に帰国者に対する指導の基本理念に沿って軌道修正を行うというのが現実的なものかもしれません。このような場合、従来の方法を併用したり組み合わせたり、あるいは改良したりする際に、その従来の方法が一体何をねらってどんな長短所をもつ方法だったのかを再認識しておくことは有益なことでしょう。

現場に適した指導法は、各現場毎に違います。同じ教材を使用し、同じ考え方に則って同じ目標を目指して指導するにしても、指導者が違い、その他の指導条件が違えば、大なり小なり最適な授業の方法に違いが出てくるはず。そして授業の方法が違って来るならば、元に戻って、教材・教具や目標、コース設計の考え方にも各現場毎にふさわしいものがあるはず。指導参考書の方法論や他の現場の実践例はあなたの現場での実践を通じたものではありません。したがって、そのまま使えることの方がむしろ少ないと考えなければなりません。現場にふさわしい何らかの変更や工夫を加えることによってはじめて生かされる場合がほとんどなのです。

指導者は、自分の現場にふさわしい方法を自らの実践を通じて模索していかなければなりません。指導参考書にある理論や他の現場の改善の実践例を参考にしながらも、最終的には、自分でやってみて、自分の目で見、自分の耳で聞き、学習者の反応を自分の感覚で感じとった結果を自分の頭で考え、自分の言葉で整理することが必要です。そして、現場にふさわしい、また、自分にふさわしい創意工夫を加えてさらに実践を積み重ねることによって、指導を改善し指導者としての自己の力を高めてゆくことができるはず。あなたの現場、あなたの授業を受け持つのはあなた自身であり、ほかの誰かがあなたの現場、あなたの授業を担当するのではないのですから、最終的には指導者であるあなた自身が実践を通じて絶えず挑戦していく姿勢がなによりも必要であることを強調しておきたいと思います。

## 第1節 指導法のいろいろ

この節では、日本語教育において現在使われている様々な指導法を整理し、できるだけわかりやすく解説していくことにします。

日本語の「指導法」と言うと、これに類似した「教授法」という言い方を思い浮かべる方がいるかもしれませぬ。言語の指導は、

「指導理念」(あるいは「接近法」)

学習の対象である言語、学習という営み、指導者、学習者、指導活動、教材等についての基本的なとらえ方。

「指導設計」

ある学習者に、ある言語を、設定された目標に向けて、最も効率的、効果的に、指導するために、指導計画を体系化して組み立てること。

「指導技術」

言語を指導していく過程で使われる練習方法、訂正方法、板書法等、具体的な技術。

この三つに分けて考えられます。一般に「教授法」という言い方は、上記の に近い意味で使われますが、 の意味や の意味、 全体の意味で使われることもあります。ここでは、 が体系化され統合されたものとして「指導法」という言い方を使いたいと思います。

ここでは、指導法を大きく4つに分けて整理しました。

文法訳読法

口頭法(オーラル・アプローチ)

コミュニケーション法(コミュニカティブ・アプローチ)

異文化学習法(カルチャー・ラーニング)

以上ようになります。

この4つは年代の古いものから新しいものへと、指導法の歴史として見ていくことができます。ただし、気をつけなくてはならないのは、古い指導法は現代には役に立たないと見てしまうことです。指導法においては、古いものが消滅し新しいものがそれにとって変わるということはありません。学習者や学習条件等に最適であれば、いつの時代にも生き続けます。これは日本語教育に限ったことではなく、外国語教育全般にいえることなのです。

### 1 文法訳読法

古くはヨーロッパ人がラテン語を学ぶ際に用いられた非常に古典的な指導法です。日本の大学の第2外国語の授業で採用されている指導法を例に挙げて説明するのが最も分かりやすいでしょう。

学習の中心は、とにかく文法を学ぶことです。そのために教材として、短期間で文法を学ぶことができる文法書と辞書が与えられます。文字の書き方から始め、助詞の変化等を学習し、最終段階になるとかなり複雑な文法を学習します。また、同時に辞書を頻繁に引くよう指示され、引き方を練習します。文法は、大体半年程度で頭にたたき込むことになっています。

文法が終了すると、次はドイツ語ならドイツ人、フランス語ならフランス人の書いたものを読むこととなります。これは、学習用に注釈などが施されているものの場合もありますし、生教材の場合もあり

ます。このような教材を日本語に訳読していく作業が中心となります。こうして、主として読解力をつけていくのが文法訳読法の目的です。

文法訳読法が、一般に大学での第2外国語学習で行われているのは、研究活動等で外国の文献を読みこなす力が必要だという認識があるからです。つまり、海外旅行のため、外国人と会話をするためといった民間の英語学校等に要求される目的とは異なるのです。民間の英語学校で行われている口頭のコミュニケーション能力をのばす方法では半年間(100時間程度)学習しても、全く英語を知らない状態から学習し始めたとしたら、学習者は英語の新聞、小説等を読めるようにはならないでしょう。その意味で文法訳読法は、非常に古典的な方法ではあるのですが、目的によっては他のどの方法よりも有効です。

以上は大学での外国語教育の例です。日本語教育でも、海外に住んでいる研究者や技術者等で日本語の論文や資料を読む必要のある者にこの指導法を用いているところもあります。ただし、外国人向けの日本語の辞書に良い物が開発されていない点が最大の弱点と言えます。

次に、文法訳読法について、2、3で述べる口頭法やコミュニケーション法と比較し、さらに特徴を説明してみましょう。文法訳読法は他の二つの指導法に比べて、学習項目を学び易いものから難しいものと順序よく配列しているわけではありません。口頭法で、学習項目の配列、提出順に注意が払われていることと比べると、これは文法訳読法の特徴といえます。初めからむずかしいものを与えるということは、学習者を混乱させる危険が大きいかもしれません。しかし、学習者に知的満足を与えられるという点では、これは有利に働くでしょう。

## 2 口頭法

文法訳読法の目的は、読解力を養うことでした。従って、口頭でのコミュニケーション能力をつけることをめざす場合には、この指導法では不十分です。そこで登場するのが口頭法です。この指導法には様々なタイプがありますが、最も典型的といえるのはオーディオ・リンガル法です。オーディオ・リンガル法に代表される口頭法の特徴は、口頭でのコミュニケーション能力を養うことを目的に据え、シラバスを作成しそれに厳密に従いながら学習を進めていくことです。

このシラバスというのは、教授細目/教授項目表と訳されるもので、何をどういう順番で教えるか学習項目を順に書き出したものです。文法訳読法ではほとんど考慮されていなかった、易しいものから難しいものへという学習項目の配列とそれにそって授業を進めていく必要からシラバスが生まれたのです。

シラバスの導入と同時に、学習項目をどう教えるかという教室活動も大きく変化しました。オーディオ・リンガル法にみられる機械的文型練習のように、ある文型や語彙を指導者が幾度も繰り返させ身につけさせるといった、指導者が教室で発話や聞き取りの練習を手助けする形をとるようになったのです。

口頭法は、現在日本語教育で非常に多くの機関や指導者が採用しているため、おそらく多くの指導者が機械的文型練習を経験しているはずですが、日本語教育で行われている口頭法は、第1課の文型や文法項目をふまえてそれに関連して第2課の学習項目を導入して学習を進めていく、いわゆる文型積み上げ式で、機械的文型練習を教室活動の中心に据えているタイプのものが圧倒的に多いのではないのでしょうか。

さて、口頭法にはいくつかの欠点が指摘されています。まず第1に、特に文型・文法中心、文型積み上げ式、機械的文型練習中心の指導法の場合、文法的に基本になるもの、例えば「・・・は・・・です」を最初に教えるといった様に、会話に必要な項目を最初に持ってくるわけではありません。従って、ある程度学習をしてからでないと、学習者は自分の思ったように話できません。これは、「ちっとも「ちっとも話ができないじゃないか」という学習者の不満となって現れています。もちろん、この指導法を採用している日本語教育の機関や指導者で、なるべく口頭のコミュニケーション能力を養成するようにしているものもいるでしょう。しかし口頭法はシラバスの構成の面からみると、文法構造が重視されている点は否めません。この文法依存のシラバスが実際にコミュニケーション能力に最善のものであるか、今一度検討してみる必要があるでしょう。

第二の欠点は、機械的文型練習の単調さに学習者が不満を抱くことがあるという点です。練習に多少の工夫をしてはいても結局指導者の指示にもとづいて学習者が何度も同じことを言うという練習には変わりがありません。文法訳読法のように、難解だが学習者が自分の力をなんとか使って文献を読んでいくといった学習法と異なり、知的な満足が得にくくなっています。この方法では、さらに学習者を飽きさせない練習を工夫する必要があるでしょう。

以上、問題としてあげた点は、見方を変えると利点ともなります。既に論理的思考を持っている成人学習者に対して、文法に基づき論理的に整理された学習項目は有効です。また、単調といわれる繰り返しによる練習も、外国語学習で暗記作業を無視できないことを考えるとやはり不可欠でその点では有効

でないわけではありません。このように、口頭法も文法訳読法と同様に長所もあり短所もあります。この長所をどう活かし、短所をどう改善するかは、指導者が自分の学習者の質を見極め、そして、それにあわせて指導法に改善を加えていく柔軟な考え方を持つことが鍵になります。

### 3 コミュニケーション法

2で述べたように、短所を長所とする工夫を行った結果生まれたのがコミュニケーション法です。口頭法の欠点と指摘された文法依存型シラバス、そして単調な教室活動は、コミュニケーション法では改善が加えられています。

まず、シラバスに関してどのような改善がなされたかを簡単に説明することにします。口頭法の文法シラバスは、コミュニケーション法では、言語機能面にまでシラバスが拡大され、コミュニケーションの場で使い易いものになっています。

ここで、言語機能について少し説明することにします。

「これは何ですか」という文を例に挙げて説明してみましよう。口頭法では、「これは何ですか」という文は聞き手が指し示すものが何であるか、質問するときを使う文として練習します。従って、指導者が机の上においてある本を指して「これは何ですか」と質問をし、学習者が「それは本です」等と答えます。このような練習を繰り返すことにより「これは何ですか」という文の文法的な意味とその構造を身につかせます。しかし、実際のコミュニケーションで上のような会話が使われることはまれです。「これは何ですか」という文が使われる状況はもっと違うものです。例えば、子供がおもちゃを食卓の上に出しっぱなしにしています。夕飯を並べようとして食卓を見た母親が子供に向かって「これは何ですか」と言います。子供はそれに「ごめんなさい」と答えます。このとき、子供が「それは本だよ」と答えたとしたら、その子は反抗期でわざとそう答えたのか、幼くてコミュニケーションが十分にとれないのであろうと判断されます。普通このような場合「これは何ですか」は、物の名前を聞いているのではなく、“邪魔だからきちんとしまっしてほしい”という聞き手の気持ちを表すものです。このように、実際のコミュニケーションの場で使われる文の意味は、その文の文法的な意味だけでは理解できない場合が多いのです。この文法的な意味以外の要素をコミュニケーション法では、文あるいは文型の持っている機能と読んでいます。

このように、実生活のコミュニケーションで役に立つ学習項目として、言語機能がシラバスに加えられたのです。もちろんこのことは、文法シラバスに加えて機能シラバスを同時にシラバスとして組み込むということであり、文法シラバスを否定するものではありません。

次に、口頭法における練習の欠点がどう改善されたかを見てみることにします。「・・・ています」の練習を例にとって説明してみましよう。機械的文法練習の中にある代入練習では、例えば「切符を買う」という文を「・・・ています」に代入し、「切符を買っています」の様に練習します。これは、コミュニケーション自体というより、その素材を身につける練習をしていることになります。これに対してコミュニケーション法では、コミュニケーション自体を練習できるように工夫した結果、「課題(タスク)」と言う考え方が導入されました。現実ではほとんどのコミュニケーションが何らかの仕事あるいは課題を遂行するために行われると考え(例えば、旅行の計画を立てるために天気長期予報を調べる、旅行会社に相談するというのは、旅行の計画を立てるという課題を遂行するために様々なタイプのコミュニケーションを行うことになります)これを練習に含めることにしたのです。

以上が、コミュニケーション法における練習の課題化の1例です。

このように、コミュニケーション法では口頭法の反省をもとに大きな改善がなされたわけですが、口頭法を否定するものではありません。先にも触れましたように、学習目的、学習者のタイプ、学習環境等によっては口頭法の方がコミュニケーション法よりも効果的な場合があります。ここでもやはり重要なのは、指導者の判断力と工夫する努力でしょう。

### 4 異文化学習法

最近、異文化適応ということがよく言われるようになりました。これは、日本語教育に限ったことではありませんが、難民や労働者等の流入に伴い日本の国際化が問題となって以来、この種の研究が本格化してきました。ここで触れる異文化適応のための学習、つまり異文化学習は特に帰国者に対して効果があるのではないかと思われまます。

異文化適応教育については第3章の第1節に詳しいので、ここではごく簡単に指導法としての特徴だけを述べることにします。

異文化学習法の特徴は、言葉の学習を表に出さずに生活習慣や人間関係のあり方を中心に学習を進めていくという点にあります。言葉はそれに関わる形で学習していくことになります。適応に対する認識、知識を身につけると同時に、そのつど関わってくる言語に対しても必要性を強く感じられるため、言語

を学ぶ動機付けがきちんと形成された上で言語を学習できるという利点があります。異文化学習法のもう一つの利点は、知的な訓練をされていない者でも日常生活と直結している素材を用いるため、興味を抱きつつ自分の身近な範囲でそれなりに考えることができることです。授業形態としては、総合活動のように中国文化との違いが体験できる場を与えられるものが望ましいでしょう。総合活動とは、学習者にある課題を与え、それを遂行させる作業を通じてより現実に近いコミュニケーション能力を養うことをめざすものです。これについては第3節の4に具体的な活動方法が説明してあります。

以上のように異文化学習法は、異文化接触の問題を客観的に把握する態度を養うといった点からも、異文化学習自体の興味が日本語の勉強を引っ張っていくといった点でも、帰国者には非常に適した指導法と言えます。ただし、これにも問題点はいくつかあります。まず、指導者の中国語の能力が要求される場合が多いことです。そしてコースの調整や授業の準備も含めて指導者の負担が非常に重いことです。指導者に中国語の能力がない場合には、活動を工夫して、日本文化と中国文化の違いが肌で体験でき、文化や生活習慣の問題に目を向けさせることができるような場をできる限り多く作るようにすることで補うことができます。

## 5 まとめ

これまで、4つの指導法について述べてきました。ここで、指導法とかメソッドと言ったものから離れて、最近生じてきた新しい流れについて少し触れておくことにします。

どのような指導法を採用するにしても、指導者と学習者というこの基本単位は無視できないことは誰もが承知していることです。これまでの指導法においても指導者、学習者のあり方、そして両者の関係のあり方について様々な検討と提案がなされてきました。その結果、学習者中心という考え方が生まれ、それをどう教室で実現するかが研究されてきました。しかし、果たして学習者中心の考えは実現されているのでしょうか。現在みなさんが教えている教室ではどうでしょうか。その日にどのような学習をするのか、次にはどのような学習をするのか、その目的は何であるかを学習者は知っているのでしょうか。練習の仕方にしても学習者の意志は反映されているのでしょうか。学習者に必要と思われるものを学習させたり、学習者が自発的に発話できるような工夫を行っているかも知れません。しかし、それらはすべて指導者が経験や専門知識に基づき決定し与えているのではないのでしょうか。学習者自身が自分の能力が伸びていると感じているか、あるいはそれに満足しているかを指導者はどのようにして知ることができるのでしょうか。学期末に行うテストや授業の後で受ける質問等から判断するというのが一般的なやり方でしょう。学習者の能力の伸びや満足度などもまた、テストなどで得た資料を基に指導者が自分の経験と専門知識だけで判断しているのではないのでしょうか。このような方法は指導者中心と言うべきであって、学習者の側から指導者に学習方法の変更を求めるような学習者中心のやり方は、日本語教育の現場ではいまだ実現されていないといえるでしょう。

では、学習者中心の考え方を具体的に考えて行くことにします。

シラバスについて、学習者もシラバスの決定に参加するシラバスがあってもおかしくないのではないのでしょうか。もちろん、自分の知らないことを学習するのですから、初めから学習者が学習項目を出して並べることはできません。しかし、指導者と相談しながら両者で作り上げていくという方法ならば決してできないことはありません。一度作ったシラバスを変更できないということはないのですから、学習の進み具合により学習者と指導者でよりよい形に作り上げていくことはできるはずですが。この過程を経て、最初は指導者が中心に作成していたシラバスを学習者の考えを徐々に取入れ、最終的には学習者が中心となってシラバスを構成するように変化させて行くのです。具体的な方法としては、授業時間の一部として、また時間外に学習者と指導者が相談する時間を設けることが考えられます。そうすることがシラバス改善の第一歩と言えます。

練習の方法にも同様のことがいえます。機械的文型練習が苦手な学習者もいれば、得意な学習者もいます。それをすべての学習者にやらせようとするには、やはり無理があります。これもシラバスと同様に、学習者と指導者が相談しながら学習者にあったものを取り入れていく必要があるでしょう。それには、指導者が学習の後に学習者に感想を書かせたり、学習日記を書かせることによりしっかりした記録を資料として、指導者と学習者が相談する方法等が有効です。

シラバスと練習を改善しても、学習の仕方が適していなくては何の意味もありません。ここでいう学習の仕方とは、教室での学習ではなく教室外での学習のことです。指導者や教室から離れたとき、自分のペースで学習する時間、つまり予習や復習の時間がそれにあたります。教室は、いわば学習者の学習のペースメーカーにすぎません。学習者の自主的な学習が行われるこの時間を有効にするために、指導者と学習者が相談していく必要があります。さらにいえば、日常生活こそ学習者が日本語を学ぶ最大の機会なのですから、その機会を利用した学習方法も学習者とともに開発していくべきです。以上のよ

うな学習者中心のやり方では、一見全てが学習者に任せられ、指導者の重要性が低くなるように思われるかもしれませんが、現実には指導者のなう役割は大きくなります。学習者の意見をうまく生かしつつ、全体のコース運営のなかで方針を決めていかななくてはならないからです。そのためには、学習者個人とコミュニケーションを頻繁にとり多くの情報を得ること、そしてシラバスの内容や練習方法について、指導者が考えていることをできるだけ頻繁に学習者に伝えることです。

これまでの日本語教育でも指導者によっては体系的にはありませんが、上で述べたようなことを行ってきた人もいます。例えば、指導者がボランティア的に行っている補講やクラス後の雑談などがそれです。このような努力を無にしないためにも、指導者と学習者のコミュニケーションの機会をコース設計の中へうまく組み込むことが、日本語教育全体の今後の課題と言えるでしょう。

## 第2節 指導法を決める際の留意点

この節では、中国帰国者に対する日本語指導者または指導機関がそれぞれの現場に適した指導法を形成していく際に、どのような点に留意する必要があるかについて考えていきます。

なお、ここで言う「指導法」とは、第1節でも述べたように、指導すべき対象や内容とそれが学習される過程の特質について抽象的レベルから具体的なレベルまで体系的にまとめたもの、といった意味で使われています。

指導者はいろいろな問題に直面してはそれを乗り越えるために工夫を積み重ねていきます。指導参考書を参照したり指導者間で話し合ったりしながら試行錯誤を繰り返し、その結果を見てまた別の改善策を試みるということの繰り返しが続きます。しかし、この繰り返しの過程が、単に今までと違う指導技術を試してみるということに終始するならば、必ずしもその過程で指導法の形成が進められているとは言い難いと言わなければなりません。

例えば、発音指導の方法を改善し、かなりの時間をかければ以前よりも正しい発音ができるようになったとしても、はたしてそれだけの時間を発音指導にかける価値があるのか、学生が発音を気にして自主的に発話しなくなるといった弊害はないのか、等、全体のバランスから見て必ずしもそれが改善だとは言いきれない場合も出てきます。

指導法が形成されてくるということは、「なんのために」「なにを」「どう」学習するかについての考え方がはっきりしてくることであり、その基本的な考え方と実際に用いられる具体的手順や技法とかを意味します。どのような指導、技術を用いるかを考える過程が、同時に、「なんのために」「なにを」「どう」学習するかについての基本的な理念を固めていく過程でなければなりません。

さて、中国帰国者に対する日本語指導の場合には、この基本的理念（「なにを」「どう」や「なんのために」についての考え方）についてはどのように捉えられ、指導法にはどのようなことが留意点として反映されなければならないのでしょうか。指導の基本的な理念については第3章で詳しく述べてあり、多少重複することになってしまいますが、そのポイントをまとめながら指導法の留意点を導き出すことにしましょう。

### 1 帰国者に対する日本語指導の目的、内容と指導法

#### (1) 指導の目的と指導法

中国帰国者に対する指導の目的は、第3章でも述べた「異文化適応」ということばに集約されて表されます。

帰国者にとって「異文化」とは、日本という新しい環境での生活を意味します。この新しい環境下で、一人の人間として前向きに生きていけるようになることが帰国者の願いであり、それを手助けし促進することが帰国者に対していろいろな援助業務を行っている関係者の共通した願いです。「異文化適応」は、日本語指導だけでなく帰国者に対する援助業務全般に共通する目的と言えるのです。

この「異文化適応」の概念は、帰国者が一方的に自己を捨て異文化環境に合わせて自己を改造する「同化」的な意味ではなく、異文化環境の下で人間らしく前向きに生きることを基本にすえた「異文化での適応」という考え方でした。

人間が人間らしく生きるには、自分をとりまく社会や人々と知識や感情の交流(コミュニケーション)を行うことが欠かせません。共同作業や手続きといった具体的な行為を行うためにも、人と人との心のつながりのためにも、また、必要な新しい知識を得るためにもコミュニケーションが必要です。「異文化での適応」という意味での異文化適応のためには、異文化環境の下でコミュニケーションを行えるようになることがぜひとも必要になってきます。

このように考えてくると、中国帰国者に対する日本語指導の主な役割が、帰国者が日本社会や周囲の人々とコミュニケーションをするための知識や技術を身につけられるように援助することであることがはっきりしてきます。コミュニケーションの指導を通じて、異文化適応に寄与することこそ日本語指導者の役割なのです。

上のようまとめてきた指導の目的を、指導法との関係から更に簡潔にまとめ直してみると次のようになるでしょう。

ア．帰国者に対する日本語指導は、異文化適応をめざした指導である

イ．日本語指導の直接的な役割は、帰国者が周囲と日本語を主な媒介としてコミュニケーションが行えるように援助することである

このア・イには、いわゆる「ことば」としての日本語の構造・体系を指導しただけでは、それで目的が達成されたと評価できないという意味が含まれます。実際のコミュニケーションを行えるように援助

するのは指導者の大事な役割であり、コミュニケーションの力は学習者自身の努力に任せればよいとするのは指導者の大切な役割を放棄することだと考えるわけです。

## (2) 指導の内容と指導法

日本語指導者は帰国者に何を指導するのでしょうか。「それは当然日本語だ」という答えが返ってくるかもしれませんが、問題はそう簡単ではなさそうです。

帰国者に日本語を指導するといっても、どんな日本語を指導すればいいのでしょうか。あるいは、学習の対象としての日本語はどんな特質をもっているのでしょうか。

一口に日本語と言ってもいろいろあります。外国人旅行者が日本を旅行するための日本語もあれば、外国人宣教師が日本で布教活動を行うための日本語もあります。また、日本人の子供が環境の中で自然に身につけるものとしての日本語もあれば、外国にいたまま自分の専門に関する日本の文献を読むために専ら辞書と参考書に頼って暗号解読的に訳読するものとしての日本語もあります。

帰国者と日本語との関わりについて見てみれば、彼らはもとより日本語の研究者ではありません。帰国者にとっては、日本での日常生活や仕事のための実用の道具として、また、人間関係を結び維持するための道具として日本語はあるのです。

また、ふつう帰国者は日本語が完ぺきに使えるようになるまで日本語の勉強に専念できるわけではありません。日本語が上手でなくても日本人と接触していかなければ自立した生活も送れませんし精神的にも孤立してしまいます。不完全なままでもどんどん使わなければならないのです。要するに、帰国者にとって日本語は実生活の上で日本人と接触するために実際に使う道具であり、使いながら上達していかなければならないものなのです。

実生活上のコミュニケーションということから、当然、背景にあって見えにくい文化的要素と深い関わりをもつことにもなります。文化的要素と深く関わるということは、相互の誤解からいわゆる文化摩擦を引き起こしやすいということであり、自他の文化を相対化して捉える異文化理解の能力が必要になります。

したがって、帰国者が「なにを」学ぶかと言えば、それはいわゆる「ことば」としての日本語を越えて、他の補助手段の併用や異文化理解を伴う、実生活上のコミュニケーション手段としての日本語なのだということになります。

このような意味で、帰国者が日本語を主な媒介として日本人とコミュニケーションを行う力は、一種の総合的な能力であり、これを本書では「コミュニケーション能力」と呼んでいるわけです。

以上を指導法を考える留意点として簡潔にまとめてみましょう。

ウ．帰国者が学習する日本語は、実生活上のコミュニケーション手段としての日本語である

エ．帰国者が実際のコミュニケーションで使うことのできる日本語は、学習途上の不完全な日本語であり、非言語手段の併用も伴う

オ．帰国者が日本人と行うコミュニケーションは異文化間コミュニケーションであり、日本語の言語能力だけでなく文化に関する知識や非言語手段の用法等を含む総合的な能力が必要となる

更に具体的に「どんな内容の日本語を」と考えるときに有効な発想法は、日本語の使用場面を列挙してそこでどのようなコミュニケーションが行われるかを考える方法です。では、帰国者が日本人とコミュニケーションを行う場面にはどんなものがあるのでしょうか。私たちはこれを2種類に分けて考えています。

一つは「生活行動場面」でのコミュニケーションで、買い物や交通機関の利用、病院での受診や市役所、銀行等での事務的な手続き等、日常の生活の中で何らかの行動を達成するための場面です。これらの場面の特徴は、接する相手との関係がその場限りの行きずりの関係であり、維持継続すべき個性を持った人間同士の関係とは異質であることです。相手とのコミュニケーションの内容はその舞台となる場所の特性によってほぼ決定されており、そこからの逸脱はあまり考える必要がありません。

このような生活行動場面についてどのような指導法を採ったらよいのかについては、既に「手引」で詳しく解説してありますから本書では詳しく扱いませんが、その主なポイントは次のような点でしょう。

- a．目的の行動を達成することを最も重視する
- b．行動場面を抽出し、コミュニケーションの内容、進め方、表現、関連する背景情報を分析し、指導項目とする
- c．発話表現と非発話表現とをはっきり区別し、非発話表現の意味は場面知識によって推測できるようにする
- d．模擬場面の形での練習を多用し、並行して場面知識の講義を行う

もう一つは「対人接触場面でのコミュニケーションで、身元引受人との接触、職場でのやりとり、子供の学校での三者面談、日本人の友人との交際、近隣との付き合い...等がこれに当たります。

これらの場面を生活行動場面の方法だけで指導しようとしてもなかなかうまくいきません。それは、生活行動場面のよう場面が決まればそこで行われるコミュニケーションの内容や方式がほぼ決まってくるというわけではなく、場面の变化形の多様さ、人間関係の複雑さ、目に見えない文化的要素の影響等が重なり、場面情報としての知識や頻出表現等を指導項目として挙げ切れない場合が多いからです。また、その膨大な情報をリストアップできたとしても、とてもそれを覚えきれるものでもないからです。

(文化庁職場場面調査中間報告参照)

職場での決まりきった作業等を除けば、これらの場面には生活行動場面のようコミュニケーション以外に目的のはっきりした行動(買い物、手続き、目的地に到着...)があるわけではありません。交わされるコミュニケーションの内容も一定していません。このような場面でのコミュニケーションでは、帰国者自身も相手も往々にして始める前からあきらめが先にたってしまう。よほど言いたい内容、聞きたい内容でないと、コミュニケーション自体が始まらないのです。

このような対人接触場面のコミュニケーションの特質を考えると指導法では次のような点が留意されることになるでしょう。

カ．日本人とのコミュニケーションに対して開かれた態度を養う

キ．コミュニケーションの話題は、学習者の現時点での興味・関心を尊重すると同時に、日本の社会事情や文化に対してより幅広く関心をもたせるように配慮して選ぶ

コミュニケーションを行うための指導では、まず何よりも日本人とのコミュニケーションに対して開かれた態度を養うことが必要になってきます。そしてそのためには、実際のコミュニケーション体験を通じて、日本人とのコミュニケーションに対する恐れや不完全な日本語力に対する羞恥心を乗り越えさせなければなりません。指導者は学習者の興味・関心を尊重し、学習者にとって意味ある内容を話題に取り上げながら、できる限り学習者の言うことを理解し学習者の聞きたがっていることを伝えるように努めます。また、学習者がその時点での自己の力をフルに発揮するように指導します。

対人接触場面のコミュニケーションを行うには、先ほどの「なにを」学習するかという部分で触れたように、結局は総合的コミュニケーション能力が必要になります。

生活行動場面と対人接触場面との関係は第3章で述べた異文化適応の捉え方との関係からも見ることができます。

生活行動場面の発想は「日本への適応」という概念と対応するもので、日本社会の在り方に帰国者側が合わせていくことにより解決できる分野が主な対象となります。これは異文化環境及び適応ということのいわば表層部分を扱ったもので、「異文化での適応」の視点から見ると極めて不十分なものでありません。周囲の人々との関係の維持・拡大を主な対象とする対人接触場面は、「異文化での適応」という発想で対処することが必要と考えられます。

## 2 学習の過程と指導法

学習者は、異文化間コミュニケーションの総合能力を、どのような過程を経てどう習得するのでしょいか。この問題をどう捉えるかによっても指導法のあり方に違いが出てきます。

帰国者は日本での生活の中で日本人との実際の接触をとおして日本語を使い、日本人とコミュニケーションをし、日本の見えない文化に接します。日本語もコミュニケーションの方法も文化も、基本的には実際の体験をとおして学んでいくと考えられます。

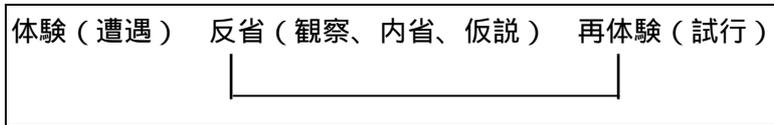
このように言うと、「何も指導せずに、ただ場数を踏ませればそれでいい」という意味に受け取られてしまうかもしれません。もちろんそういう意味ではありません。体験を体験として役立てるには体験の前後に説明や練習があったほうがいいはずで、しかし、当然のことですが、学習者の学習は結局は学習者が自ら行うのであって、指導者が代わりに学習してあげることではできません。何を問題とし、何を達成あるいは前進と評価するかは、指導者側から提示することはできてもそれを学習者が受け入れなければ学習は行われません。学習者が受け入れてはじめて学習は行われるのです。指導者がなにも指導しなくとも学習者が自ら問題を発見しその解決方法を模索して学習がなされることも多々あります。指導者という立場に立つ人がいなくとも、わからないことがあったら周りの人に聞いて問題を解決することもあります。むしろこれらの方が多いはずで、指導者は全てを教えられないと考えた方がよいのです。ただし、あまりにも体験、知識が少ないと、何が問題なのかさえわからず、自分で学習することもなかなかできません。指導はこのような場合にこそ必要になってくると考えられます。

いわゆる知識だけの問題であれば、解説書を読んだりその方面に詳しい友人や指導者の解説を受けることによって学ぶこともできます。しかし、実際にその知識を運用する力、あるいは自分の体で即座に

反応する力は書物や解説からだけでは身につけません。

コミュニケーションや文化の問題はふだんは意識しない習慣化された思考や感情、行動の方式が複雑に絡み合った問題です。知識だけで解決できないことはもちろんですが、指導者から与えられた練習メニューを受動的にこなすだけでは、練習のときにはできるようにしたとしても、実際場で適切に対応できるようになることは非常に難しいと言わなければなりません。学習者が自己の体験を通じて自分で問題を問題として捉え、自分の頭で解釈し評価する過程を経て、積極的、主体的に問題に取り組むことが必要になります。

この学習の過程を簡略化して表すと、



のようになります。異文化学習においても同様の過程を辿りながら「反省（観察、内省、仮説）」の段階において、

1. 中国文化に規定された自分への気づき
2. 日本文化への関心
3. 日本文化の理解

の順に理解が深まっていくと考えられます。

学習の過程についてのこのような考えから、次のような指導法上の留意点が導き出されてきます。

ク．コミュニケーションや文化の指導は、学習者にコミュニケーション体験、異文化体験の機会を提供しながら行う

ケ．学習者の主体的な学習が行われるように、問題点の内在化意識化を図る

コ．学習と実生活とを結び付け生活の中で自ら学習できるように導く

### 3 その他の条件と指導法

学習者としての帰国者自身の特性と指導法との関係について見てみましょう。

まず帰国者に共通した特徴としては、中国語を母語にもち、中国文化を身につけているという点があります。また、ほぼ同じルールに乗って比較的短期間に自立への道を歩まなければならないという点も挙げられます。

この特徴から、指導法の留意点として次のことが挙げられます。

サ．媒介語として中国語を有効に活用する

シ．中国文化との対比を通じて指導する

ス．学習への動機付けを実生活との関連で行う

帰国者と言っても実に多様であり、見方によって異なりますが、帰国者をいくつかのグループに分ける場合の要素によって考えてみます。

まず、年齢が学習者をグループ化する大変大きな要素として挙げられます。ふつう孤児本人及び配偶者の年代と二世（ここでは就学期の二世は主な対象からはずしていますので、青年層を指します）の年代に2大別されますが、この年代差によって学習の興味や関心の傾向が確かに違ってきます。また、記憶力や新しい環境への適応力でも差が顕著ですし、学習者と指導者の関係の持ち方についても違いが見られるようです。

学歴や職歴によっても、抽象化したり論理立てたりする力に差が出るようです。特に識字の程度は学歴に大きく依存します。学習方法も学歴と関係があるようです。

外国語学習の経験や日本語の既習歴も学生をグループ化して考えるときの大きな要素になります。概して言えば、学習経験のない人は当初は中国語での解説を求めますが、もともと学習方法や評価基準に対して固定観念が薄く、時間の経過につれて指導者の方針に従いやすいのに対し、学習経験のある学習者は中国の語学教育の方法（文法訳読法）に固執する傾向が強いと言えます。

都市出身者と農村出身者という違いも生活知識や過去の体験に違いがあり、特に日本事情の学習に関係してきます。

現在の生活環境、例えば既に就職している者とそうでない者、日本人との接触機会が多い者と少ない者とは、学習意欲や問題意識の面でふつう大きな違いが生じます。

このように、学習者をグループ化して考える要素はたくさんありますが、一人一人の学習者がいくつもの要素をもっており、その組み合わせのパターンは数え切れないほどになってしまいます。またこれ

らの中のどの要素が学習者の学習適性を決定づける最も強い要素になるかは学習者によって一概には言えません。そしてさらに、各人の性格や個人的体験等が複雑に絡み合い、学習適性や学習スタイル、信念等を形成し、それが個性となって現れます。

学習者の目的（就職、進学等）やコミュニケーション能力のレベルによってクラス分けをし、そのメンバーを見てクラス全体の傾向や学習者一人一人の特性を捉え、適した指導法を考えるのが実際的でしょう。場合によっては再度クラス替えをしたほうがよい学習者も出てくることでしょう。

指導者は以上の主に学習者に起因する要素を考慮に入れて指導法を工夫する必要がありますが、このほかに物理的条件や環境、教室のサイズ、クラス数、予算、設備、指導者数等がこれに当たります。さらに、指導者の資質と能力も非常に大きな要素であることは言うまでもありません。

(写真)

#### 4 Q & A

##### 【質問 15】コミュニケーション重視の指導法と今までの指導法

コミュニケーションを重視した指導が必要と言われますが今までやってきた会話の指導とどう違うかわかりません。学習者にとって必要な場面での模範的な会話文について、単語や文型を練習してから少し変化を加えて二人一組の会話練習をし、文型や発音など問題があったところをもう一度練習する。今までこんな指導をしてきましたが、この方法とどこが違うのでしょうか。

【解説】学習に必要な場面の模範会話を練習する場合、まず新しい語彙や文型についての説明があり、続いて指導者の指示に従っての発話練習、最後にロールプレイというのが一般的な流れでしょう（ただし、ここで言うロールプレイは、第2節で取り上げられている「役割演技」よりかなり形式的なものを指します。つまり、模範会話文をそのままかあるいは語句を部分的に変えたものを忠実に繰り返すタイプのものです。）

例として、生活日本語 の第4課会話 - 1を挙げて説明してみます。

林夫人：ここ、使っていますか。

隣の人：あ、あいてますよ。どうぞ。（と、洗剤をどける）

この会話を練習部分として取り上げる場合、まず「・・・ている」の文法説明と「使う」を「使っています」に言い変える式の練習をし、この文型がある程度入ったところで会話全体をクラスで練習します。そして、学習者を二人一組にして指導者が考えてきた元の場面の变化形を与え、役割を交代しながらやらせることが多いのではないのでしょうか。

先にも触れましたが、コミュニケーションを目的としている授業を行う際に気を付けなくてはならないのは、正確さを重視する姿勢を変えることです。学習者が「何を相手に伝えたいのか」「伝えることにより何を達成したいのか」をはっきりと認識した上でやりとりするとき、模範の会話の形を再現できていなくとも目的が達成されているならばまず成功と指導者は評価すべきです。その上で学習者の意欲をそがぬ程度にどうしてもと思われる点だけに絞って文型アドバイスや発音、場合によっては動作などの非言語行動についてもアドバイスするのが効果的と言えます。

学習者が目的を認識した上でコミュニケーションを行う練習は、これまでの繰り返し練習や模範会話を再現するタイプのロールプレイでは難しくなってきます。実生活でのコミュニケーションでは表現は設定されていないわけですから模範の場面と会話を与えられていること自体が不自然とも言えるわけです。より自然に近いコミュニケーションを練習させるのなら、できるだけ自然な流れの中で会話ができるような状況を作ってやらなくてはなりません。そこで練習の課題化が必要になってきます。課題については、第4章第1節で説明しましたのでここでは省きますが、課題化された練習とは、模範会話文を忠実に再現するというより、ある目的達成に向かい、学習者のコミュニケーション能力を最大限に使うタイプのものです。これについては、次節で詳しく具体例をあげて説明しています。コミュニケーション重視の指導のポイントは学習者にとって意味のある発話を練習させることです。また、必要な場面の模範会話というのはあくまでもモデルであり、実生活では学習者が自分の持っている力を駆使し、なんとか意思を通じさせるよう工夫していくわけですから、工夫する力をつけてやるのが最終的にはコミュニケーション能力を養うということになるでしょう。

【質問16】コミュニケーション重視の指導法と文法、発音、文字などの指導  
コミュニケーション重視といわれる指導法では目先の力をつくけれども、長い目で見ると、やはり文法をきちんと勉強していないと進歩に限界があるような気がします。文法、発音、仮名、漢字などの指導を始めにしっかり指導しておく必要はないでしょうか。

【解説】先にも触れたことですが、何を目的として指導をするかにより指導法も変えなくてはなりません。文法訳読法（第4章第1節の1参照。）のように、文献を読む力をつけるために有効なものもコミュニケーションの力をつけるのには不十分なことは先にも書きました。文法、発音、仮名、漢字を優先させ徹底的に定着させても学習者が実生活でコミュニケーションが円滑にできる力をつけることにはなりません。コミュニケーションの能力は結局コミュニケーションを通じて高められていくものなのです。

また、コミュニケーション能力というのは、話したり聞いたりする力だけではなく、読んだり書いたり等あらゆる技能や知識を統合した上に成り立つものです。従って、文法、発音、仮名、漢字の学習と分けて考えることはできません。基礎知識として文法、発音、仮名、漢字の学習を優先させるのではなく、コミュニケーション指導の中で話す、聞く学習とのバランスを考えながら、それらに関連付けて教えて行くことが効果的でしょう。

カタカナをコミュニケーション重視の学習に関連付けて教える場合を取り挙げて具体的に説明してみます。アからンまでのカタカナをすでに学習し終えた工場で働く帰国者の悩みの種としてよくあげられるのが、工具などにつけられているカタカナの名称です。英語の名称をそのままカタカナで表しているものが多いため、名前を聞いただけではそれが示すものが何か想像できないのです。また、現状ではカタカナを読み行動することが少ないので、学習者が知識としてカタカナを知っていても生かす機会が無いのです。工場の現場で同僚に「プライヤー取って」と言われたときそれが何かわからず戸惑ってしまう、「プライヤーだよ、プライヤー知らないの。これだよ」と現物を見せられて初めてプライヤーというものを知る、といったことが頻繁に起こるわけです。このような状況の中で学習者が作業をスムーズに行えるようにするにはどのような学習が効果的かを指導者は十分に配慮した上で指導方法を決めなくてはなりません。指導者が工具の名称リストを作りカタカナ学習に活用するというのが一般的な方法でしょう。しかし、学習者が現場でリストにない工具を使わなくてはならなくなったときには、また同じことが起こるでしょう。学習者が必要とするものが文字を読む力だけではないからです。現場で「プライヤー取って」と言われた時に、「プライヤーってどれですか。すみません。」と聞き返し、さらに頃合いを見計らって「さっきのプライヤーってどういうふうを書くんですか。」と聞くことで知識と言葉を増やしていく力も必要なのです。このような能力を養うためには、文字を覚えるといった学習よりもやはりコミュニケーションの力をつける学習の方が効果的でしょう。コミュニケーション重視の学習と文法、発音、仮名、漢字の学習を組合せることは十分に可能です。指導者が学習者にとって何が大切かを判断するのは非常に難しい作業ではありますが、帰国者の場合、文化適応、自立という点からコミュニケーション能力の養成は何よりも優先させるべきものではないでしょうか。そして、特にコミュニケーション能力を養う指導法に関しては、まず文法等の基礎を徹底的に学習させるというのは適当とは言えません。

**【質問17】コミュニケーション重視の指導法と4技能**

コミュニケーション重視の指導というと、四技能のうち「話す」「聞く」の側面だけに焦点を当てて「書く」「読む」の側面は無視されているような感じがします。将来少しでも知的な生活を営もうとすれば読んだり書いたりすることはどうしても必要になるはずで、急がば回れで、最初の段階はすぐに話せなくともコツコツと基礎を積み上げていくべきではないでしょうか。

**【解説】**前の質問でも触れましたが、指導の目的がコミュニケーション能力を養うことである場合、やはりコミュニケーション重視の指導の方がよいでしょう。

特に早く日常生活を円滑に営めるようになりたい帰国者のような学習者の場合、実生活と結び付きの薄い学習では意欲的に取り組むのは難しいと思われます。基礎が積み上がる頃にはすっかり日本語学習が嫌になってしまうなんてこともあるかもしれません。学習が持続できなくては将来の生活も知的になりようがありません。

また、コミュニケーションは話したり聞いたりする技能だけではなく読んだり書いたりする技能も含めた総合的な力により行われるものであることも前の質問のところで述べた通りです。従って、コミュニケーション重視の授業の中には読むこと書くことの学習も当然含まれなくてはなりません。

具体的な教室活動として挙げられるのが、ゲームです。ゲームについては、第4章第3節の1で詳しく説明してありますのでここでは省きます。ゲームの扱いやすい点は、1つのゲームのルールをほんの少し変えるだけで読む、書く、話す、聞くの各技能に焦点を当てて学習者に提供できることでしょう。また、4技能のうち2つに焦点を当てたもののできる等非常に柔軟性のある活動と言えます。短い授業時間内で消化できるのもゲームならではの特徴です。

一つの活動に時間をかけられるのなら、やはり第4章第3節の4で扱っている総合活動(プロジェクトワーク)が良いでしょう。細かな手順については、第3節を参照していただくことにして、ここでは音楽をテーマとする例を簡単に示すことにします。

クラスで「私の勧める日本の歌」という新聞を作ります。学習者はそれぞれ自分が好きな日本の曲を1曲選び、レコード会社、作曲家、作詞家、歌手の名前、曲の内容等を調べ、さらに勧める理由等を書きその原稿を集めて新聞にします。できたら最後に音楽鑑賞会を開き新聞で勧めてある曲をみんなで聞くことにすれば学習者の作業への意欲も高まります。この授業では、学習者は自分の好きな曲についての資料を読み、それを基に原稿を書きます。学習者は自分の興味にあった教材に取り組むことになりません。

このように、コミュニケーション重視の授業と読み書き能力を養う活動はきれいに分けられるものではなく、4つの技能がそれぞれ互いに作用し合ってバランスの取れたコミュニケーションを達成しているのです。

**【質問18】学習者のニーズに応じた指導**

学習者の勉強したがっていること、知りたがっていることを中心にした指導を行いたいと思い、学習者に聞いてみましたが「日本語の会話」とか「文法」と答えるだけでした。学習者自身にも何を勉強したいのかがはっきりわからないのではないのでしょうか。

**【解説】**学習者は、生活の中で疑問に思っていることや知りたいと思っていることがあっても、それらと学習のテーマは別だと考えていることが多いのです。ですから「何を勉強したいですか」と指導者に聞かれると、勉強という概念に属すると思われる項目、つまり文法とか漢字等と答えてしまいます。もちろん、すでに働いている学習者のように職場で仕事がスムーズに行くためには自分に何が必要かを具体的に認識している場合には、学習したい項目を指導者に示すことができる者もいるでしょう。しかし、そういったケースは希でほとんどの学習者が学習に対して漠然とした希望を抱いているのではないのでしょうか。

学習者のニーズというのは本人に直接尋ねるだけではとらえることはできません。特に勉強を始めたばかりの頃に聞いても学習者は戸惑うだけです。ニーズは、しばらく勉強を進めていくうちに徐々に学習者にも明確になってくるというものなのです。またニーズを正確につかむためには、学習者に関して様々な面から情報を集め分析しなくてはなりません。アメリカの移民に対する英語教育で、ニーズをつかむために指導者が学習者の家や住んでいる町へ行き学習者の生活環境を観察する、といった方法を行っている指導者もいます。実際にこのようにできる指導者は多くないでしょうが、学習者が漠然と抱いているニーズを指導者が具体的なものにして引き出してやる努力は必要といえます。

指導者が授業やカウンセリングを通じて学習者のニーズを引き出す方法として次のようなものが考えられます。

日本文化や日本事情に関連したニーズを知りたい場合には、日本文化と中国文化の違いについて学習者に考えさせるようにします。日本の文化や社会事情についての関心を喚起することで、学習者は生活の中での疑問、トラブルを文化や社会慣習の差異という観点から捉えることができるようになります。このような姿勢を養うことは、学習者が自力で目標を見つけ出し、意欲的に学習に臨む力を養うことにつながります。

### 【質問19】方言の指導

私たちの教室は関西にあります。方言の問題で悩んでいます。実際社会で接する日本語は関西弁で、学習者にとって現実的な日本語は方言だと思いますが、反面、やはり基本は標準語ですし、どこに言っても通じる言葉ですから教室では標準語だけを教えていけばいいとも思います。しかし外へ出て行って当惑する学習者の顔を思うとどうすればいいのかわかりません。

【解説】方言の問題は非常に難しい問題です。この問題には個人の価値観が大きく影響しているからです。例えば東京に出てきて大学や会社に通う者で、東京では標準語、生家に戻ったときは方言、といったように使い分けている者がいるかと思えば、あえてどこでも方言で通す者もいます。指導者の方言の扱いに関しても、指導者個人の方言に対する考え方が大きく影響しているといえます。

しかし方言の扱いに関しては、指導者が一人で決めるのではなく、学習者と相談した上で決めるべきです。学習者が将来もずっとその土地に住むと考えた場合、地域にとけ込む意味で方言を使うことはかなり重要な要素と言えます。標準語を使った話し方を気取っているとみなされ、そのために人間関係がスムーズに行かない等、言葉が適応の壁となることも十分に考えられるからです。学習者が今後どこでどのような生活を送る予定か、学習者を支えていく人たちはどこのどういった関係の人なのか、できる限り資料を調べ、同時に学習者本人にも同様のことについて将来の意志を聞きます。また、すでに標準語で学習をしてきている学習者ならば日常生活で戸惑いを経験しているわけですからその問題を取り上げ、指導者と学習者が話し合い、方言の扱いを決めて行きます。

この話し合いは授業を開始するとき一度だけやるというよりは、授業を行いながら何度か学習者との話し合いの場を設け、徐々に授業の形を学習者にあつたものに整えていくといったようにするのがよいでしょう。学習者がその地域で生活する限り、少なくとも方言を聞き取る必要が出てくることとなりますから、教える必要があるかないかを決めるというよりは、方言をどの程度学習に組み込むかを問題としていくことになると思われます。

方言を教える方法について、指導者が方言を話せるかどうかにより多少やり方が異なってきます。指導者が方言を話せるならば、教材を方言を使った物に書き換えるだけでなく、方言によるコミュニケーションを重視した授業を準備します。一方指導者が方言を話せない場合には、指導者も方言を学ぶ姿勢で学習者と共に学習していくようにします。方言の話せる指導者と組んで教える(ペア・ティーチング)、学習者が生の方言に触れることができるような総合活動を授業に取り入れる、方言を話せる人を呼び学習者と簡単な話し合いをさせる等、生の方言に接する機会をできるだけ作るようにします。このような授業を行いながら、同時に学習について学習者と話し合っていくわけです。話し合いの具合により、方言の聞き取りを重視するが発話については強制しない、聞き取りも発話もしっかりやる等、方言の取り込み具合も調整していきます。発話と聞き取りはいつも同じ比重を持たせる必要はなく、切り離して教えることができることも忘れないで下さい。

方言をどう扱うにせよ忘れてはならないのは、帰国者の学習が単に方言という言葉を学ぶものではなく、その地域に適応するための学習なのだということです。従って、その地域独特の風習や習慣に関連させた方言学習、時には東京などの他の地域との比較をさせ自分の住む地域に対する客観的な理解を深める学習等、適応教育という大きな枠の中で方言を考えていかななくてはなりません。

【質問20】教室の日本語と職場での日本語

学習者に、教室で習う日本語と職場で聞く日本語は全然違うとよく文句を言われます。又、日本人は「は」とか「が」とかいう助詞を省略したり正しくない日本語を使ったりもします。しかしまず、基本をしっかり覚えて、それから実際の生活の中で応用していけばいいと思うので、教室では厳しく文法の間違いをチェックして指導していますが、間違っているでしょうか。

【解説】前の質問でも触れましたが、コミュニケーション能力を養うことを目的とする授業では、学習者が自分の持っている力を最大限利用して相手に意志を伝えることが大切で、その際表現が文法的に適当でないと厳しく矯正する必要はありません。むしろ、文法的に正しく話そうとすることで誤りを恐れて何も話せなくなってしまうこともあるのです。正しく美しい日本語を話すことももちろん大切ですが、その場、状況に適した発話をするのは学習者が職場にとけ込む上で重要です。基本をしっかり覚えてからというお考えもよくわかるのですが、学習目的が文献を読むことではなくコミュニケーション能力を養うことにあるのですから、目的にあった指導法を選ぶべきでしょう。コミュニケーション能力はコミュニケーションを通じてのみ高められることは何度も述べてきました。コミュニケーションを重視した授業では、文法や発音などの矯正は本当に必要と思われるものだけに絞り行うのが望ましいのですが、かといって学習者が自分の発話に対して不安を抱いたまま解消されないのでは困ります。難しいかも知れませんが指導者と学習者のコミュニケーションを密に保つことで学習者が安定した気持ちで授業に臨めるようにします。

教室で学んだ日本語が職場では通じないという意見はよく聞かれます。「です」「ます」等の丁寧な表現を教えておけば学習者はどこへ行っても困らないでしょう。「・・・じゃん」「・・・でさあ」等といった表現を使える相手は限られています。ところが、場所や状況によっては「です」「ます」的な表現が人間関係に支障を来すことがあります。例えば、仲のよい友人たちで話をしているときに、一人だけ敬語を使っているのは雰囲気も白けてしまいます。実際、工場で働く帰国者の中には、「きどってんじゃねえよ」と同僚に言われた者もいると聞きます。これらは、学習者の雰囲気や状況に適した発話をする能力が養われていないことが原因と思われると思います。こういった能力は、言葉の学習だけで培うことはできません。職場に適応するという適応学習を指導法に取り入れるべきでしょう。学習者の職場について情報を集め、学習者と相談しながら学習を進めていきます。その中で、言葉の問題も聞き取れない通じないという問題から、なぜそうなのか、そうならないためにはどうしたらよいか等について話し合っていきます。指導者は、話し言葉には様々な形があり、それらが相手により使い分けられていること等の情報を与えたり、学習者が様々な日本人と接触する機会を与えられるような授業を工夫します。最終的には、指導者から離れた後も学習者が自分で環境や状況を利用しながら日本語を磨いていく力を培ってやるようにします。

### 第3節 学習活動例

この節では、主にコミュニケーションの力を伸ばすことを目指した学習活動例を紹介します。したがって、文の構造についての知識を得ること、正しい文をきれいな発音で話すこと、中国語を日本語に翻訳すること等を主な目的とする場合には、別の活動を工夫した方がいいでしょう。もちろん、コミュニケーションの力をつけるためにはコミュニケーション重視の学習活動だけしていればいいというわけではありません。並行して文字や基本的な文法などについても学習していく必要があります。単語の力をつけ、きちんと発音できるように練習することも大事です。しかし今回この節では、ことばの形の正確さに焦点を当てたそれらの学習活動については扱わず、コミュニケーション重視の学習活動だけを取りあげたいと思います。それは、従来、コミュニケーション重視の活動が中上級の学習者向けの活動であり、日本語学習の初心者には無理なものと考えられる傾向があったこと、また、丸暗記した文を会話のスタイルで暗唱し合うことをもってコミュニケーション重視の学習活動と称する傾向が少なからずあったことによります。

また、この節でとりあげる活動例は、帰国者を対象とする場合に焦点を絞ります。中国語の使用や異文化理解の観点の導入等、留学生等の学習者を対象とした場合にそのまま適用できない面をたくさん含むことになると思います。一般の学習者に対してのコミュニケーション重視の活動例については、すでに多くの指導参考書が出されています。興味のある方は、そのような本も読まれると、学習活動についてより幅広く知ることができるでしょう。

コミュニケーションは、あることを成し遂げるために何らかの情報をやり取りすることです。特別の目的なしに雑談したりあいさつを交わしたりすることもありますが、その場合も、良好な人間関係を保ったり拡大したりするためですから、広い意味ではやはり目的をもった行動であると言えます。したがって、コミュニケーションの力をつけるための学習活動であれば、活動の成果を評価するときも、その目的達成のために意味のやりとりがスムーズにできるようになったかどうかでその活動がうまくいったかどうかを評価すべきでしょう。

帰国者の場合、周囲の日本人とのコミュニケーションは実際にはどのように行われているのでしょうか。帰国者は日本語を勉強しながら同時に仕事をする等、日本語を使ったコミュニケーションの力がまだ十分でないままに社会生活を送っていかねばなりません。帰国者が実際に行っているコミュニケーションは、自分の不十分な日本語の力を別のいろいろな方法で補いながら行うコミュニケーションなのです。

わたしたち指導者は教室の中だけで、学習者がコミュニケーションに完全に不自由を感じなくなるまでにすべてを教えこむことはできません。わたしたちができるのは、ほんのとっかかりだけなのかもしれません。完ぺきを目指すだけの時間ありませんが、それ以上に、コミュニケーションの力が結局は実際のコミュニケーションを通じて自分で身につけていくものだからです。力が不十分でもコミュニケーションをしなければ力は伸びないのです。問題は、自分にコミュニケーションができるはずがないという学習者の思い込みや日本人と接触することへの恐れ、しゅう恥心をいかに乗り越えさせるかです。これを乗り越えて基礎的なコミュニケーションができる態勢をつくるのが早ければ早いほど、自分で周囲から自然に新しいことを学べる態勢も早くできてくるでしょう。

ここでは、できるだけどんな現場でも実施できるような例を紹介しますが、やはりあくまでもヒントでしかありません。指導者が自分の現場の状況に合わせて変形しなければならないことは言うまでもないでしょう。

## 1 ゲーム

ゲームを使った学習は、学習者に定着させたいことばや表現を用いて、競争したり勝敗を決したりしながら進めます。ゲームは、あることばまたは表現を繰り返して使用するよい機会です。ゲームを進めていくには、相手の言うことを理解したり、また自分の言いたいことを理解してもらうことが含まれていますから、学習者は意味のあることばのやりとりを集中的に練習することができます。ゲームという活動を通して、情報や意見を伝達する生きたコミュニケーション手段としてことばや表現を使うこととなります。

### (1) 「ゲーム」を使った指導の特色

ゲームには、聞く力、話す力、読む力、書く力のどの面を伸ばすためかによって、いろいろなものがあります。また、聞く力を伸ばすためのゲームをちょっと変形するだけで、話す力を伸ばす練習や読んだり書いたりする力を伸ばす練習として使うこともできます。また、説明したり同意したり批判したり...といった、いろいろなコミュニケーションの練習にもなります。ある表現やことばを、そのゲームのルールにしてしまえば正確に言わせる練習にすることもできます。

ゲームは初級の学習者にも、中級や上級レベルの学習者にも有効な学習手段です。ほとんどのゲームは、ルールを一部変えたり、使うことばを変えるだけで違ったレベルの学習者向きになります。ゲームの変形については具体例を参照してください。

ゲームを通しての学習は大人には向かないのではないかと思われるかもしれませんが、しかし実際には、ドリル練習のときに感じがちの「正確に覚えなくては」とか「間違ったらどうしよう」等といった緊張から解放されてリラックスして日本語が使えること、指導者が言った通りに言う受け身の発言ではなく、自分から働きかける活動なので楽しめること等、大人の学習者にも十分通用する利点があります。

ゲームは準備にもあまり時間がかからないし、ゲームそのものも

10分～30分程度でできるので手軽に行える指導法です。

### (2) 指導者の留意点

ゲームを選ぶときには、学習者が興味を持つかどうか考えると同時に学習者の日本語のレベルに合っているか、指導者の教えたいと思うことばまたは表現が無理なく自然に使える活動になっているか、読む・書く・聞く・話すのうちのどの能力を伸ばすためのものか等を考慮する必要があります。レベルを考えるとときには、ゲームに必要なことばや表現のうち、聞いてわかればいいものはどれで、使わなくてはならないものはどれかに注意しましょう。文の構造や発音がむずかしそうに思えても、聞いて理解するだけなら容易な場合もあります。

適当なゲームを選んだら、それがどんなゲームなのか、どんなふうにするのか、ルールはどうなっているのか等について、学習者によくわからせなければなりません。もしもそれが不確かなまま始めてしまうと、学習者は混乱するだけで、楽しいどころか幻滅してしまうかもしれません。このやり方についての説明は中国語で行ってもいいでしょう。学習者にやり方を確実にわからせるということがその目的だからです。

机に向かって勉強するのが日本語の学習だと思っている学習者は、最初はゲームになじめないかもしれません。その場合、無理に参加させるようなことはやめて、まず他の学習者のゲームを眺めてもらうか、または審判のような役割をしてもらう等の配慮が必要です。ゲームが流れに乗ってきて、その学習者も興味を示すようになったところで参加させるとよいでしょう。

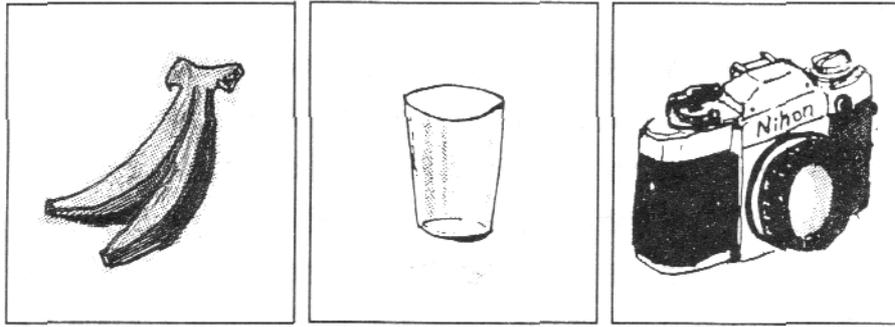
ゲームの目的は「遊び」の楽しみを通じて、学習者を意味のやりとりに集中させ、自然に日本語を使わせることにあるのですから、途中で文法上の誤り等を訂正するためにゲームを中断するようなことはやめましょう。そういう誤りは指導者がメモしておき、学習者

のレベルに合わせて、あとで意見を述べるなり訂正するなりするようにします。学習者が飽きないうちにゲームをやめて、集中力を維持することも忘れないようにしましょう。

#### ア ゲームの具体例 - 1 「連想ゲーム」

これは、ある物について説明した文を聞いて、それをヒントにその物の名前を当てるゲームです。このゲームは、聞いてわかることばをふやすこと、聞きとりの力をつけることが主な目的です。

まず、絵カードを準備しておきます。絵カードは、学習者のレベルが低くてまだ言えないときに指して答えるためや、後の「変形」 - 1 のゲームで学習者に指示を出すときに使います。



### ゲームのやり方と注意

指導者はある物について、形や色、使い道などを説明します。例えば「バナナ」の説明の場合は、

a. 「くだものです。あまいです。形は長いです。黄色いです。」

学習者のレベルに合わせて、

b. 「細長い食べ物です。野菜じゃありません。きいろくて、甘いです。」

c. 「八百屋で買えます。日本では安い果物ですが、日本国内ではあまりできません。たいていは南の国から輸入しています。」

等と説明の言い方を考えてください。このとき話す速さに注意してください。なるべく自然なスピードで話して、学習者の耳をその速さに慣れさせるようにします。

指導者の説明を聞いてわかることだけが目的の場合は、答えは絵カードを指すだけでもいいのですが、その物の単語を覚えているのなら言わせませす。また、カタカナを学習済みあるいは学習中であれば書かせてもいいでしょう。ただし、主な目的は聞く力をつけることですから、書くのに時間がかかるようなら、それはやめた方がいいでしょう。自然なスピードでたくさん聞かせることを忘れないでください。

### 変形 - 1

のゲームを次のように変化させると、学習者に話させる練習になります。

まず、指導者はひとりの学習者だけに絵カードを見せます。その学習者が絵カードについて説明して、他の学習者がそれを当てます。

ことばで説明するのがむずかしいときには、ジェスチャーをしてもいいことにすれば、初歩の学習者でもできます。ことば以外の手段を併用してもいろいろなことが伝えられることを実感させるよい機会になります。

例えば「コップ」の絵のときには、

「水やビールを飲むときに使います。ガラスでできています。」と言えなくても、「水」や「ビール」が言えれば、飲むジェスチャーとコップの形を表すしぐさで十分ゲームが楽しめます。

### 変形 - 2

物についての指導者の説明をもっと抽象的にして、話すことにも重きをおいた練習にすることもできます。

例えば「カメラ」が答えの場合は、

「それは機械です。」

とだけ言って、あとは学習者にいろいろ質問させます。質問は「はい」か「いいえ」で答えられるものに限ります。学習者は「それは高いですか。」「大きいですか。」「この学校にあるものですか。」「私にも買えますか。」等、何でも思いつくままに質問して、答えを見つけます。

ゲームに入る前に、学習者に使わせたい表現を導入または復習してから始めるといいでしょう。学習者の日本語のレベルが一定でなくいろいろなレベルの学習者が混じっている場合には、それぞれの能力に合った表現を用意しておきます。

このゲームでは、質問の数を制限した方が緊張感があっていいでしょう。

### イ ゲームの具体例 - 2 「すごろく」

この「すごろく」では、さいころを振って出た目の数だけ進み、止まったところにある質問に答えながら、あがりを目指します。このゲームの目的は、自分のことについてのいろいろな質問に答える練習と日本についての一般常識を知ることの二つです。

次ページのようなます目を書いた紙(すごろく盤)を用意します。その場で黒板等に描いてもいいで

しょう。

他に準備するものは質問カード、クイズカード、学習者の名前コマそれにさいころです。質問カード、クイズカードはトランプほどの大きさのものが手ごろでしょう。

質問カードには、「毎日何時に起きますか。」「好きなスポーツは何ですか。」等、学習者自身のことについての質問を書いておきます。学習者に作らせたものを混ぜてもいいでしょう。質問はやさしいものからむずかしいものへと並べます。

クイズカードには、日本事情についてのクイズが書かれています。このカードは「そうです」か「ちがいます」(または か×) で答えられる形にします。このクイズを「ことば」の問題とは切り離して日本事情の「知識」だけにねらいをしぼるものにするのであれば、このカードは中国語で書いた方がいいでしょう。一般常識やマナー

の中から、学習者に特に知ってもらいたいものを選んでクイズにします。クイズカードは同じ学習者に何度も使えないので、たくさん用意しておき、さしかえるようにします。難度もやさしいものからむずかしいものへと並べます。

【すごろく盤】

8	チャンス	9	10	11	クイズ
7	20	クイズ	21	22	12
6	19	25	あがり 26	クイズ	13
クイズ	18	クイズ	24	23	14
5	17	クイズ	16	チャンス	15
4	3	チャンス	2	1	ふりだし

【質問カード例】

質問 1  
お名前を言ってくだ  
さい。

質問 2  
毎日何時に起きます  
か。

質問 3  
今日の朝ご飯は何を  
食べましたか。

【質問カードの内容例】

1. お名前を言ってください。
2. 毎日何時に起きますか。
3. 朝ご飯は何を食べましたか。
4. いつ洗濯しますか
5. どこで買い物しますか。
6. 趣味は何ですか。
7. 好きなスポーツは何ですか。
8. 御家族は何人ですか。
9. 故郷はどこですか。
10. 誕生日はいつですか。
11. おすまいはどちらですか。
12. どんなお仕事をしていますか。
13. 一番ほしいものは何ですか。
14. 一番したいことは何ですか。
15. 暇なときには何をしますか。
16. 将来はどんな仕事をしたいですか。
17. 日本に来てからどのくらい経ちましたか。
18. 百万円あったらどうしますか。
19. きんのうの晩にしたことを教えてください。
20. 一番きれいな食べ物と、その理由を教えてください。

【クイズカード例】

クイズ - 1  
日本国土地震多 .

クイズ - 2  
中国領土的面積  
大約有日本的十倍 .

クイズ - 3  
東京都的人口有日本  
総人口的十分之一 .

クイズ - 4  
在日本冬天常々  
来台風

クイズ - 5  
梅雨季節是 6 月  
到 7 月的時候 .

クイズ - 6  
到 6 歳、就上小学 .

【質問カードの内容例】

1. 日本は地震が多いです。
2. 中国の面積は日本の十倍です。
3. 東京の人口は日本の人口の約 10分の1です。
4. 台風はたいてい冬日本に来ます。
5. 本州では梅雨は6月から7月頃です。
6. 小学校には6才で入学します。
7. 高等学校は義務教育です。
8. 日本では20才から選挙権があります。
9. 訪問する時にはまえもって連絡するのが常識です。
10. 電話は日本国内ならどこへかけても10円で3分話せます。
11. 夜遅く電話したら相手に失礼ですが、朝早くならいいです。
12. 日本の会社に公営のものはありません。
13. 健康保険は希望者だけが加入します。
14. 会社の昼休みはたいてい1時間ぐらいです。
15. 通勤時間には電車が増発されるので、ほとんどの人が座れます。

## ゲームのやり方と注意

ゲームの進め方は次の通りです。

- 1) まず、じゃんけんかさいころの目で学習者のゲームの順を決める
- 2) 1) で決めた順にさいころを振って、出た目の分だけコマを決める
- 3) 止まったます目の質問やクイズに答える

ます目の意味は次の通りです。

- ・「チャンス」……その目からもう1目進める
- ・「クイズ」……日本事情についてのクイズに答えて間違えたら3目下がる
- ・1～26……自分自身についての質問に答える、答えられなかったら元の位置にもどる

質問カードは2回読みます。指導者が読み上げてもいいですが、次の順番の学習者が読むというルールにして、読む練習を付け加えることもできます。クイズカードは中国語書いてありますから、学習者自身がめくって答えます。質問にもクイズにも、答える時間を例えば「10秒以内」等と制限します。

質問カードを作るときには、学習者にとって聞かれたり触れられたりしたくないプライベートな話題は絶対に避けるように注意してください。

## ゲームの変形いろいろ

このゲームは、質問カードをいろいろ変化させることによってどのレベルの学習者でも楽しめます。例えば、日本語がほんの初歩の人のためのゲームにするときには、単語を覚えたい物の絵カードを使うこともいいでしょう。また、工場で使う道具の名前や指示のことばを覚えたい学習者には、その道具の写真や絵をカード代わりにすることもできますし、いろいろな指示を書いたカードを用意しておいて、「机の上のボールペンをもってきて」等と指導者が読み上げた指示にしたがって学習者に実際に行動させることもできます。また、クイズカードの方を例えば、

- a. 「公園に昼ご故を食べます。」

といったような、助詞の使い方が誤った文を書いたものにして、×で答えさせるか正しく訂正させるようにすれば、「てにをは」の使い方があやしい学習者用の練習になります。

その他、中国語を母語とする学習者がよく混同する

- b. 「くない」と「じゃない」
- c. 「大きいの本」の矯正
- d. 「ます」と「ました」の使い分け

等のクイズカードもいい練習になるでしょう。

## ウ ゲームの具体例 - 3 「社長に伺ってきて」

このゲームは敬語の使い方に慣れることを目的としたものです。敬語の使い方尊敬語、謙譲語の意味と使い方を学習したあとで、「召し上がる」「いらっしゃる」「御覧になる」「ご存じ」「お好き」等、よく使われる敬語を使う練習です。

準備するものとしては、動詞カード(片面は辞書形、片面は敬語のもの)と身分カード(社長、部長、課長、秘書、社員...)が必要です。

身分カードを受け取った学習者が敬語を使って話さなければならないというルールで進行させます。

### 社長に伺う

指導者が社長になってカードの辞書形を部下の学習者に見せます。部下は敬語を使って質問します。例えば「たべる」のカードを示された学習者は「社長、召し上がりますか。」と言います。ものを差し出すジェスチャーをついたりするといいでしょう。ここは口慣しですから、指導者は簡単に「うん」「知らない」等と答えて、次々とスピーディーに練習します。

### 社長に伺ってきて

指導者は課長(部長でもいい)になります。社員(秘書でもいい)の学習者と社長の学生が必要です。例えば「来る」のカードの場合には、課長は社員に「社長に、明日いらっしゃるかどう伺ってきて」等と指示します。社員は社長のところへ行行って、「社長、明日いらっしゃいますか」と言い、社長は自分の好みで「うん、来る」「いいや明日は来ない」等と答えます。

慣れてきたら課長の役も学習者に任せます。

課長に聞いてきて

指導者は庶務課長になります。学習者は社員（または秘書）と業務課長です。例えば「見る」のカードの場合には、庶務課長は社員に「業務課長に、午後書類を見るかどうか聞いてきて」等と指示します。この指示を受けて、社員は業務課長に「課長、午後書類をご覧になりますか。」と言わなければなりません。

上のイ、ウのゲームでは、社員が上司に報告をすることを付け加えてより複雑な練習にすることもできます。つまり、「社長は明日いらっしゃらないそうです。」「業務課長は午後書類をご覧になるとおっしゃいました。」等の表現です。

また、「社長に尋ねられる」場面に変えれば、謙譲語の練習に切り換えることができます。

## 2 役割演技（ロールプレイ、“表演小品”）

「役割演技」は文字通り「役割を演じること」です。まず、実際に起こりうる現実性のある場面とそこの学習者の役割が設定されます。次に学習者に、そこで自分に与えられた課題を、相手とどんなやりとりをしながら達成するかを考えさせ、実際に演じさせるのです。

### （1）「役割演技」の特色

先に紹介した「ゲーム」と比較すると、「役割演技」は生活の中ゲームのコミュニケーション場面を直接とりあげやすいという利点があります。つまり、「ゲーム」よりもずっと実践的性格が強い活動なのです。「ゲーム」では「遊び」のおもしろさで学習者を引きつけますが、「役割演技」では自分の生活との関係の強さを学習者に認識させ、やる価値があると思わせなければなりません。

実際のコミュニケーションでは、話の展開を予測しながら相手の出方しだいで自分も方針を変更して折り合ったりする必要が出てきますが、「役割演技」ではこのような予測や修正等、学習者の創意工夫の面が「ゲーム」よりもさらに重視されます。

後で紹介する「交流会」や「総合活動」は、教室外に出かけたり外部からゲストを招いたりして、実際に外部の日本人と接触する方法をとりますが、「役割演技」は、ふつうの授業と同様に教室内で指導者と学習者の間で行うことのできる活動です。したがって、体験性という面では少し弱い点がありますが、その分だけ安全性は強くなります。また、「交流会」や「総合活動」は比較的長い時間を必要すると同時に、指導者に臨機応変の対応を要求する活動ですが、「役割演技」はふつうの1コマの授業として実施できる簡便性があり、指導の計画も比較的是っきりと立てられます。

他のコミュニケーション重視の活動とも共通することですが、学習者の母語（中国語）をうまく利用すると効果的に役割提示や事後の指導ができる点も、この活動の特色の一つにつけ加えられます。

このように実践的性格と簡便性、安全性を兼ね備えた「役割演技」は、コミュニケーション重視のいろいろな活動の中でも、教室内でひんぱんに実施できる代表的な活動と言えます。

「役割演技」も他のコミュニケーション重視の活動と同じように学習者が与えられた課題を達成するために、自分の持っている日本語の力を総動員し、またジェスチャー、筆談などの手段も駆使して、じょうずにコミュニケーションできるようになることを目指しています。また、現在あるいは近い将来に自分が体験するだろう場面や役割を模擬体験することにより、日本での生活を現実的にとらえ、学習や生活に対する心構えを築くことも大切な目標の一つです。

学習者が自分に与えられた役割、課題を果たすには、日本における人間関係、コミュニケーションのルールやスタイルといった社会・文化的な面も無視できません。こういう異文化理解に関係する面の大切さを学習者に意識化させることも「役割演技」の目標の一つにあげられるでしょう。

### （2）役割カードとその作り方

「役割演技」は基本的には役割カードを使って行います。役割カードには、場面や役割、課題（課題は省略されていて自分で考えなければならない場合もある）が書いてあり、学習者はそれを見て、どう対処するか考えてから演技を始めます。

ふつうは指導者が活動の進行役と相手役とを兼ねて行いますからカードは1枚で済みますが、指導者が進行役に徹し、相手役として別の日本人ゲストを招いて行うような場合には、カードが2枚以上必要になってきます。相手役日本人も学習者も、互いに相手のカードの内容を知らない方が自然な演技ができるからです。また、役割カードの他にスケジュール表や時刻表等の小道具を併用した方がよい場合もあります。

学習者が中国帰国者だけの場合には、学習者用の役割カードは中国語で書き、相手役のゲスト等日本人用には日本語のものを用意します。

一般の日本語学校ではいろいろな国の学習者が混じっていて、学習者の母語も様々です。そのため、学習者の母語を使うことができず、学習者が読んでわかるようにやさしい日本語で役割カードを作らなければなりません。この点が「役割演技」の採用をむずかしくさせているのですが、中国帰国者の場合は、母語は中国語一つですから比較的簡単にできます。このような点から言えば、「役割演技」は中国帰国者対象の指導に向いている活動と言えるでしょう。

役割カードを作るときには、やりとりがどのように進むかの筋書をはじめから与えてしまわないように注意します。学習者自身の判断や工夫の余地がないようではいけません。また、セリフを丸暗記させてそれを発表させるというような形も避けるように注意しましょう。「役割演技」では、演技の中では、どう出るかわからない相手の反応を受けながら、自分の持てる手段（ことばも含む）をどう駆使してコ

コミュニケーションするかが重要です。ですから、役割カードが筋書を決めてしまったり言うべきことを指定してしまったりするようなものであっては意味がないのです。

また、役割カードは長すぎず、情報量が多すぎないようにすることも大事なことです。カードを読むことが目的ではありませんから読むことに骨が折れたり内容がわかりにくかったりするようではうまくありません。場面、自分の役割、課題が一目で想い描けるようなカードが理想的です。それから、学習者にとって現実味のある場面や役割の設定でなければならないことも重要なポイントです。

このような役割カード作りのポイントに気をつけて、次の《例 - 1》を見てください。(なお、ここでは便宜上、日本語版の役割カードを示しますが、学習者に示すものはこれを中国語に翻訳したものを使います。)

この例は役割カード作りのポイントから見て適当とは言えない例です。あまりに段取りをつけすぎていますし、セリフの指示までしています。

#### 《例 - 1》

役割：日本語学校の学習者

場面：今日の夕方中国から友達が来ることになった。迎えに行かなければならない。授業に欠席することを先生に連絡して許可を得なさい。

1. 学校に電話してクラスと名前を言いなさい。
2. 担任の先生を呼び出しなさい。
3. 先生に「今日は欠席します」と伝えなさい。
4. 欠席の理由を言いなさい。
5. 「あしたは必ず出席します」と言いなさい。
6. 欠席することを謝りなさい。
7. 電話を切る時の挨拶をしなさい。

これを留意点に気をつけて作りかえてみましょう。次の《例 - 2》《例 - 3》《例 - 4》が作りかえた例です。それぞれ書き方のスタイルや条件の詳しさ等がちがいますが、どのようにことを運ぶか自分で考える余地が残されている点では共通しています。

#### 《例 - 2》

あなたは日本語学校の学習者です。今日の夕方の5時半から授業がありますが、中国の友達が午後5時すぎに成田に到着するという連絡が突然入りました。担任の先生は出欠にきびしい先生なのですが、大事な友達なので、今日は学校を休んで迎えに行きたいと思います。担任の先生に電話連絡をしなさい。

#### 《例 - 3》

役割：日本語学校の学習者

場面：今日の夕方中国から友達が来ることになって、迎えに行かなければならない。授業に出られないことを学校に連絡せよ。

#### 《例 - 4》

電話連絡

- ・夕方中国から友達が来る
- ・迎えに行きたい
- ・授業を休む

### (3) 指導の主な流れ

#### ア 事前準備

「役割演技」の活動に入る前に準備しておくものとしては、まず役割カードが必要になることはいう

までもありませんが、役割カード作りと並行して、その役割、課題を達成するために学習者がどんな語句や文型、コミュニケーションの方略が使えるか、あるいは使わせたいかをよく検討します。その結果、事前に指導しておきたいことや復習させておきたいことがあれば、事前の指導を計画します。事前に少しくらい指導したのではとても間に合わないというのであれば、カードの内容がそもそも学習者のレベルからみて無理だったということです。役割カード自体を修正すべきでしょう。

マナーや人間関係等、その「役割演技」と関連する社会的・文化文化的知識についても、事前に指導しておくべきものがあれば指導しておきます。しかし、この種類の知識は体験を通してでないとなし学習しにくい場合が多く、ふつうは「役割演技」等比較的安全な模擬体験を経てから問題点を意識化させる方法のほうがいいでしょう。

役割カードと事前指導の準備の他には、活動の際に使用する機材や小道具（ビデオ、テープレコーダー、実物の小物等）の準備が必要になります。また、学習者に評価させる方法をとるのであれば観察評価用のチェック用紙（モニターシート）を用意しなければなりません。

## イ 「役割演技」の実施と演技後の検討

「役割演技」を初めて行う場合には、事前にこの活動の目的と意義、方法について学習者によく説明しなければなりません。説明が済んで学習者の動機づけができれば「役割演技」の活動に入ります。まずカードを提示して場面、役割を設定します。

演じる学習者一人だけにカードを見せるか、学習者全員に見せて皆で考えるかは、学習者のレベルやクラスの雰囲気、「役割演技」という活動に慣れているかどうか等によって決めます。最初は皆でいっしょに考えてだれか代表が演技してみるようにして、慣れてきたら一人ずつの課題にしていくのがいいでしょう。

皆でいっしょに考える場合には、指導者が中国語ができるならカードを示さなくても読み上げる方法でできます。また、役割、課題によっては、中国語で読み上げる方法以外に、例えば、保健室へ行く許可をとるのに腹痛や頭痛を表す絵カードを使う等、物や絵で示す方法も考えられます。

指名された学習者が演技している間、他の学習者にはそのやりとりをよく観察させます。そのためのチェック用紙を用意し評価を記入させるのもよい方法です。この際のチェックのポイントとしては、次のような点があげられます。

- ・役割カードで設定された状況は守られていたか
- ・課題はどの程度達成されたか
- ・やりとりのなめらかさはどうか
- ・自分の日本語のレベルに合わせて、いろいろな方法、手段を有効に駆使してコミュニケーションを行ったか
- ・話の進め方やマナー等、コミュニケーションのルールに反したところはなかったか
- ・発音、語彙、文型等で、コミュニケーションを妨げるような問題はなかったか

役割を演じた後、問題点について検討します。ビデオに撮ってすぐにその場で再生できるならば、それを見ながら検討します。ビデオに撮らなくても、録音テープに録音した記録を使って検討することもできます。また、ビデオや音声テープ等の機器類を使用しなくても、他の学習者や指導者の観察結果を出し合って話し合う方法でも十分に効果をあげることができます。

演技後の検討では、まず、演技した本人にどこがむずかしかったか、表現したくてもできなかった点があるか等、本人の評価を引き出します。相手役の日本人がいる場合には、学習者の表現で意味がわからなかった点やマナー等で気分を害した点があったかを聞き、互いの誤解や行き違いの部分がはっきりするようにします。そして、他の学習者にその誤解や行き違いを避けるためにはどのような表現や話のもっていき方がいいか意見をさせます。

役割カードを演じる学習者にだけ見せて他の学習者には見せない方式をとった場合には、この話し合いに入る前に、他の学習者が今演じられた場面、役割、目標（課題）が何であったかを理解できたかどうか、問答の形でチェックします。そして、今の状況はこうだったんだよと役割カードを皆に提示して確認します。

指導者は学習者との話し合いを通じて、演技をできるだけ積極的に評価しながら、同時に、何が問題点かをはっきりさせて改善策が見えてくるようにします。

このようにして、少しずつ役割に変化をもたせながら、

- 1) 役割を提示する
- 2) 考えて演技してみる
- 3) 評価し改善策を検討する

というサイクルを繰り返していきます。

## ウ 事後の指導

学習者全員に共通する弱点で、「役割演技」の時間内に手当しきれないような問題点を発見した場合には、指導者は事後のなるべく早い時期に特別の授業を設けて指導するようにしましょう。

また、個別の学習者に特に大きな問題点があった場合には、個別指導のような形で手当をした方がいいでしょう。

### (4) 指導者の留意点

#### ア 学習者がやる気になる場面、役割の設定

「役割演技」は演技をする活動ですが、優のように現実にはあり得ないような役割を演じるものではありません。学習者によってはそういう設定でもおもしろがってやるかもしれませんが、そういう演技に

は抵抗を見せる学習者も少なくありません。やはり、近い将来において自分もこのような状況に出会う可能性が高いと学習者が感じることでできる設定が好ましいでしょう。初めのころは、むしろ、現在しゅっちゅう出会っている場面、役割（例えば、日本語学校の学習者、病気やケガで通院する患者等）を設定するほうが無難です。

#### イ 学習者の性格等に対する配慮

いかに学習者にとって現実味のある設定をとったとしても、「役割演技」はあくまでも模擬場面であって、“ごっこ”の域をでないものでもあります。学習者の性格や考え方によっては、適当な学習方法と言えない場合もあるかもしれません。そのような学習者には無理強いせず、他人の演技を見ることから始めさせ、雰囲気になじんだところで参加させていくように段階を踏むべきです。

失敗しても大丈夫、実際の場に立つ前に試せるよいチャンス、というように考え、楽しみながら気軽に試みることができる雰囲気作りが何より大切です。

#### ウ 評価と訂正

学習者が演技を終えたあと、指導者はその結果について学習者たちとともに検討し評価しますが、その際に留意すべき点があります。

自信のない学習者やまだレベルの低い学習者には、課題を達成した点やいろいろな手段を駆使した点を高く評価して、コミュニケーションに対する積極的な態度を助長するようにすべきでしょう。

文型や発音等の面である程度のレベルに達しており、自信ももっている学習者に対しては、あいづちや確認、聞き返し、ことば遣い、話題の選び方、話の展開のし方、態度等、生きたコミュニケーションに特有な要素や社会的、文化的な要素に目を向けさせ、よりなめらかなやりとりをするためにはこれらの要素への配慮が必要であることを自覚させましょう。

このように、「役割演技」を試みさせることにより、学習者に今自分がどのようなコミュニケーションができ、どのようなことができないのかを徐々に実感させていかなければなりません。文型や表現の学習に対しても、形の正確さにだけ注目するのではなく、その文型や表現でどんなコミュニケーションができるのかに着目できるように学習者を導いていく必要があります。指導者の適切な評価が学習者を望ましい方向へと導く鍵になります。

「役割演技」の最中に指導者が学習者の発音や文法上の誤りを指摘して、コミュニケーションの流れを中断することも同じ理由により避けなければなりません。学習者がせっかく意味のやりとりに集中しているときに形の正確さを持ちだして訂正したのでは、学習者の意識を別の方向にそらせてしまいますし、コミュニケーションに対する意欲も減退させてしまいます。

発音や文法的な不正確さが原因でコミュニケーションがうまくいかない場合には、指導者は訂正という形ではなく、「ああ、～ね」「～～のことですか？」等と、相手の言わんとしていることを推し量って確認する形で正確に言いなおしてあげます。そうすれば、コミュニケーションを中断することはありません。

#### エ 「役割演技」の位置づけとテーマ例

「役割演技」を、ある文型や語句についての一連の学習の一部として位置づけることがあります。つまり、その文型、語句の形と意味を導入し、用例を通して使い方を学習するというような学習が済んだ後に、その文型や語句を運用してコミュニケーションをする「まとめ」の活動として「役割演技」を行う場合です。

この場合は、一連の学習がある文型や語句の学習という共通目的で結び付けられていますから、その一部としての「役割演技」も往々にして、その文型や表現の形の正確さに注意が集中してしまいます。指導者はその文型や語句を含むもっと幅広い表現でとにかくコミュニケーションをさせることに注意しなければなりません。

ここでは、「役割演技」のテーマを文型や語句の視点から選ぶのではなく、コミュニケーション場面の視点から選ぶ場合について考えています。こんな場所で行われるコミュニケーション、または、こんな意図、機能で行われるコミュニケーション、というように、「こんなときどうするか」という視点からの代表的なテーマ例をあげておきます。

[ 場面の視点からのテーマ例 ]

[ 表現機能の視点からのテーマ例 ]

(ア) 役割演技の具体例 - 1 「誘う」

では具体的に「誘う」という場面を例にして、「役割演技」を考えてみましょう。

ここでは、この時間を担当している指導者（中国語ができる）の他にもう一人ゲストの指導者（中国語ができない）を招いて、学習者がその指導者を「誘う」という場面を設定してみます。学習者のレベルは初級の中～上とし、1～2時間かけて実施します。

役割カードの準備

ここでは、やりとりの必然性を保ち演技をやりやすくするために、学習者側だけでなくゲストの指導者にも役割カードを用意することにします。

まず、学習者が先生を誘う場面として適切なものを設定しなければなりません。

次のようにA～Fの6組のカードを用意しました。学習者に示すカードは実際には中国語で書いてあるものを用意します。

A 学習者 今日の日曜日、同じクラスの仲間があなたの家に集まって、一緒に餃子を食べることになりました。皆が担任の先生を誘いたいといっています。あなたが代表して誘ってください。

指導者 あなたはクラスの担任です。普段から学習者と親睦をはかるため皆と一緒に食事をする機会を持ちたいと思っています。食事をするならウイークデイの夜がいいと思っています。

B 学習者 今度の土曜日、同じクラスの仲間が家に集まって、一緒に中国料理を食べることになりました。皆が担任の先生を誘いたいといっています。あなたが代表して誘ってください。

指導者 あなたはクラスの担任です。普段から学習者と親睦をはかりたいと思っています。学習者から餃子の作り方も習いたいと思っています。今週は土曜日に別の学校で仕事があります。

C 学習者 あなたはバレーボールが好きで、毎日昼休みに皆でバレーボールをしています。今、2時間目が終わったところです。今日は担任の先生と一緒にやりたいと思っています。誘ってください。

指導者 あなたはクラスの担任です。あなたの趣味はバレーボールです。最近忙しくてあまりできません。今は2時間目が終わったところです。今日はこの後ずっと授業が入っているため昼休みに宿題をつくらねばなりません。

[D] 学習者 あなたは、バドミントンが好きで、毎日放課後、皆とバドミントンをしています。今、2時間目が終わったところです。今日担任の先生と一緒にやりたいと思っています。誘って下さい。

指導者 あなたはクラスの担任です。あなたの趣味はバドミントンです。最近忙しくてあまりできません。今は2時間目が終わったところです。今日はこの後ずっと授業が入っているため忙しいですが、放課後は空いています。

[E] 学習者 今、隣の町の映画館で中国映画「三国志」をやっています。今度の土曜日、クラスの皆と一緒に見に行くことになっています。皆は担任の先生も誘いたいといっています。あなたが代表して誘って下さい。

指導者 あなたはクラスの担任です。あなたの趣味は映画鑑賞です。特に中国映画が好きです。今度の土曜日、「三国志」を見に行くので誰か一緒に行く人はいないか探しています。

[F] 学習者 今、近くの映画館で中国映画「三国志」をやっています。今度の日曜日、クラスの皆と一緒に見に行くことになっています。皆は担任の先生も誘いたいといっています。あなたが代表して誘って下さい。

指導者 あなたはクラスの担任です。あなたの趣味は映画鑑賞です。特に中国映画が好きです。この間も「三国志」を見てきました。まあまあ、面白かったと思っています。次はまた別の中国映画があれば見に行きたいと思います。

指導者の役割カードから日程についての記述を省いて、別に「スケジュール表」をわたす方法も考えられます。

事前の指導

「誘う」という「役割演技」の前に次のことを指導しておきます。

《「誘う」という場面に関連する語句》

「映画を見る」「映画を見に行く」

「餃子を食べる」「餃子を食べに行く/来る」

「パーティを開く」「パーティに行く/来る」

「遊ぶ」「遊びに行く/来る」

「ハイキング/コンサートに行く」

「飲む」「飲みに行く/来る」等

《「誘う」ときの表現》

「～ませんか?」「～ない?」

「～ましょう」「～(よ)う」

「(あなた)もいっしょにどうですか?」

「いかがですか?」等

「誘う」相手よっての礼儀の問題や、「誘う」目的や内容の適切さ等について事前に話し合っておいてもいいですが、ここでは、「役割演技」を行う中で出てきた問題をその都度とりあげることになります。

## 「役割演技」の実施と検討

指導者は、学習者用の役割カードをゲスト指導者に見えないようにして学習者全員に提示します。また、同様に指導者用のカードを学習者には見えないようにしてゲスト指導者に提示します。

少し時間を与えている対策を考えさせた後、一人の学習者を指名してゲスト指導者を相手に演技させます。

演技後、次のようなポイントについて、演じた学習者とゲスト指導者、他の学習者に問いかけます。

- ・役割カードの設定に違反していた点はなかったか
- ・「誘う」ことに成功したかどうか、断られた場合、その理由は何か、本当の原因は別にあるか
- ・演じた学習者にとって、表現したかったができなかったことはなかったか
- ・学習者、ゲスト指導者各々にとって、相手が何を表現しようとしたか、わからなかった点はなかったかそれぞれ、ことば以外の手段も含めてどんなふうに表現する方法があったか
- ・ゲスト指導者にとって、相手の学習者の態度や基本的な姿勢に問題はなかったか（横柄ではないか、慇懃すぎないか、しつこすぎないか、視線や声、姿勢等）
- ・ゲスト指導者にとって、（習慣や価値観の面で）違和感を感じた点はなかったか
- ・学習者にとって、相手の指導者の対応に不可解な点、不満な点はなかったか

指導者は、学習者の日本語の表現や語句、発音の不正確な点は、意味、意図が通じていれば一応よしとすることにします。場合によっては、二人の指導者でモデルの演技をしてみせます。

A～Fの「役割演技」が終わった後で、「誘う」という行為について日中の文化上の違いがあるか、次のようなことを問題にして簡単に話し合います。

- ・待ち合わせの時間帯の設定（早すぎないか、遅すぎないか急過ぎないか）
- ・誘う相手と内容のバランス（あまり親しくない相手を内輪の会に誘うか、教師と学習者との関係は...）]
- ・食事等に誘ったり誘われたりしたときの料金の支払は、だれが払うか
- ・断り方の表現は日中でどう違うか

### （イ）役割演技の具体例 - 2

#### 「引っ越し先で隣人にいろいろ尋ねる」

具体例1で「誘う」という機能面から見た役割演技の例を見ましたが、今度は場面の視点から「役割演技」のテーマを採った例を見てみましょう。ここでは、「引っ越し先」という場面をとりあげてみます。

学習者のレベルや所要時間等の条件は、具体例1の場合と同様とします。

#### 役割カード

学習者に役割カードを提示する前に、これから行う「役割演技」の前提となる状況設定を学習者全員に示します。もちろん、中国語で読み上げてもいいです。

#### [状況設定カード]

最近引っ越してきたばかりで、日本の習慣や町内のきまりについてはよくわかりません。隣人に引っ越しの挨拶はして顔見知りになつたばかりです。親切な人で、分からないことがあればいつでも聞きに来て下さいと言われていました。

相手役のゲスト指導者には、全体を通しての役割を設定する役割カードを1枚だけ用意します。

#### [相手役用の役割カード]

隣に中国からの帰国者が引っ越して来ました。引っ越しの挨拶に来てくれて、同じ年ごろの子供もいるということがわかりました。今後、何かあったら手助けできればとおもっています。

学習者用役割カードは次の〔A〕～〔H〕の8枚用意します。

〔A〕

ゴミの出し方がよくわかりません。分別しなければいけないようなのですが、どのように分別し、何をいつ出せばよいかははっきりしません。隣人に聞いて下さい。

〔B〕

ゴミの出し方がよくわかりません。分別の仕方は知っていますが、どこに出せばよいかはわからないのです。隣人に聞きに行ってください。

〔C〕

日本語学校の先生から町内会に入った方がいいと言われましたが、どのようにすれば入れるのか、また、会費があると聞きましたが、誰にいくら払えばいいのか分かりません。隣人に聞いてみましょう。

〔D〕

家に帰ったらドアの所にお知らせが置いてありました。電気工事の日程について書いてあるので、内容についてはわかるのですが、印鑑がいろいろ押してあってどのように処理すればよいかわかりません。隣人に聞きに行ってください。

〔E〕

家に帰ったら、ドアの所に回覧板が置いてありました。書いてある意味がわかりませんが、もしかしたら重要なことかもしれない。隣人に聞きに行こうと思います。

〔F〕

草取りのお知らせが回ってきました。開始の日時や場所はお知らせからわかります。しかし、その日用事があるので、草取り作業にどのくらいかかるのか、心配です。また、何を準備していけばいいのかもわかりません。隣人に聞いて下さい。

〔G〕

子どもの入っている町内の子ども会で潮干狩りにいくことになりました。一応親子で参加とのことですが、その日は仕事があってもどうしても行けません。隣の人も子ども会に入っているので、子ども一人でも参加できるのか聞いてみようと思います。

〔H〕

子どもの学校の先生が家庭訪問に来ることになりました。こんなとき何を言えばよいのか、また、何か料理とか用意した方がいいのか気になります。隣人に聞いてみることにします。

役割カードの他に、相手役のゲスト指導者にはゴミ収集方法をまとめたパンフレット等を用意し、学

習者には次ページのような資料を用意します。  
 ([ D ] のカードとともに使う資料)

至急  
回覧

工事停電のお願い

知度お引き立てはありがとうございます。  
 このたび工事のため下記のとおり停電をさせていただきますことになりました。  
 ご迷惑とは存じますが、よろしくお願い申し上げます。

お宅さまの停電日時は

8月13日 火曜日

午前 1 時 30 分から  
 午前 6 時 30 分まで

毎日の時は翌日の同じ時間帯に復電させていただきます  
 なおお昼も閉店時は中止させていただきます  
 この工事により配電設備が次のように変更されます。  
 当地域の電気の供給が途切れてしまったので電線を改  
 くし、今までより設備に余裕がなくなってお供りたけ  
 るようになります。

このことに関してですが、工事の都合で停電時間が多少伸びる場合もござ  
 いますのでご了承ください。  
 ◎停電のときの注意……遠慮なくお聞かせください。

東京電力 大塚支社(03) 918-1111

90  
8  
10

工事停電のお知らせ

([ E ] のカードとともに使う資料)



回覧

富地区社会福祉協議会  
 〒1 地区 2 丁目 2 番 1 号 花輪様子  
 連絡先: 斎藤 君 (483-0601)  
 成城生活学校 藤野智恵子  
 君 (482-3924)  
 後援 成城自治会

眠っている資源  
に再び光を

★リサイクルフェア(ミニボロ市)★

※ 地域の皆様にお願ひ、資源再利用運動にご協力を

資源愛護、再利用のシステム化、そして省エネルギー運動へと社会の要求が次々と新しい方向に変わろうとしています。タンスの底や押し入れの片隅で、眠っている品物がありましたら、ご協力下さい。

リサイクルフェアは利益をあげることが目的ではなく、品物そのものを、再び必要としている方に使っていただくことが目的です。

なお、超安値でお売りの収益金の一部を、地域の社会福祉事業費の一部として富地区社会福祉協議会に寄付をいたします。

と き 6月2日(木) 正午～3時  
 と ころ 成城区民集会室 (成城6-15-30キタビル)  
 寄付物品受付 6月1日(水) 午後2時～4時  
 受付場所 成城区民集会室

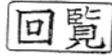
物品について、 1. 衣類(すぐに着用できるもの)  
 2. 贈答品(食器、茶器、タオル、シーツ、石けん その他)

会場では、 東京電力・東京ガスのよろず相談を行っております。

※ 前回は必ず支所において開催しておりましたが、会場は上記場所となりました。時間前においでの方は入口前に並んでお待ち下さい。又会場には搬出し物も多いと思いますので小銭のご用意をお願いします。

リサイクルフェア(ミニボロ市)のおしらせ

( [ F ] のカードとともに使う資料 )



みんなで参加 環境美化運動

Aブロック 9月2日(日) 午前7時30分スタート  
予備日9月15日 集合場所 榎長橋末  
持参するもの 袋 カイ等

- ◎ 空カン、空ビン、吸がらの「ポイ捨て」はやめましょう。通行人や隣近所の方が迷惑します。  
(“はだし”でも歩けるまちにしたいですね)
- ◎ 山林やあき地の所有者は、防除、草刈り等の管理の徹底を。そしてひとりひとりの目でゴミの投げ捨てを防ぎましょう。(緑あふれた武蔵野の林を残したいですね)
- ◎ 川や水路は、きれいにするのも汚くするのもあなた次第です。  
(魚が住めるようにしたいですね)
- ◎ あなたが所有の植木や樹木が道路や隣家にのびていませんか？  
(枝切りをして通行人やご近所への思いやりを)

——自からのまちは、自らの手で築こう住みよい環境——

北本市自治会連合会

自治会長 石井照雄  
衛生役員 三橋正一

### 環境美化運動のお知らせ

#### 事前、事後の指導

この役割演技に入る前に、近所付き合いで気をつけなくてはいけないこと、町内会の規則やよく行われる行事等についての指導の時間を設けて指導しておくといいでしょう。また、わからないことがあったらなんでも尋ねることができような良好な近隣関係を作ることの大切さや、そのきっかけとなるあいさつ、例えば、引っ越しの挨拶、日常の会釈やちょっとした一言等についても指導しておくといいでしょう。

事後の指導としては、ゴミの出し方のパンフレットを読みとる練習をして、地域によってゴミ収集の方法が違うということを理解させる必要があるでしょう。また、回覧板等、いろいろな連絡物の要旨を読みとる練習につなげることも考えられます。

### 3 交流会

「交流会」は、学習者に娯楽や懇談等の活動を日本人と行う機会を提供することによって、日本人とのコミュニケーションに対してもっと開かれた態度を養い、日本の生活・文化に興味をもたせることをねらった活動です。

「総合活動」の中の一活動として組み込まれた交流活動は、それまでのいろいろな準備活動の仕上げ、またはクライマックスとしての位置づけをもちますが、ここでとりあげる「交流会」はそうでなく、これだけでまとまった一単位の活動としての「交流会」です。

活動のスタイルは、講習会のように“教える”“教えられる”のスタイルをとったり、討論会や懇談会のように話し合いのスタイルであったり、ゲームや演芸会、スポーツ大会などのようにレクリエーション活動を通じていっしょに楽しむスタイルであったりと、いろいろです。

交流の際のコミュニケーション手段については、中国語であっても日本語であってもかまいませんが、日本語を学習中の帰国者と日本人が交流することを考えれば、十分な交流をしようとする場合、普通、日本語だけまたは中国語だけで済むということはほとんど考えられません。したがって結果的には、日本人側は日本語で、帰国者側は中国語と自分が使える日本語のちゃんぽんで、互いに意思疎通をしようとするようになります。そこには、いろいろな非言語手段も混じることでしょうし、筆談などの方法も使われるかもしれません。討論会や懇談会などのように非言語手段ではうまくカバーしきれない場合には、通訳を介することも必要になります。

#### (1) 「交流会」の特色

交流会は日本人との接触機会をもつことに最大の意義があります。ですから、学習者のレベルがどのようであろうともそれなりに実施できる活動です。大ざっぱな段取りとちょっとした課題を用意し、あまり大がかりな準備なしに実施して十分楽しむことのほうが、日本人とのフランクな接触という趣旨からみると良い成果を生みます。これでは単なる遊びであり、学習活動にはなっていないと思われるかもしれません。しかし、少し長い目で見れば、これが学習者に意外に不足している異文化間の対人接触を実体験する大切な機会を提供するものであることがわかるはずです。コミュニケーションの力や異文化を理解する力の向上には、実際に接触する過程は不可欠なものなのです。

#### (2) 指導の主な流れ

「交流会」の進行は、定められた時間の枠内で、できるだけ学習者または相手の日本人側に任せ、指導者は脇役に徹するのが理想的です。しかし、交流会が急きょ催された場合等、学習者やゲストにリーダーシップをとる態勢がないときには、指導者が指示して進めていかなければなりません。

帰国者と交流相手の日本人がそれぞれ離れてかたまってしまうようでは十分に交流できませんから、普通は帰国者と日本人が混じった少人数のグループに分ける方がいいでしょう。

慣れ親しんだスポーツやゲーム等の場合は、簡単にルールを説明して始めさせればあとは自分たちで進めていけますし、懇談会の場合も筆談ができるように各テーブルに紙を配って回ればなんとか意思疎通をはかろうとするものです。ただし、特に懇談会の場合には、あまり時間が長過ぎると話すことがなくなって、気まずい沈黙を続けることになってしまいます。互いに早く時間が過ぎることを願うようになる前に、まだ話し足りないくらいのところで終りにしましょう。あるいは、途中から学習者とゲスト全員が一堂に会して、あるテーマについて通訳を介した懇談会を行う形に切り換えてもいいでしょう。

「交流会」の後、できるだけ早い時期に、学習者の感想を聞く機会をもちます。自分と話した日本人はどんな人だったか、どんなことについて話したか、うまく意思疎通ができたか等について学習者の感想を言わせますが、なにかテーマの決まった懇談会や討論会の場合には、日中の価値観や行動様式、社会の仕組みの違い等について学習者が考えさせられた点についても紹介させます。

#### (3) 指導者の留意点

##### ア 相手を捜して企画を練る

指導者には、交流の相手、機会を逃さず交流会を多く企画することがまず求められます。といって、いつも同じ相手と同じスタイル、同じテーマで交流を繰り返したのでは、学習者も相手も飽きてきます。

学習者にとっても相手側にとっても興味のわく面白みのある交流にしなければなりません。

企画を先に立てると相手を捜すのが大変です。なかなかその企画にぴったりの相手は見つかるものではありません。まして、こちらの都合のよい日程で、ある程度の人数を確保したいとなれば、注文通りにいくのは至難の業かもしれません。

実際上はむしろ、相手が見つかったから企画を練る、又は、ゲストが突然やって来たときに急きょ授

業の予定を変更して行う、というように、臨機応変に実施される場合がほとんどなのです。したがって、指導者は常日頃から1～2時間でできるレクリエーション活動や懇談会等の話題を用意しておくと同時に、交流相手になってくれそうな人々や団体とつながりを保っておく必要があります。

学習者の年代や生活環境、興味に合致した活動や相手が理想であることは言うまでもありません。

#### イ 日頃の指導の重要性

「交流会」は、これに焦点を当てて事前に学習を積み重ねてきて本番を迎える、というような活動ではありません。「交流会」を時折行って日本人との接触の良い機会とするためには、日頃の指導が十分にコミュニケーション重視の姿勢で行われていることが前提になります。

日本語の勉強を始めて間もないころの「交流会」は、非言語手段や筆談等の手段が思っていたより有効であること、ことばが通じなくても何とかなるものであること、日本人と接することはそれほど恐いことではないことを実感させる機会にすることができます。

日本語も交えながら何とか簡単な意思疎通ができるようになってきている学習者にとっては、むしろ偶発的に近いこの機会において、日頃の学習の成果を発揮してコミュニケーションを行うことができれば、自分のコミュニケーションの力に自信をもち、さらに学習意欲を高める機会になります。

このような良い結果を得るためには、その時点の自分の日本語の力を駆使し、他の手段も使ってコミュニケーションを試みる姿勢と技能が必要です。日頃からこのような日本人とのコミュニケーションに対して開かれた姿勢を育てる指導を行っていることが、「交流会」を良い機会として活用できる前提条件になります。そしてまた、このような前提条件を作るためにも「交流会」を有効に活用することができるのです。

#### ウ 通訳を介した懇談会・討論会の意義の理解

少人数のグループに分かれた短時間の懇談会であれば、かなり初歩の学習者でも筆談などによってある程度の意志疎通を行い、交流の目的を達することはむずかしくありません。

しかし、日中の文化の違いによるトラブルや考え方の違い等についてのテーマで話し合うには、全員がテーブルを囲んで話し合う形が適当でしょう。それは、この活動の目的が事柄の是非を決することにあるのではなく、いろいろな見方がある中で互いの立場を尊重しながら問題の本質（文化の相違）を客観的にとらえることにあるからで、そのためにはある程度の人数がいた方がいいからです。

そして、このような場合には通訳が必要になる場合が多くなりますが、普通は何人も通訳を用意できる場合は少ないでしょうから、その点でもグループに分かれる形はとりにくくなります。

通訳を介した懇談会や討論会では、日本語の学習とまったく縁がないのではないが、また、通訳を介した懇談会や討論会では、学習者の日本語を使おうとする意欲を養う点ではむしろ逆効果ではないか、という疑問もあるかもしれません。

日本人と接するときにはいつも通訳が確保されているのであれば、たしかにそういう心配もあるかもしれませんが、しかし、いつもいつも通訳を介した話し合いができるわけでもありませんから、学習者が日本語の必要性を感じなくなるなどという心配はいらないでしょう。

仮に懇談会や討論会では日本語しか使ってはならないという制約を負っていたとしたら、学習者は日本語で流暢に会話できるようになるまでは、日本人とは何も話し合うことができなくなってしまいます。ちゃんとした大人としてまじめに日本人と対することができにくくなるということです。

日本で日本語を学ぶ学習者の陥りやすい大きな問題として、「幼児化」ということがあります。自分では何もできないし、判断できない、指導者が母親で自分が子供であるかのように頼り甘える傾向です。

この幼児化の現象と対極的に、自己の尊厳を守るためにむやみに日本人、日本語、日本の文化や社会を否定したり無視したりする反応もあります。これは、学習という面では基本姿勢が成り立っていないということになり、この傾向が高じてくればいずれは日本語の学習をやめてしまうはずなのです。

これらは、いずれにしても一人の自立した人間同士が接するように日本人と接していない点では変わりありません。相互に尊重し合い、協力し合って生活することこそが目的なのですから、指導者も指導の過程において学習者をちゃんと自立した人間として扱い、立派な大人としての言動ができる場を確保すべきなのです。そのためには、学習者が自分の母国語で自由に意見を述べる機会があれば、それを活用するに越したことはありません。そしてそれが、本当の意味で日本人と意思疎通をし、心を通わせるきっかけともなります。

#### エ 懇談会のテーマの選び方

いかに急に設けられた交流会であっても、それを懇談の場にするということであれば、やはりテーマ

を決めておいた方がいいでしょう。

テーマは、学習者にとってもゲストにとっても不得意だからとか、興味がないから参加できないというようなものにならないようにしなければなりません。できるだけ学習者の関心に沿ったテーマに決めましょう。

どんなことについて話し合いたいのか、学習者一人一人に言わせることが大切です。心の中で思っていることと実際に自分の口で言うことでは大きな違いがあります。皆の前で宣言したことにより、その問題について話し合ってみようという意志が強まります。小グループに分けるときのにも、似たテーマをもった者同士を同じグループに配置することができます。

なかなか自分の関心がどこにあるか発言できない場合には、先にグループ分けをして、グループごとに話し合ってテーマを選んでもいいでしょう。学習者が自分が何に関心があるかまだ意識していない場合には、指導者が例を挙げて誘導することも必要になります。中国や日本への理解を深めるきっかけとなるテーマ、例えば「食事情」「交際事情」「近所付き合い」「買い物事情」等、身近な生活の中からテーマの例を挙げれば、学習者にとって必要度も高いので活動に参加する意欲もわきやすくなります。

学習者に、懇談では、まず自分たちから中国での事情を説明しながら日本事情と比較していくようにと指示しておく、テーマに沿った懇談が実現しやすくなります。

## オ 指導者の態度が重要

日本語が十分にできなければ日本人とは交流できない、日本語ができない外国人に話しかけられたら顔がこわばって逃げ腰になる、仮に指導者の態度がこのようであったとしたら、ここで取り上げている「交流会」は成り立ち得ません。そのような指導者に教えられた学習者が「交流会」に意義を見出して、率直に日本人と接するように試みるとは思えないからです。

帰国者に対する日本語の指導者は異文化間コミュニケーションの指導者としての意味をもつわけですから、指導者自身がコミュニケーションに対して開かれた態度をもっていることが必要になります。しかし、指導者でも初めからそういう開かれた態度を持ち合わせているケースはまれで、やはり、自分自身で努力し訓練しなければならない場合の方が多いでしょう。その訓練の方法として、取りあえず、まだ日本語がまったくと言っていいほどできない初歩の学習者と「話し合う」ことをお勧めします。筆談やジェスチャーを交えて、家族のことや仕事のこと等を聞き出してみてください。指導者自身にとって、いろいろ考えさせられる機会となるばかりでなく、学習者にとっても、コミュニケーションや学習に対する態度を形成していく上でよい機会となることでしょう。

### 4) 具体的な活動例

「交流会」といえばゲームやスポーツ、演芸会など皆で楽しみながら知り合うきっかけを作るタイプのもものもありますが、次に「交流会」を懇談会のスタイルで行って、もう少しコミュニケーションや文化・習慣の違いについて考えるきっかけの場として活用する例をあげてみます。

活動例1では、初歩の学習者に初めて日本人と交流する機会を設ける例を、活動例2では、通訳を介して日本事情について話し合う例を紹介します。

ここで「準備」として挙げていることは、交流会の実施が決まってから行うというよりも、交流会がいつ催されてもそこにつなげることができるように、日頃の指導の中で行われるものとして考えてください。

#### ア 交流会の具体例－1「中国を知ってもらおう」 ねらい

日本人に直接情報を伝えるという体験をして、後のコミュニケーション技術の学習のきっかけにします。

#### 手順

##### [導入](1時間)

- ・ 「中国」について日本人に紹介しよう、その交流を通して日本人と知り合おうと提案します。
- ・ 自分の得意なこと、好きなこと、詳しいこと等中国に関係することならば何でもいいが、時間は3、40分だからあまり複雑な内容にならないようにと指示します。必要であれば、指導者の方から、相手の日本人が興味をもちそうな話題の例を挙げたり、指導者が知っている個々の学習者の特技や得意なことを持ち出してそれを日本人に紹介するように勧めたりします。

- ・ 同じようなテーマをもった学習者を2、3人ずつのグループに分けます。

ここでは、「中国料理」「中国の歌」「中国将棋」「中国の行事」の4グループができたことにして、以下を説明していきます。

- ・ 教えるにはどんな工夫がいるか考えさせます。自分たちの今の日本語の力から考えて、準備のためにこれから新たに単語を覚えられるとしたら何語くらい覚えられるか、それが10語であれば、自分のテーマについてことば以外の方法も併用して説明するとして、どんな単語が最も必要になるか、ことば以外ではどんな手段が使えるか等についてグループで考えさせます。

##### [準備](1～2時間)

- ・ 説明するのに必要な物や単語を準備します。

必要な物としては、例えば「中国料理」の場合には中華料理の写真、又は実際に一緒に作ってみるなら料理用具や材料等。「中国の歌」の場合なら、歌詞や音符、歌のテープとテープレコーダー等。

必要な単語としては、例えば「中国将棋」の場合には「前」「後ろ」「右」「左」「まっすぐ」「斜め」等。「中国の行事」の場合には、特に説明したい行事の名称やそれにちなんだ食べ物の名称、月日の言い方の他に、「休み」「にぎやか」「故郷に帰ります」等が考えられます。

これらの単語は必ずしも言えるようにしておく必要はなく、場合によっては筆談用の単語になってもいいわけです。筆談の場合以外にも、図示したりすることが多いですから紙と筆記用具は必ず準備させるようにしましょう。

・ ゲストに説明するための模擬練習をします。この練習は、交流会の場でまったくコミュニケーションが成り立たなかったという敗北感だけを残すことがないように行うものですから、学習者に、この程度意志疎通ができれば十分という目安を与え、事前にも実現可能な目標のイメージをもたせることが大切になります。要は、自分の持てるコミュニケーション手段を使って伝えてみるという体験ですから、ここではことばの面での準備は完璧である必要はありません。

#### [ 交流 ]( 1 ~ 2 時間 )

・ 学習者 2、3 人対ゲスト 1 人のグループに分かれ、学習が自分たちのテーマについて説明する形で懇談会を進めていきます。指導者は極力介入を避け、多少の沈黙やコミュニケーションのずれ違いがあっても目をつぶります。

・ 事後の指導のために、ビデオやテープレコーダーで記録をとっておくといいいでしょう。

・ グループ毎の懇談が済んだ後、ゲストを交えて全員で、今行われた懇談についての感想や成果の発表を行います。

ここでは、どんな点に興味をもったか、驚いたか等、懇談の内容についての日本人ゲストの感想から入って、意見を交換することになりますが、どんな点がわかりにくかったか、あるいは説明しにくかったか等についても話し合うといいいでしょう。

#### [ 事後の指導 ]( 1 時間 )

・ ゲストが帰った後、交流会の全体的な感想を聞いて、学習者の印象を確かめておくことが必要でしょう。中には交流会の中で誤解から日本人に対して悪印象を持ってしまった人もいるかもしれません。そのままの状態であらう交流会を重ねても逆効果になる場合もありますから、交流会後「どうだった？」と学習者に確かめる機会をもつといいいでしょう。

・ 交流の反省、経験を生かしてもう一度誰かに同じ内容を説明してみるという場を設けてもよいでしょう。ただし、学習者がそのテーマに飽きてしまっているようであれば避けます。

#### イ 交流会の具体例 - 2 「日中交際事情についての懇談会」

##### ねらい

日本と中国の「交際」についての習慣や考え方の違いを知り、「交際」に必要な知識やコミュニケーションの方法について学ぶきっかけにします。

##### 手順

#### [ 導入 ]( 1 時間 )

・ 「交際」についてのトラブル事例や日中の習慣の違いの大きい例（例えば、お見舞いに持っていく物のタブーについてや、他家を訪問するときの礼儀等）をあげて、日本で生活する上で注意を要するテーマであることを印象付けて、このテーマについての懇談会への動機づけをします。

また別に、中国での「交際」事情についてアンケートをとっておけば学習者への動機づけにもなりますし、指導者側にとっても懇談会の内容を準備しやすくなるでしょう。アンケートは宿題の形でを行います。

#### < アンケート例 >

##### 中国事情アンケート【交際】

\* 適当なものに つけなさい。又は記述しなさい。

1. 中国でよく訪問しあう友人は何人ぐらいいましたか  
2・3人 4・5人 5・6人 10人位 その他
2. 中国でよく訪問しあう親戚はどのぐらいいましたか  
2・3人 4・5人 5・6人 10人位 その他
3. 中国で友人宅を訪問するとき訪問前に時間など約束しますか  
する しない  
するとしたら どんな時 どんな方法で
4. 中国で知り合い宅を訪問することになりました。約束は4時です。あなたなら何時頃に訪問しますか。  
3時半ころ 4時ちょうど 4時10分ぐらい その他
5. 中国で友人宅を訪問する時、何か友人のために持っていくますか  
持っていく 持っていない  
持っていくとしたらどんな物を持っていますか
6. 中国でお客を迎えた時もう帰ってほしいと思うときどうしますか
7. 中国でお客を迎えた時出したごちそうにほとんど手をつけなかったらそのお客のことをどう思い

- ますか
8. 友達になった日本人の家を訪問することになりました。その人に何を持っていきますか
  9. 人に贈答品を送るのはどんな時ですか
  10. 中国で約束もなく急に友人に訪問されて、あなたの都合の悪い時はどうしますか
  11. 中国で約束もなく急に友人を訪問して相手の都合が悪くて断られてしまったらどう思いますか
  12. 中国で結婚式の披露宴に招待されたら何を持っていきますかもしお金ならいくらぐらい持っていますか
  13. 中国でお葬式に行く場合なにを持っていきますか もしお金ならいくらぐらい持っていますか
  14. 中国で年中行事として家庭で行っていたものにどんなものがありますか。  
客を迎えるものはありましたか。どんなことをしましたか
  15. 誕生日のお祝いはしましたか  
した しなかった  
したらどんなことをしましたか
  16. 病気見舞いには何をもっていきましたか

[ 懇談会の準備 ]( 0 ~ 2、3 時間 )

- ・ 懇談会で日本の交際事情について日本人側に質問したいことをいくつか挙げさせておきます。これは日本語で準備しておくのではなく、中国語で学習者の頭の中にあればよいことです。
- ・ 話し合いのきっかけとなる話題やトラブル事例を指導者は前もって準備しておきます。

《準備する話題例》

- ・ 日本での結婚式のお祝いに何をするか  
日本での結婚式のお祝いはいくらぐらいするか  
日本での結婚式で何を着ていくか  
日本での結婚式でタブーはあるか  
日本の結婚式でどんな宴会や儀式があるか
- ・ 日本での葬式はいくらぐらいもっていけばいいか  
日本での葬式は何を着ていけばいいか  
日本での葬式はどんな儀式があるか
- ・ どんな時にお祝いをあげればいいのか  
どんな物をあげればいいのか  
どんな相手にいくらぐらいの物をあげればいいのか
- ・ 訪問のとき、必ず約束が必要か  
約束するとしたらいつ、どんな方法をとればいいのか  
訪問の時間帯は  
約束の時間のどのぐらい前後にいいのか
- ・ 仕事の後の付き合いはどんなことをするか  
だれとか  
どんなところで  
頻度は  
何か今遊びの流行があるのか  
付き合い方のこつは  
どうやって誘えばいいのか

《準備するトラブル事例の例》

この教室で以前勉強していたAさんは、親戚の結婚式に招かれて喜んで出かけて行った。  
ところが、会場の入り口で記名するときに、皆なにか紙の包みを差し出している。自分は何も知らなくて用意して来なかったし、それに、皆すごく着飾っていて自分

のように普段着で来た者はいない。

なんだか気後れしてしまって、だまってそのまま家に帰ってしまった。

Bさんはある工場に就職して、盛大に歓迎会を開いてもらった。

同僚や上司とも仲良くなり、歓迎会のお礼ということも考えて、直属の上司と仲の良い同僚2、3人を誘ってお酒を飲むことにした。

勘定を払う段になって、自分が誘ったのだからといってBさんが払おうとしても、同僚は割り勘にしようと言い、上司は自分が払うと言って、Bさんには払わせてくれない。結局は上司が一人で払ってしまい、なんとも釈然としないままになってしまった。

このままでは、今後上司を誘うことができないような気がしている。

#### [ 懇談会 ]

懇談会は日本人のゲストを複数呼びます。日本人でも人によって、また状況によって、いろいろな交際方法や交際についての考え方があるわけですから、一人だけでは現実を反映できません。

懇談はリラックスした、意見が出やすい雰囲気で行う必要がありますから、お茶を用意したり、教室内の机や椅子の配置を変えたりして工夫します。

懇談会で使うことばは、日本人ゲストは日本語で、学習者は中国語でも日本語でもよいものとします。指導者は通訳と進行を兼ねることにしますが、できることならば進行役と通訳の分担を分けたいところです。

まず指導者が、準備しておいた話題やトラブル事例を紹介して、今日の懇談会のテーマを示します。

次に日本人ゲストと学習者にこの問題についての意見を交互に聞き、それを通訳しながら、問題を掘り下げるように進行していきます。

話し合いを展開させていくときの論点として重要なのは次の点です。

- ・ 日本（中国）では、その問題について、一般にどのような方法がとられているか。そして、それはどうしてか。
- ・ そのような（トラブル事例の）状況で、普通の日本人（中国人）なら、（相手に対して）どう思うか、どんな気持ちになるか、自分はどうか。
- ・ では、学習者がそのような状況に出会ったときに、いったいどのような方法があり得るか、あるいは好ましいか。

次に、この問題と関連して聞いておきたいこと、話題にあげたいことがないか、学習者と日本人ゲストに聞き、新たな話題に入っていきます。

話し合いの結論は学習者自らが下します。指導者が体よくまとめたりしない方がよいのです。「いろいろむずかしい問題がありますね」という程度でおさめるのがむしろ効果的と言えます。

#### 「事後の指導」

懇談会で疑問に思ったこと、まだ意見を聞き足りなかったこと等感想を集めます。集めた結果を参考にして、日本事情の指導や話題を中心にした日本語の聞き取り（内容理解）の学習、他の日本人への調査やインタビュー等を通じた「総合活動」等、今後の学習活動につなげていきます。

#### 4 総合活動（プロジェクトワーク）

「総合活動」(プロジェクトワーク)とは、学習者が自分の興味や関心にしたがって、自主的に課題を選び、計画的に活動し、成果をレポートや発表会などの形にまとめるといふ、一連の学習活動のことを言います。この活動の特色を簡単にまとめれば自主性、計画性、総合性の三つに集約されます。

よく行われる「総合活動」の例としては、次のようなものがあげられます。

- ・ 「日本の住宅事情」について、周囲の日本人に実情をインタビューし、その結果を発表する
- ・ 「日本の青年の結婚観」について、図書館で資料を調べ、要点をレポートにまとめる
- ・ 「自動車の運転免許のとり方」について、免許を持っている日本人にアンケートを実施し、その結果を参考に簡単な案内書を作る
- ・ クラス新聞を発行するために編集会議を開き、テーマを決めて取材する
- ・ クラスの学習者たちが日本人の音楽同好会と共催で音楽会を企画し実施する
- ・ 日本人向けの中国料理の講習会を企画し実施する
- ・ 中国将棋と日本将棋の相互学習会を企画し実施する

##### (1)「総合活動」の特色

日本人とのコミュニケーション、異文化接触の機会の提供

「総合活動」では、日本語の学習とは別の、学習者の関心事に関する課題が前面に押し出されています。したがって、活動の過程で真のコミュニケーション日本人との間に、ことばの形ではなく内容に重点が置かれた本物のコミュニケーションの機会が確保されています。具体的にどんな場面でどんな内容についてコミュニケーションが行われるのかを見てみましょう。

「総合活動」の一つの典型は、「調べる」という活動が一連の活動の中の中心部分になっているものです。「調べる」という活動のタイプとしてよく用いられるのは、周囲の日本人へのアンケートやインタビューの方法ですが、他にも図書館での資料調べや電話での問い合わせ等の方法も使われます。

インタビューのとき(アンケートもやり方によっては同様)には、直接その相手との間に、質問内容についてのやりとりが行われることはもちろんですが、他に、調査に協力を依頼したり感謝を述べたりすることも必要になるでしょうし、場合によっては、事前に了解をとって時間を空けておいてもらわなければならないこともあるかもしれません。また、調査の目的や方法などについて聞かれ、それを説明しなければならなくなるかもしれません。

図書館で資料を探するときには、図書館の職員との間に、カードの有無等、手続き上のやりとりや、どんな資料を探しているかについてのやり取りの機会が生じます。

「調べる」という過程以外にも、「結果をまとめる」という過程や「発表する」という過程においてもコミュニケーションの機会があります。結果をまとめて提出したり発表したりするという一方通行だけでなく、指導者や聴衆からの質問に答えるということが入ります。

また、「打合せ」という過程も重要なコミュニケーションの機会です。一連の活動の合間に、作業の打合せや相談、進行状況の報告など、しょっちゅう指導者とやりとりが行われるはずで、日本人グループと共催で何か催し物を行うような場合には、この「打合せ」の過程が最も中心的なコミュニケーションの機会となります。

日本人とのコミュニケーションの機会が豊富に確保されているということは、特別に意図しなくてもそれだけで日本文化との接触機会が保証されていることを意味します。日本人とコミュニケーションをするだけで、日本人のコミュニケーションの方法や価値観、行動様式、人間関係、好まれる話題、反応パターン等、日本文化の様

様な側面に自然に接触することになります。しかも「総合活動」の場合は、最終的な課題自体が、「日本と中国との食生活の違い」「平均的日本家庭の家計」「日本の青年の結婚観」などというように、普通は社会・文化的な事柄を直接とり上げることになるため、異文化学習の面での利点がいっそう大きくなっています。

学習者の学習動機、自律的学習の重視

「総合活動」は、「ことばの学習」を越えて「自分の関心事についての学習」という色合いが濃い学習活動になることが理想です。そうであれば、活動に対する学習者の強い学習動機が期待できるはずで

す。しかし実際には、学習者が強い学習動機に基づいて積極的意欲的に自主活動を展開していくタイプから、指導者の強力なリードによってようやく活動が進行するタイプまで、色々なタイプの「総合活動」

があり得ます。これは、学習者の自主性と指導者のリードとの間の比重や、学習者の性格、日本での実生活の経験度、日本の文化や生活への関心の強さなどによって実施できる形が変わってこざるを得ないからです。

しかし、いずれにしても、この活動を通じて日本の社会や文化、生活に対する学習者の興味、関心をいっそう高め、積極的に学習する姿勢を築くことが「総合活動」の重要なねらいの一つであることには変わりはありません。

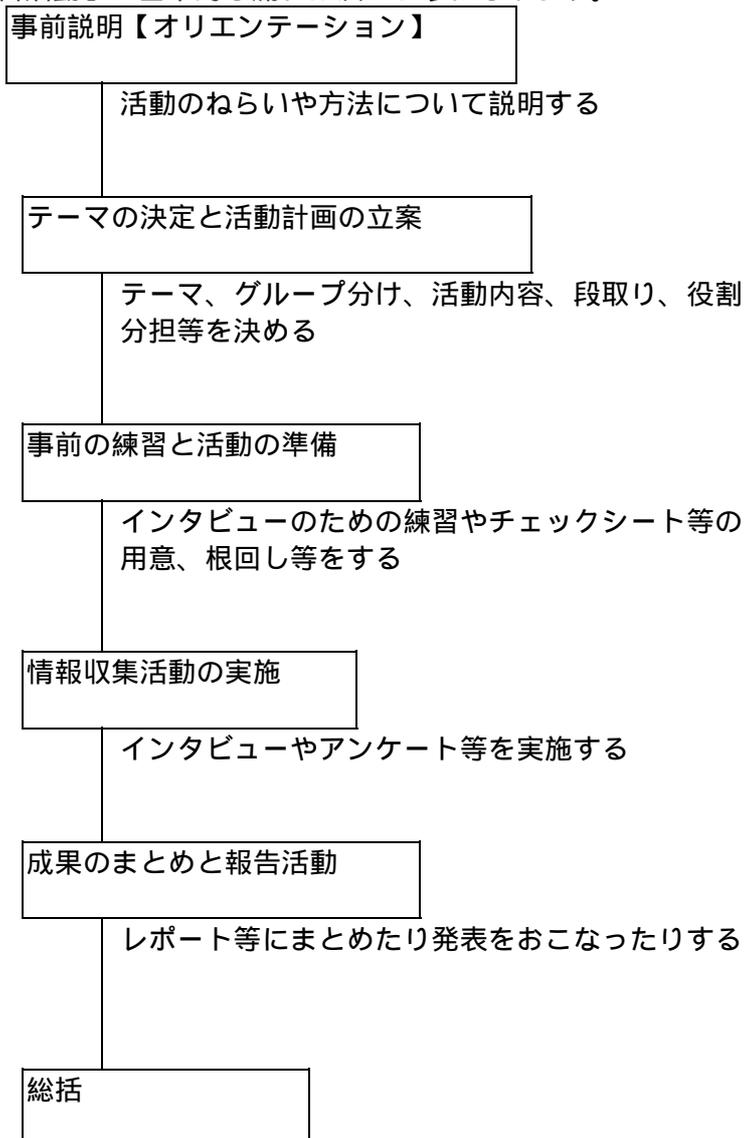
「総合活動」においては、ゴールに向けて、どのような活動を、どのような順序で、どのように進めていくか、どんな準備や事前学習が必要になるか、ということについても、できるだけ学習者自身に考えさせます。ただ漠然と日本語の勉強は大事だからということで、指導者から与えられた内容を受動的に勉強する、こういう姿勢を脱し、日本語の勉強と実際の活動とを結び付けてとらえ、自律的に学習する態度を養っていくわけです。

#### 自然な総合性をもった活動

「総合活動」には、色々なコミュニケーションの機会が確保されていますが、それらが「ことばの学習」のためにということで結びつけられるのではなく、学習者自身の要望、動機と現在の学習者のレベルに基づいて、課題を達成するまでの自然な流れとして組み立てられます。これによって、活動全体として、単なることばの要素の学習というのではなく、異文化理解や自律的な学習能力、実践的な生活行動能力の向上という面も含み込んだ、より自然な総合性を持った活動に組み立てることができます。これが「総合活動」の最大の利点と言えるでしょう。

#### (2) 指導の主な流れ

「総合活動」の基本的な流れは次のようになります。



活動全体について学習者一人一人が自己評価する

事後の手当

活動全体を通して見られた弱点に焦点を当てて補強するために指導する

### (3) 指導者の留意点

#### 環境作り

留学生のような場合には色々な国の学習者が混じっているために、日本語が学習者同士の共通語になります。小グループ単位の「総合活動」を行う場合に、国籍・文化の違う学習者が集まるようにグループ編成すれば、学習者間のやりとりを通じて日本語によるコミュニケーションと異文化接触の機会がもっと確保されることとなります。

しかし、帰国者の場合には、普通、これとは条件が違い、学習者は中国色一色ですから、学習者間のやり取りにこのような効果を望むことはできません。したがって、指導者が学習活動の中に周囲の日本人を取り込んだり学習者を日本人の中に飛び込ませたりする工夫が何よりも大切になります。また指導者は、学習者にとって教室の中でただ一人の異文化の人ですから、学習者と打合せを行ったり進行状況の報告を受けたりすることもコミュニケーションの大事な機会と考えて、活動中は普段にも増して学習者との接触を密にするように心がけなければなりません。

#### 学習者の自主性尊重と臨機応変な対応

実際に「総合活動」を始めてみると、活動の進行を学習者の自主性だけに任せておけなくて、指導者が強力にリードしなければならない場合もよくあります。帰国者の場合にはむしろこの方が多いかもしれません。しかしこのような場合であっても、テーマや活動のやり方を決める節目節目には、きちんと学習者の同意を得て進めていくようにしなければなりません。たとえ消極的であっても、自分が同意したということは指導者が勝手に決めたということとは違い、自主性、積極性が確保される重要な要因になるのです。

学習者が日本の文化、社会についてまだ具体的な関心を抱いていない場合には、何がテーマになり得るかということさえピンときません。そのような場合、学習者同士が中国語で中国文化の発想に基づいて話し合えば事足りるような活動になってしまわないように、うまく誘導する必要があります。

また、なかなかコミュニケーションがうまくできなくて、学習者が活動を進めていく意欲を失いかけたときには、学習者の今のレベルでもなんとかできる方法を示して練習させ、達成感を得ることができるところまで引っ張っていかなければなりません。

このように、学習者のレベルや意欲に合わせて計画を修正しなければならなくなったり途中で手当が必要になったりして、予定通りに進行できるとは限りません。そのためにも、時間割には余裕をもたせて臨機応変に柔軟な対応をすることが必要になります。

#### 学習者のレベルに合った計画作り

学習者の日本語のレベルが低ければ、指導する側には、こんな簡単なことも言えない、ちゃんとした発音もままならない、こんな短い回答も聞き取れない、というように阻害要因だけが目についてしまいがちです。その結果として、コミュニケーション重視の指導をあきらめてしまうか、あるいは、事前の準備として学習者の今のレベルからは無理な内容や量の練習をこなそうとしてしまうことがあります。

この活動で注意しなければならないのは、コミュニケーションをさせるための準備として未習事項をたくさん詰め込もうとすべきでないことです。そんなことをしたら学習者は消化不良に陥って、活動への意欲も失ってしまいますし、結果的にコミュニケーションに対する自信を得ることもできずに終わってしまいます。

例えば、インタビューをする際に、必ずしも何も見ずに流暢にインタビューする必要はないのです。用意した質問を読みながらインタビューするようにしてもいいし、アンケート用紙を指さしながらインタビューしてもいいわけです。その場合、要は、学習者がそこでやり取りが交わされる内容に強い興味を抱いていて、相手がどういう内容の回答をするかに意識を集中できるかどうかの問題なのです。

### 問題点の把握と的確な手当

指導者は、学習者が日本人とコミュニケーションを行うのを阻む要因をつかみ、その学習者のレベルに合わせた解決方法を身につけさせるように手当をしなければなりません。

事前の練習においては、発音や構文等の不正確さがつい気になってしまいますが、正確さを追求するのがこの練習の目的ではありません。それが原因で意味が通じないというのではしかたがありませんが、十分意味が通じる程度であれば、むやみに矯正を繰り返したりしないほうがいいでしょう。学習者のコミュニケーション意欲をそぎ、意識を内容から形へとそらせてしまうことになりやすいからです。手当を行うとすれば一連の活動が終了した後にそのための指導を設けます。

また、文化的要素がコミュニケーションをスムーズに進めるための重要な要因となっていることもありますから、指導者はこれについても適宜とり上げて指導する必要があります。文化的要素についての指導では、学習者に日中を対比させて、中国とどう違うのかと考えさせたり発見させたりすることが重要です。「総合活動」には異文化接触の機会も多く含まれていますが、そのままでは無意識の接触でしかありません。普通、学習者には何が問題か見えないのです。

日本人に違和感や不快感、誤解を生じさせる学習者の言動、しぐさ話題等と、逆に学習者が日本人に対して感じるそれらを見逃さずに、学習者に異文化という問題を意識化させるきっかけとしなければなりません。

#### ア 総合活動の具体例 - 1 「住宅事情についてのミニ調査」

具体的な活動例としてまず、比較的短時間で簡単にできる「ミニ総合活動」の一例を紹介します。

授業時間の脱線や休憩時間の雑談の中で、家計費や子供の進学問題、余暇の過ごし方、通勤の交通事情、値段の安い店等の話題が出ることがあります。このような形で話題になった問題や、実生活に関連して学習者が強い関心をよせているその他の問題をとり上げ、普段の授業の中の短い時間を使って、指導者や学校の事務員等、身近な日本人にインタビューやアンケートをする活動の例です。

ここでは、「日本人の住宅事情」がテーマに選ばれた場合について見てみることにします。主な条件は次のようであると仮定します。

学習者..... 初歩レベル（レベルは問わない）の学習者が5人いるクラス

○所要時間..... ・事前の話し合いに1～2時間

・練習に2～3時間

・インタビューに約1週間（各5分程度）

・まとめと事後の話し合いに2時間

○指導者..... 中国語ができる

○その他..... 複数（7～8人）の指導者がクラスの授業を担当していて、協力が得られる

以下の解説の中の指導者と学習者との「話し合い」のやり方は、学習者の日本語レベルに合わせて工夫します。学習者の日本語のレベルが低くて日本語でできそうもない場合には中国語で行ってかまいませんし、指導者が中国語ができない場合や学習者のレベルが筆談等も交えれば何とかなる場合には、日本語を使って行うのもいいでしょう。

#### 動機付け、ミニ調査の提案

住居費は家計の何割くらいを占めるか、住宅は個人の所有か国家の所有か、住宅の売買や交換はどうするか、引っ越しは自由か、親子の同居の状況はどうなっているか、等、指導者は中国の住宅事情について学習者に聞きます。

色々と意見が出たところで、日本の住宅事情に話題を移し、学習者の現在の状況や一般日本人の状況について話し合います。議論が一段落したところで、クラスの授業を担当している先生方に実際に聞いてみようともちかけます。

#### 聞きたいことを整理し、調査の進め方を決める

住宅事情に関して実際にインタビューする項目を決めます。

##### 《質問項目例》

1. 家族数
2. 部屋数、広さ
3. 持ち家か借家か（借家の場合どのようにして探したか）
4. 住居費の家計全体に占める割合

## 5. 現在の住居に対する満足度

まず、学習者一人一人に自分が聞いてみたいことを言わせてみます。列挙された問題を整理し、5～6問（学習の人数分）に数を絞ります。インタビュー項目が決まったら、これに対する回答の集計結果がどうなるかを一人一人に予想させ、それを何かにメモしておきます。

次に、クラスの時間割を見ながら、誰にいつインタビューするか計画を立てます。

インタビューの相手は、クラスの授業を担当する先生を中心にして合計約10人とし、その先生の授業開始時の5分間くらいずつ使わせてもらって、学習者が一人一問ずつインタビューすることにします。先生だけでは相手の人数が足りない場合には学校の事務の方にも協力してもらって、休憩時間に出かけて行ってインタビューすることにします。

《インタビュー計画例》

質問相手	時 間	質 問 者				
		問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
伊藤先生	月曜日 1 時間目	李	王	張	李	任
本田先生	月曜日 3 時間目	任	李	王	張	李
清水先生	火曜日 1 時間目	李	任	李	王	張
佐藤先生	火曜日 2 時間目	張	李	任	李	王
青木先生	木曜日 1 時間目	王	張	李	任	李
山口先生	木曜日 3 時間目	李	王	張	李	任
中川先生	金曜日 2 時間目	任	李	王	張	李
三浦さん	金曜日 1～2 休憩	李	任	李	王	張
神山さん	金曜日 2～3 休憩	張	李	任	李	王

### インタビューの練習をする

学習者のレベルが高い場合には、インタビュー項目さえ決まっていれば、あえてインタビュー文を用意して練習するということなしに、いきなりその内容についてインタビューを試みることも可能です。この場合には、練習の重点はむしろ実際やってみた後に学習者自身が感じた問題点を補うことに置かれるわけです。しかし、ここでは、一応インタビューのためのセリフを用意し、一通り練習してから実際のインタビューに臨むという場合を見てみることにします。インタビューの練習をする前にまず、前もって決めてあったインタビュー項目からインタビュー文を作ります。これには大きく分けて、指導者が作って学習者に与える方法と学習が自分で作ってみる方法と二通りありますが、学習者のレベルに合わせて適当に折衷しながら工夫します。ここでは、使用する文型の用例と必要な新出単語を指導者が示し、それらを学習者に組み合わせさせる方法をとることにします。

1. \_\_\_\_\_は何人ですか。  
(ご兄弟 お子さん お孫さん ご家族)
2. お宅には\_\_\_\_\_はいくつありますか。  
(楽器 テレビ 押入 部屋)  
\_\_\_\_\_と\_\_\_\_\_ですか。  
(何 何インチ 何間 何畳)
3. お宅は\_\_\_\_\_ですか、それとも\_\_\_\_\_ですか。  
(アパート マンション 市営住宅 社宅 自分の家 借家)  
それはどうやって探したんですか。
4. 失礼ですが、お宅では\_\_\_\_\_は家計の何割くらいですか。  
(食費 教育費 医療費 住居費)
5. 今の\_\_\_\_\_に満足ですか。  
(生活 給料 仕事 家)

インタビュー文が用意できたら口慣らしをし、指導者が受け手になってやり取りの練習をします。意

味のやり取りが本来の目的ですから、インタビュー練習においても、あまり発音や構文の正確さを強調し過ぎて学習者の意識を「形の正確さ」に集中させることのないように気をつけます。

なお、インタビューするときには、いきなり聞くのではなく、出だしの「先生、ちょっと質問してもいいですか」等の一言と、終わりの「どうもありがとうございました」の一言を添えさせることは言うまでもありません。

また、インタビュー練習においては、学習者は相手に尋ねるだけでなく、相手の回答を聞き取らなければならないわけですが、前もって予想される回答を考えさせ、その単語表を作っておきます。

《単語表例》

1	一人 二人 三人 四人 五人 六人 七人
2	ひとつ ふたつ みっつ よっつ いつつ むっつ 一部屋 二部屋 三部屋 四部屋 五部屋 六部屋 2K 3DK 4LDK
3	持ち家 自宅 自分の家 アパート 賃貸 借家 市営(県営、公営)住宅 社宅 下宿 間借り 不動産屋 雑誌 紹介
4	1割 2割 3割 4割
5	満足 まあまあ 不満 せまい 高い 遠い 暗い うるさい

チェック用紙を準備する

インタビューをして相手の回答を聞き取って記入する用紙を準備しておきます。記入の負担をできるだけ軽減して、聞き取ることに集中できるようにするために、チェック用紙の様式も工夫する必要があります。

《チェック用紙例》

_____先生		記入者
1	家族数	人
2	部屋数、広さ	畳 畳 畳 畳 畳
3	持ち家か借家か	自宅・借家(アパート、公営、社宅)
		不動産屋・知人紹介・雑誌・直接
4	住居費の割合	割( % )
5	今の家に対する満足度	満足・まあまあ・不満
		狭い・高い・遠い・暗い・うるさい

インタビューを行う

授業の開始時の挨拶が済んでこれから授業が始まるというときに、前もって決めておいた順番に従って学習者が、一人一問ずつ先生にインタビューします。クラス全員が持っているチェック用紙にそれぞれ回答を聞き取ってチェックします。クラス全員がインタビューを終わるまでに5分ぐらいあれば足りるでしょう。

指導者は、必要であれば、前もって授業担当者に根回しをし、授業開始時に学習者が何か質問するかもしれないのでよろしく、と断っておきます。住宅に関することだとは言っておいてもいいでしょうが、

細かい内容まで事前に授業担当者に漏らすことはしてはなりません。

初めに図表の枠を作って教室の壁に貼り、授業担当の先生にインタビューした後に直ちに結果を書き足していく方法もあります。この場合は、途中結果を表す図表をはさんで先生と学習者達の間でその集計結果について脱線のコミュニケーションが行われることも期待できます。

#### 結果をまとめて表を完成する

目標とする人数のインタビューが終わった段階で、結果を図表にまとめます。図表を見たり作ったりしたことのない学習者もたくさんいますから、指導者が手伝わなければならなくなるかもしれません。指導者が手伝った場合には、必ずできあがった図表の見方を理解させ納得させるようにしなければなりません。

図表を作る際に必要となる模造紙やマジック、定規等を事務室に行って借りてくること（あるいは文具屋へ行って買う）も、学習者自身にやらせますが、どう言えばいいかはあえてきちんと練習する必要はありません。学習者が躊躇するようでしたら、こう言えばいいというふうに口移しに教えます。文の構造を解説したり単語の入れ替え練習をしたりはしない方がいいでしょう。

#### 事後の指導

学習者の予想と実際にインタビューした結果とを比較しながら、結果からどんなことがわかるか話し合います。中国の状況と比較させながら考えると、色々なことが見えてきます。また、インタビューしたときに困った問題があったならばそれについて解決策を話し合います。

指導者はインタビューを受けた授業担当者から、どの学習者のどの質問が聞き取りにくかった等、問題点を聞いておきます。クラス全体、または個別に指導が必要なことがある場合には、別に補充のための授業を計画します。

#### イ 総合活動の具体例－2「クラス新聞作り」

次に、「総合活動」の最も基本的なパターンとも言えるクラス新聞作りの場合を見てみます。主な条件は以下の通りと仮定します。

- 学習者.....初級の上レベルの学習者が8人いるクラス
- 所要時間.....
  - ・事前の話し合いに1～2時間
  - ・アンケート作成に2～3時間  
(他に宿題等自宅作業)
  - ・練習に1～2時間
  - ・取材活動に約1時間
  - ・まとめと事後の話し合いに1時間
- 指導者.....中国語が多少できる
- その他.....取材相手(協力者)が確保できる

クラス新聞作りの提案

指導者の側からクラス新聞を作ることを提案します。学習者にイメージを湧かせるために、修了した学習者の作品等、具体的な例があればそれを見せます。(学習者の能力を越えたあまりに立派すぎるものをモデルにしないように注意が必要)

(モデル例)



新聞の事例紹介

### 内容、体裁等について大枠を決める

記事のテーマと体裁（壁新聞にするか印刷物にするか等）について、学習者に自分たちで話し合って決めさせます。指導者は必要に応じてヒントを出したり例を示したりしますが、記事のテーマについては、できるだけ他の指導者や周囲の日本人にインタビューする必要があるようなものになるように誘導します。

#### 《特集記事テーマ例》

- ・日本の青年の結婚観について
- ・〇〇先生の一週間
- ・日本人は中国をどれくらい知っているか
- ・どのメーカーの洗剤がよいか
- ・日本語教室周辺のうまい店ガイド
- ・先生方の趣味調査
- ・〇〇近郊の日帰り旅行ガイド
- ・自衛隊についてどう考えるか
- ・「お盆」と日本人

ここでは、「日本人は中国をどれくらい知っているか」をテーマにしてB4版のクラス新聞を作る例をとりあげてみます。

### 取材項目と取材方法を決める

「具体的活動例－1」と同様に、ここでもテーマを掘り下げて、日本人に聞いてみたい事柄を列挙させ、それを絞り込んで取材項目を選んでいきます。

ここでは、8人の学習者が、「日常生活」「風俗習慣」「政治、経済、歴史、地理」「職業関係」の4グループに分かれ項目の案を作ってくることになりました。それぞれが、日本人が知っているかどうか確かめてみたい中国事情に関する事柄を、クイズの形にして思いつくままに書き出してくることにしました。それを持ち寄って、クラス全員で話し合い、最終的な取材項目を決めます。

取材項目を決めることと並行して、誰に取材するか、どんな方法で行うかについても決めていきます。ここでは、来週にちょうど日本人青年グループとの交流が予定されているので、その機会を利用してグループの青年約20人を対象に、アンケートとインタビューを組み合わせることにします。

#### 《インタビュー項目例》

1. 何歳か？
2. 中国語を勉強したことがあるか？
3. 中国に行ったことがあるか？  
(どこへどのくらいの期間？)
4. 中国人の友達がいるか？  
(話したことはあるか？)
5. 中国というと何を連想するか？

#### 《アンケート項目例》

1. 中国の伝統的なスポーツは何か？
2. 四川料理の味の特徴は何か？
3. ハルビンの冬の伝統的な民間芸能活動は何か？
4. 『三国志』の作者は誰か？
5. 中国の郵便局の業務にはどのようなことがあるか？
6. 中国の一般生活で最もよく使われる交通手段は何か？
7. 中国では、一般の電圧は何ボルトか？
8. 中国の今の中央書記長はだれか？
9. 中国には、いくつの民族があるか？
10. チョモランマの高さは何メートルか？
11. ハルビン市は、何省の省都か？
12. 中国で陰暦の8月15日に食べる物は何か？
13. 中国人が葬式に出るときは、何色の服を着るか？

14. 中国では、国営企業は何%くらいか？  
 15. 中国の男性労働者の定年は何歳か？  
 16. 中国では労働者の一日の労働時間はどのくらいか？  
 17. 中国で「魂の技術者」と言われるのは、何の職業のことか？

#### アンケート用紙を作る

すでに決めてあったアンケート項目を日本語で書き直し、答えやすいように選択肢をつけたアンケートの形に完成します。(P185 アンケート用紙例参照)

日本語に直す作業は、まず学習者に試みさせます。指導者は、学習者の作った日本語をできるだけ高く評価しながら、おかしいところを直します。

#### インタビューの練習をする

学習のレベルから見ると、インタビュー項目に挙げられた内容は、ぶっつけ本番でやっても何とか意志疎通ができそうに思えます。したがって、教室での事前練習では、指導者が受け手となっていくなり学習者にインタビューさせることから始めてみます。

やってみて何とか意味が通じている場合には、それなりに評価します。その後で指導者がインタビューをする役を演じてみたり他の人が演じている場面の録画を見せたりして、モデルを示します。

#### 《モデルの表現例》

0. すみません、ちょっと聞いてもいいですか。  
 1. [失礼ですが、] 何歳ですか。  
 2. 中国語を勉強したことがありますか。  
    YES (何年ぐらい勉強したんですか。)  
 3. 中国へ行ったことがありますか。  
    YES (どこへ行きましたか。  
       何日間ぐらいですか。)  
 4. 中国人の友達はいますか？  
    NO (中国人と話したことはありますか？)  
 5. 中国というと何を連想しますか？

最初にいきなり学習者が演じてみたときの表現と、モデルの表現とを比べさせます。ここではおそらく、体験を表す「～たことがある」の表現や「～という～を連想する」(あるいは「～から～を連想する」)の表現が問題の箇所となることでしょう。

このようにモデルの中で学習者が理解できない点や未習の表現等がある場合には、余り詳しくない程度に解説して理解させます。学習者が一応理解し納得すれば、完ぺきに使えるまで求める必要はありません。

このインタビューで、相手からの回答を聞き取るのがむずかしそうなのは「5」の項目です。どんな内容の答えが返ってくるか、学習者に予想させ、その予想された内容に関する日本語の単語を与えます。それでも予想外の回答が出た場合に備え、相手に書いてもらう方法等も念のため復習しておきます。

インタビューの練習とあわせて、回答を記入するためのチェック用紙も用意しておきましょう。この程度の簡単なインタビューの場合には、セリフを読みながらインタビューすることは避け、本番では箇条書きのチェック項目を見ながら自分でセリフを考えてインタビューするようにします。

#### 《アンケートのチェック用紙例》

性別	男 ・ 女	年齢	_____歳
中国語学習経験	有・無 (____年____月)		
訪中経験	有・無 (どこ_____ (____年____月____週____日))		

交際経験	友達：有・無	話：有・無
連想		

### 取材を行う

今回の取材は日本人青年グループとの交流会の機会を利用して行うことになっていました。

交流会の合間の時間に、クラスの代表がゲストの青年全員の前で取材への協力を依頼します。了承を得たところで、全員にアンケートを配布して記入してもらいます。青年たちが記入している間に学習者は手分けしてインタビューして回ります。アンケート用紙には前もって番号を記入しておいて、インタビューの結果をチェック用紙に記入するときに、その青年が手にしているアンケート用紙の番号も控えます。

指導者は、なるべく前面に出ないで、わきから取材活動をよく観察しておきます。できれば、ビデオ録画しておくともよいでしょう。

### 取材結果をまとめて新聞を完成する

取材の結果に学習者の感想等を盛り込んで記事の形にまとめます。これはぜひ学習者たちが話し合っ

てまとめるようにもっていきます。取材活動の結論は学習者自身にくださせる必要があるのです。新聞を日本語版にするか中国語版にするかは、学習者の意見を聞いて決めますが、日本語版にする場合には当然指導者の助力が必要になってきます。学習者の書いた日本語をどの程度直すかはそのときの状況によって判断しなければなりません。指導者があまりに細かく手を入れすぎて、学習者の達成感を台無しにしてしまうことは避けなければなりません。

新聞ができたなら、他のクラスの学習者や取材の相手をしてくれた協力者に配布します。取材の協力者に学習者の手紙を添えて郵送するのもいいでしょう。

### 活動全体を振り返って話し合う

活動のビデオ録画がある場合には、皆でそれを見ながら話し合います。相手には通じたのか、通じなかった場合にはそれはどうしてか、やり取りはスムーズに進行したか、スムーズでなかった場合にはその原因はどこにあるか、相手に対して失礼な態度はなかったか、相手の回答がわかったか、質問の内容や質問形式に問題はなかったか等について話し合います。また、取材結果についても自分の予想と比べてみてどうだったか、学習者一人一人に意見を言わせませす。事後の話合いの機会をもてなかった場合や、一人一人が十分に自分の考えを述べることができなかつた場合には、宿題として今回の一連の活動についての感想文を書かせます。

このように、自分の考えを一人一人に自分の口から言わせること（あるいは、文章に書かせること）は、日本語の学習方法や日本の社会事情、日本人と中国人の考え方の違い等について、この活動を通じて得られた潜在的な理解をより明確に意識化させる点で有効です。

《アンケート用紙例》

中国事情アンケート

1. 中国の伝統的なスポーツは何ですか。  
竜船競争 野球 相撲 ピンポン バレーボール
2. 中国の四川料理の味の特徴は、何ですか。  
甘酸っぱい 辛い 塩辛い 以上の味が全部入っている
3. 中国のハルビン市の冬の伝統的な民間芸能活動は何ですか。  
切り紙の造化 氷灯籠 飾りちょうちん 刺繍 凧
4. 中国の小説「三国志」の作者は、誰ですか。  
羅貫中 施耐庵 曹雪芹 吳承恩 魯迅
5. 中国の郵便局の業務には、どのようなものがありますか。  
郵便物の取り扱い  
郵便物の取り扱いと銀行の業務  
郵便物の取り扱いと保険の業務
6. 中国の一般の商店の支払い方法は、どうなっていますか。  
知っている 知らない
7. 中国の生活の中で、最も使われる交通手段は、何ですか。  
汽車 バス 電車 自転車
8. 中国で一般の電圧は、どのくらいですか。  
110V 220V 250V 360V
9. 中国の今の中央書記は、誰ですか。  
鄧小平 李先念 李鵬 江沢民
10. 中国は多民族国家ですが、どのくらいの民族があるか知っていますか。  
48 56 58 62
11. チョモランマは、中国の最高峰で、世界の最高峰でもあります。高さはどのくらいか知っていますか。  
4628m 6540m 8840m 9248m
12. 中国のハルビン市は、どの省の省都ですか。  
黒竜江省 遼寧省 吉林省 河北省
13. 中国の陰暦の8月15日に食べる物は、何ですか。  
餃子 月餅 おだんご ケーキ
14. 中国人が葬式に出るときは、何色の服を着ますか。  
〔少数民族は除きます〕  
白 黒 黄色 赤以外だったら何でもいい
15. 中国で国営企業は、何%くらいありますか。  
30% 50% 70% 90%
16. 中国の男性の労働者の定年は、何歳ですか。  
45歳 50歳 60歳 65歳
17. 労働者の一日の労働時間は、どのくらいですか。  
7時間 8時間 8時間半 9時間
18. 中国で「魂の技術者」といえば、どんな職業のことですか。  
医者 教師 労働者 農民

## 5 Q & A

### 【質問21】日本事情・日本文化に関するテーマの扱い

日本の冠婚葬祭や習慣等、日本事情・日本文化について学習者からよく質問が出ます。このような問題を日本語の授業として取り上げたいと思いますが、なにか良い例はないのでしょうか。

【解説】この質問者の場合のように、日本事情・日本文化に対して学習者の関心が強ければ、指導者は学習者の関心を受けとめてそれに応えることにより、その傾向をより一層高めることができます。日本事情・日本文化に関連する事柄を日本語の指導に取り入れるには、

(1) どのような事柄を使うか (2) どのように指導するか の2点がまず問題になります。

(1) の問題については、それこそありとあらゆる事が題材になり得ると言えますが、大きく分けて、(ア) 教育の目的から (イ) 学習者自身の関心から

の二つの方向からの選択方法が考えられます。もちろん実際にはそれらの折衷となる場合が多くなるわけですが。

学習者自身が関心や疑問を持つ事柄があり、それがまた指導者側の目的にも合致しているならばそれを取り上げるのが一番でしょう。

一般に、学習者の興味や動機の強さは、その問題が個人的なものであればあるほど、また、実際的な問題であればあるほど強くなります。したがって、指導者が指導しておきたいと考える事柄と学習者が知りたいと思っている事柄とは、内容において関連性があっても同じレベルであるとは限りません。

例えば、指導者は日本の食生活について一般的、概略的な内容を指導しておきたいと思っても、学習者のほうは中国で使っていた調味料が日本ではどこに行ったら買えるかということに専ら関心がある、というような場合です。

このような場合、学習者の関心を大切に、徐々に日本と中国との食習慣の違いという問題に導いていくことを目指したほうが得策と言えるでしょう。概論のような内容について指導者側から一方的に与えられる場合と、自分の日常生活に深い関わりのある具体的事柄について自分が能動的に働きかけて授業の題材に取りあげてもらった場合とを比べれば、後者のほうが当然興味深く、記憶にも残りやすいはずで

す。学習者が質問に出してきた事柄が、表面的には指導者側の取りあげたい題材そのものであったとしても、そのまま受け取ってしまうよりも、もっと真意を探ってみる必要があります。

例えば、学習者が日本の交通事情について教えてくれと言ってきたとして、指導者が日本の鉄道、航空、海運、道路交通等の概要を説明し出したら、全然つまらなそうな顔をしてくるに聞きもしない、というようなことになりかねません。学習者によく聞いてみたら、バイクの免許がとりたくて、試験の方法や必要な勉強について知りたかったのだということがわかった等ということがよくあります。このように、学習者の抱えている身近な問題をとりあげるとして、次に(2)の点が問題になります。つまり、どのように指導するかの問題です。ある話題を中心にして指導する場合最もてっとり早いのが読解です。学習者の興味に応えるような内容の文章をわかりやすく書き換えて教材とし、問題をつけます。問題に答えればその文章の要点が理解できるように設問します。

読解以外にも、指導者と学習者との間で問答を行ったり(学習者が聞くだけでなく、指導者も中国の事情等を聞き返す)、インタビューやアンケートを伴った総合活動のような活動に組み立てたりすることも可能ですし、その話題に関係するビデオ教材の聴解学習を行うことも考えられます。

指導者は学習者の疑問に自分ですべて答えてしまうのではなく、自分もよく知らないから資料と一緒に調べよう、他の人にも聞いてみよう、という態度で、学習者をコミュニケーション活動の中に入れていくようにしたほうが良いでしょう。

### 【質問22】日本事情・日本文化に対する関心

日本事情・日本文化に関する題材を取りあげて日本語の指導をしようと何回か試みたのですが、結局いつも一方的に解説するだけか、単なる雑談に終わってしまいます。学習者もこういう問題にあまり興味がないように見えます。

学習者が日本事情・日本文化に興味をもっていない場合には、このような問題を扱っても効果がないような気がするのですが。

【解説】中国帰国者が主に日本語を通じて日本人とコミュニケーションしようとする場合、そのねらいや内容、話の進め方、態度等には日本文化の要素が多分に含まれてきます。また、そこには程度の差こそあれ、帰国者のもつ中国文化的な要素も入ってきます。

したがって、コミュニケーションの学習をしようとするれば、それは同時に異文化学習的な面を含み込

んだ学習にならざるを得ないこととなります。しかも、本当に意味のあるコミュニケーション、中国帰国者の生活の営みに近い活動、というものに接近していけばいくほど総合的な活動になり、「ことば」の枠を越えて、人間、社会、文化という、より大きな枠組みの中で捉え直さなければならなくなってきました。

異文化学習ということは、コミュニケーションの方法や人々の価値観、行動様式、人間関係、社会の仕組み等が日本と中国とでは異なっているところがあること、自分自身の考え方や感じ方、行動のパターンには中国文化に規定されているところがあること、人間は皆それぞれの社会の文化に則って考えたり感じたり行動したりしており、日本人も日本の文化に則って生活していること、そして、自分の日本人に対する反感や反発には文化の違いから来るもののがかなりあるということ、自分の行為や発言、態度にも、日本人の反感や誤解を招きやすい面があったことに、まずは気づくことです。この自分と相手の文化的側面への気づきの上に、日本の文化や社会に対する関心を喚起することが可能になってくるのです。

日本語指導の場合にも、できるだけ文化的側面をも考慮に入れて総合的な学習にすることが望まれます。しかし実際には学習者側から具体的な問題が提起されることはまれで、学習者側の動機を前提にして日本事情・日本文化の内容を日本語指導の形で実施することは難しいと言わなければなりません。それは、ある学習者が強い動機を持つ話題でも他の学習者には関心のないことである場合が多く、一人二人の動機を前提にして教室授業を行うことになりやすいということ、また、仮にクラス員全員が何かについて知りたいと言い出したとしても、その問題についての把握の程度が浅く、少し細かく検討し始めるともう関心がなくなり飽きてしまうということがよくあるからです。

学習者自身の問題意識、関心を前提にしてテーマを選び活動を計画するということは実際上難しい場合が多いのですが、だからといって指導をあきらめたり、学習者自身の意向を無視して指導者側から一方的に押しついたりすればいいというわけでもありません。日頃から学習者の具体的な関心、問題意識を探り大切にしながら、それに依存し過ぎることなく、指導の工夫によって異文化に気づく目を養うように指導する姿勢が重要です。むしろ、初期の段階でのとりあえずの目標は、日本文化についての学習者の理解を深めることよりも、文化的な側面への気づきを促し、日本の社会や文化に対する関心を高めることにあると考えた方がいいでしょう。

指導者がこれは重要だ、ぜひ理解してほしいと考える問題があるならば、その問題についての関心を呼び起こす方法を学習者の立場に立って考え工夫する必要があります。次にその方法の具体例をいくつか紹介してみましょう。

気づきや関心を育てる方法としては、いきなり日本はこうなっていると示すよりも、中国ではどうなっているかをまず学習者に分析させることから始める方法が適しています。

例えば日本の住宅事情を取り上げて学習しようという場合、まず中国の住宅事情について、例えば次のようなことについて学習者に問いかけます。

- ・住宅は私有か国有か
- ・住宅を手に入れるにはどうすればいいか、不動産屋はあるか
- ・値段はどれくらいか、年収の何倍くらいか
- ・都市と農村の違いはどうか
- ・住宅の広さはどれくらいか
- ・風呂やトイレはついているか
- ・親子は同居するか
- ・職場との距離は何分くらいか
- ・どんな造りの家が好まれるか

住宅に関する語彙の練習と組み合わせれば問答の形でコミュニケーションができるでしょう。

このように中国の事情に関する問答から入って、徐々に日本の事情に話題を移していきます。指導者が自分の家の状況を紹介したり日本の一般的な状況について解説してもいいですし、クイズのような形式で問いかけてもいいです。また、学習者の反応を見てアンケートやインタビューの活動に発展させてもいいでしょう。

役割演技をやってみて、日本の事情と中国の事情との相連を意識化する方法も考えられます。

例えば、他家を訪問する場面や客を迎え入れる場面を、学習者同士に中国語で中国風に演技させ、次に指導者二人が日本語で日本風に演技してみせます。そして、次のような点について日中の違いを話し合います。

- ・どんなあいさつをし、どんな仕草をするか
- ・手土産等はどう手渡すか

- ・畳の上ではどう行動するか
- ・客をどこに座らせて自分はどこに座るか
- ・どんな話から始めるか

そして今度は指導者と学習者がペアになって中国風をやってみたり日本風をやってみたりして、不自然なところを指摘し合ってもいいです。

視覚的な教材を使って指導することも可能です。例えば、日本人の食事風景を撮影したビデオを見て、中国人にとって奇異に感じることを指摘する、というような方法です。

なんとなくおかしいと感じることと、はっきりここが違うと意識することとは大きな違いがあります。この例では例えば、

- ・日本人は左手に茶碗を持ってご飯を食べる
  - ・味噌汁はスプーンを使わずに箸を使って飲む
  - ・初めから料理が一人ずつ取り分けられている
- 等ということが指摘されるかもしれません。

このような内容を、「中国では～～ですが、日本では～～です。」というような表現の練習材料に使うならば、日本語の学習と異文化学習とを両立させることも可能になります。

このようにして、学習者は自分の文化である中国文化ではどうなっていたかを自分の頭で再認識し、日本文化との相違を見る目を養うのです。指導者は学習者に、訪問・接客場面の日本語学習を通じてこの異文化理解の過程を辿らせるわけです。

### 【質問23】1クラスを複数の指導者が担当する場合の分担・連絡

私たちの学校では、月・水・金と火・木で二人の指導者が一つのクラスを担当しています。それぞれ会話と文法を教えているのですが、同じことを教えていたり抜けがあったりで一貫した授業がなかなか成り立ちにくい状態です。指導者同士がなかなか顔を合わせる機会がないのですが、どうすればスムーズに一貫した教育ができるでしょうか。

【解説】一つのクラスを複数の指導者が担当する場合、まずそのクラス全体の運営の中心になる責任者を決めておく必要があります。その責任者がそのクラスの運営に関してどの程度まで細かく関わるかは、その学校、そのクラスの状況によって違ってくるでしょうが、クラスに関する、情報はその責任者のところに集まるようにしておく必要があります。情報がなければ適切な判断、対応ができないからです。

指導者間の連絡は、直接顔を合わせて行えれば一番いいのですが、それができない場合には、連絡メモや電話を通じて行うこともできます。

役割の分担のしかたによって、どうしても連絡しておかなければならない内容も違ってきます。一連の会話練習や積み上げ式の文型指導を複数の指導者が交代で引き継ぐ場合には、進度や習得度、やり残した課題等についてかなり細かく連絡しなければならないでしょう。文字指導と文法というように、相互にあまり関係なく授業を進めていけるように役割分担をしている場合には、連絡は簡略化して済ませることもできるはずですが、しかし、いずれにしても、授業担当者は必ず「授業記録」を書き、それを他の担当者全員がいつでも見ることができるようしておくべきです。

「授業記録」の様式はそれぞれの学校の状況に適した形にすればよいのですが、統一の様式を定めておいた方がなにかと便利です。記入の簡便性を考えると、「授業計画」と「授業記録」とを兼用にするといいでしょう。授業の前にどのように授業を進めるかについての計画を練ることは当然のことですが、その計画を「授業記録」の用紙に記入し、事後に実際はどうだったかを赤色で加筆するようになれば、その授業がどんな計画に基づいて実際どのように行われたかがわかります。

クラスの責任者は、直接口頭での連絡や連絡メモ、電話、授業記録等により担当クラスの状況や学習者個々人の学習状況を把握し、クラスの指導内容や方法、進度を調整したり、問題のある学習者に対して必要な対応を行ったりしなければなりません。クラスの運営をスムーズに行っていくためには、他の担当者との間の意思の疎通がぜひとも必要になってきます。どのような目標のもとにどのような指導活動を行っていくかについて最低限の理解がなされていないと、仮に同じ教材を使っても使い方も違えば到達目標も違うということになってしまいます。そして、教育の成果に対する評価も問題点の認識も違って来るわけで、時間が経つにつれてますますバラバラになっていくことになっていきます。クラスの授業担当者が定期的に一堂に会して、基本的な問題について話し合うことは、たいへん意義のあることです。それを実現するためには、指導法の向上のための努力とは違った種類の努力が必要となりますが、これも極めて大切なことではないでしょうか。

#### 【質問24】生活日本語の使用法

私の教室では「生活日本語」を使っていますが、初級の人には文法が難しく中級の人には内容が簡単すぎて、どちらにもじっくりこない所があります。また「生活日本語」は場面が限られているので、家庭や職場などにおける会話場面を取り入れたものが必要だと思います。何かこの教科書をやれば大丈夫という教科書の決定版というものはないのでしょうか。

【解説】「生活日本語」は、帰国者に日本語指導を行っている機関の4割教科書以上で主教材として使われている、代表的な教科書です。

「生活日本語」の最大の特徴は、帰国者の生活実態調査から生活行動場面を抽出し、それに基づいて全体を構成してある点です。

この教材の目的は、重要な生活行動場面において、目標とする行動を達成するために有効にコミュニケーションを行えるようにすることにあります。

したがって、この教材の持ち味を發揮させて有効に使うには、まず、どんな状況における会話なのかを学習者によく理解させ、その状況が学習者自身にとって身近な、出会う可能性の高いものであることを感じとらせることが大切です。各課の最初の部分の解説によってもそれは可能ですが、指導者が中国語ができるならば話し合ったり説明を加えたりして動機づけをするとよいでしょう。

各課の学習項目は、その場面の行動達成に必要なコミュニケーションの要素項目としてとり出されています。したがって、文の構造上やさしいものから順に学習項目が配列されているわけではありません。その場面で目標となっている行動を達成するためにコミュニケーションを行うことが一番大事なことで、目標達成のために学習者のレベルに応じて表現の形を多少変更しなければならないこともあります。文法文型の積み上げに重点をおく場合には、この教科書を主教材にするのは適切ではありません。

この教材では、練習は「表現練習」「会話練習」「発音練習」の3種類に分かれていますが、中心になるのは「会話練習」です。この「会話練習」は、「表現練習」で練習した語句や文型を単に入れ替えてやり取りの形式にしたものが多いですが、それさえも省略されている課があります。これをただそのまま練習すると、決まった会話の流れにそって口慣らしをするだけの練習になってしまう恐れがあります。指導者は、ここで提示されている入れ替え用の語句を参考にして、前に紹介した「役割演技」の方法を使って指導した方が効果的でしょう。この場合は当然教科書は閉じて、役割カードを使用します。表現や発音の正確さよりも意味のやり取りに集中するように学習者を誘導するわけです。

続編の「生活日本語」は、前編を終えた者がもう少し体系的に日本語をとらえなおせるようにと配慮して作られた教材です。教材の意図にしたがって復習、整理に重点を置いて使用してもいいですし、前編と同様に「役割演技」を主体にして、家庭におけるいろいろな場面をとり上げるのに使うこともできます。

学習者の学習目的やレベルを見て、何をどのように指導したらいいかを考えてから、教材を選ぶなり作るなり、あるいは修正するなりして用意するのが本来のありかたです。理想を言えば、各教育機関、学習者それぞれに特別の教材を用意すべきなのですが実際問題としてそうもいきません。しかし、一冊の教科書であれもこれも、どんな学習者にも、というのはそもそも無理なことです。それから、一般に市販されている教材や広く配布されている教材は、多様な学習者の平均値を想定して作られていますから、それをそのまま使うとうまくいかない場合も多々あるということは知っておく必要があります。要するに万能の教科書はないということです。また、適当な教材があればすべてがうまくいくのではなく、指導者がその教材の有効な使い方を理解していることが一番大切なことです。

( \* 1 文化庁国語課「平成元年度中国帰国者に対する日本語指導実施状況に関する調査結果の概要」)

#### 【質問25】視覚教材の種類

現在テーブルコーダーを使って指導していますが、もっと視覚的にわかりやすく指導するために視覚教材を使いたいと思います。視覚教材にはどんな種類があるか紹介してください。

【解説】視覚教材・教具には、静止画のものと映像のものがあります。静止画教材・教具の代表としては絵カードがあげられます。絵カードは、物や状況など、いろいろな概念を絵によって提示して、活字を見せずに音声とその意味とを直接結び付けて記憶させるのに役立ちます。また、話題の順番など、覚えなくともいい部分を絵カードによって示してやり、学習者の記憶の負担を軽くすることもできますし、何枚か組み合わせて紙芝居のようにストーリーを聞きとる練習にも使えます。

OHP(オーバーヘッドプロジェクター)やスライドもこの静止画教材の仲間に入りますし、最近ではマグネットシートを使っているいろいろな絵を組み合わせることができるものも売られています。しかし

やはり絵カードが最も簡便で利用しやすいでしょう。市販のものもありますが、自分で描いたり広告や雑誌の写真を切り貼りして作ったり学生に描かせたりして簡単に作成できます。

映像教材は、場面状況をそのまま映し出してくれるために学習者の興味・関心を引きつけ、印象づけるのに威力を発揮します。また表情やしぐさ、態度など、ことば以外の要素も含んだ自然なコミュニケーションをまるごと提示できますから、背後にある文化の違いを実感させるのにも適しているといえます。

映像教材として現在活用可能なものはビデオでしょう。他にテレビの生放送やレーザーディスク教材なども映像教材の仲間に入りますが、前者はぶっつけ本番的になってしまっただけでなかなかうまく使えませんし、後者はまだ一般的ではありません。

ビデオ教材には市販のものもありますが、これだけビデオデッキやカメラが普及してくると自作の教材を作ることもむずかしくなくなってきました。例えば、人のしぐさや表情、料理の作り方、部屋の情景などを提示するときや、学生の活動を記録しておいて後で反省の話し合いをするときなど、自分で直接カメラを使って撮影して教材化できます。カメラを使わなくてもテレビ番組を収録しておいて編集することによっても教材ができます。ニュースやドキュメンタリー番組を、話題提示や内容についての簡単な問答の材料に使うことができます。また、典型的な生活行動場面があったら音声を消して会話を推測させるということもできます。そのほかにもレベルや目的に応じてそれぞれいろいろな利用法があります。

#### 【質問26】視聴覚教材の利用法

私たちの教室では市販の絵教材やビデオ教材を使用していますが、うまく意味が伝わらなかつたり、学習者が途中で飽きてしまつたりと、なかなかうまく使うことができません。無理なく有効に視聴覚教材を利用する方法はないでしょうか。

【解説】コミュニケーションを重視した指導の場合には、どうしても音声や映像を伴った環境が必要になってきます。といて、どうしても視聴覚機器を使わなければならないというわけではありません。学習者の目の前で教師が模範を演じてみせたり実物を示したりすることも、広い意味での視聴覚教材を提示していることになります。まずこれが基本であることを確認しておきます。絵カードやビデオ教材は、本来、ことばによる説明だけでは理解しにくい表現や状況を視覚的に意味が分かりやすく提示するためにあるものです。したがって、これを使ってもうまく意味が伝わらないということは、わざわざ絵カードや視聴覚教材を用意した意味がないということになってしまいます。市販のビデオ教材の中にも、文の形にだけ焦点を当てているためにストーリーや情景などが不自然になって、どういう話の筋なのか分かりにくい面白味のない教材になってしまっているものもあります。

抽象的な意味や複雑な状況など、視覚的にもとらえにくいものは、仮に視覚教材を使って表すにしても間接的に表すしかなく、学習者の推測が頼りということになります。勘のわるい学習者や抽象的な思考が苦手な学習者の場合には、いろいろ工夫してもなかなかわかってくれないものです。このような場合、学習者が中国帰国者だけであれば、中国語を使用することを避ける理由はありません。それが肝心なことであり、説明すればすむことであれば中国語で簡潔に説明すればいいのです。中国語ができない指導者の場合でも、授業準備の段階で、問題になりそうな箇所を中国語の辞書を引いて用意しておけば板書によってわからせることができます。

映像教材は、テレビ講座のように映像教材の中で解説や練習も行ってしまつものもありますが、ふつうは話題やモデルの提示のためにあり、それを使って反復や代入の練習をするようにはできていません。といて、途中で止めたり戻したりしながら練習するのは映像への興味も半減しますし、練習にも身が入りません。話の筋を追って内容を理解するような使い方をする場合にも、何度もいっしょに繰り返し見ればやはり飽きてきます。自分のレベルで理解可能な部分はすでにわかってしまつたし、表現のしかたを正確に覚えるには緊張が続きません。何度も巻き戻して見なおしたり聞きなおしたりするような作業は自分一人で自分のペースでやりたいのが人情です。しかし、カセットテープのように手軽に個人テープを作つたり宿題用にテープを貸したりするところまで、ビデオはまだ普及しているとは言えないでしょう。そこで、ビデオと一緒に映像を見て記憶に焼き付け、その音声だけをカセットテープに録音して、宿題等に使うという方法が考えられます。

ビデオ教材を使うときには、その目的があるはずで、ビデオによって話題を提示し、それについてコミュニケーションを行うためなのか、場面などを視覚的に提示するためなのか、ある場面で行われるコミュニケーションのモデルを提示するためなのか、内容理解の練習の材料を提供するためなのか、日本事情などについて紹介するためなのか、まず指導者がねらいをはっきりさせておかなければなりません。それによって、ビデオの使い方も違ってきます。話題や場面の提示のためであれば、最初に1回だ

け見てあとの時間は問答や解説などを行うのがふつうでしょう。モデルの提示のためならば、最初に1、2回見せてから問答や解説を行い、役割演技などの練習をしてから、もう1回見るというような使い方ができるでしょう。内容理解の題材であれば、必要に応じて初めに語句の練習をしてから1～2回見て、内容に関する問答をしたあとにもう1回見るというような使い方、日本事情の紹介であれば1回通して見てから話し合いや解説を行う、または、途中で適宜止めて解説を加えながら見る、というような使い方ができるでしょう。

**【質問27】インタビューの回答聞き取りの工夫**

簡単な総合活動を企画してインタビューをやってみました。しかし、学習者は質問はできるのですが、相手の回答を聞き取ることができません。結局は、コミュニケーションが成立せず、学習者に自信をもたせることもできなかったように思います。もう少し学習者のレベルが高くなってからやるべきだったのでしょうか。

**【解説】**日本語の力がまだ不十分だからインタビュー活動を行うのは無理だと考えるべきではないでしょう。インタビューをして相手から情報を得るという目標と現在の学習者の力との間には、当然ある程度の格差があるわけです。今の日本語力では不十分などころがあるからこそ、それが学習の機会となるのです。この格差は主に、インタビューの内容の調整、インタビューの質問形式や手順の工夫とことばの面での手当によって埋めるわけです。ただし、目標と現在の学習者のレベルとがあまりにかけはなれていたのでは格差を埋めきれず、学習の機会とはなり得ません。そのへんのバランスは結局は指導者がいろいろ試みて経験を積みながら判断することになります。

では、インタビューという場合について、この格差を埋めるためにどのような学習をすればいいか具体的に見てみましょう。

一つは語句や表現について補強していくということが考えられます。相手から返ってきそうないろいろな回答を事前に予想し、それらを聞き分けられるようにしておくということです。これはあくまで聞き分けることが目的ですから、鍵になることばが聞きとれればいわけです。練習のときにも、文単位というよりも単語の単位ですばやく相手の意図を予測して聞き分ける訓練が必要となるでしょう。指導者が、相手から出てくるであろう返事を文単位で与えて一字一句正確に聞きとる練習をさせたり、学習者がそれを言えるようになるまで訓練したりしますと、往々にして意味のやりとりを重視した活動ではなく形の正確さを重視した活動に変質してしまったり、学習者に過重な負担を与えて意欲を失わせてしまったりします。

格差を埋めるためのもう一つの重要な学習は、インタビューのためのいろいろな方策を使う練習です。

インタビューをして相手の答えが難しすぎたり長すぎたりして理解できないという場合について考えてみましょう。

まず、相手に自分がどこまで理解していてどこがよくわからないかを知らせることが必要になります。つまり、相手の話にうまく反応するということです。この反応がまったくなかったり適切でなかったりすると、相手は不安な気持ちのままに一気に最後まで話しきってしまうかもしれませんし、途中でコミュニケーションをあきらめてしまうかもしれません。

学習者のレベルがそれほど高くない場合には、相手にあまり長く話させない方策が必要でしょう。一気にべらべら話されては内容をつかむことはまず不可能です。そのためには、途中で適宜反応を示す必要があります。わかっているときには、うなずきや、「はい」「そうですね」等によって了解を示し、相手に話を先に進めるように促します。よくわからないときには途中で意味を確認する、首を傾げる、よくわからないという表情をする、わからなかった語句を繰り返してつぶやいてみる、等、相手の話の腰を折って、話が勝手に先にどんどん進むことを防ぎます。これによって、相手は、もう一度説明したりゆっくりと言いなおしたり、別の表現や動作を加えたり、また、紙に書いたり図解をしたりと、学習者のレベルに合わせようとなんらかの別の対応をしてくれるはずですが、しかし、これも程度問題で、話があまりやたらに中断されるようでは相手がコミュニケーションに対する意欲を失ってしまいますから、あまり重要ではないと思う内容については、よくわからなくても聞き流すことも必要になります。

質問の内容については、それが相手の考え方を聞くようなものと、ふつう答えも複雑になったり、はっきりしなかったりしがちですから、初歩の学習者の場合には、できるだけ客観的事実や実態についてのインタビューにしたほうが無難でしょう。

この問題についての別の解決方法としては、質問の形式を、「何を～しますか」「どんなときに～しますか」「～についてどう思いますか」「～はどうなっていますか」「～はどうしてですか」というような、疑問詞を使った問いの形よりも、「～は...ですか」「～ですか、...ですか」「～について、...と思います

か、それとも...と思いますか」「～という考え方に賛成ですか、反対ですか」「1.～、2.～、3.～のうちどれですか」というような、「はい」「いいえ」で答えられる形や、なにか一つを選択して答えられる形を使って、相手の回答が複雑になったり不明確になったりしないように工夫する方法もあります。

インタビューの回答を聞き取って記入するための用紙を工夫することによっても、聞き取りをより容易にすることができます。つまり、回答欄に回答として返ってくる可能性が高い鍵となる単語をいくつか記入しておいて、選んで をつけるような形式にすることも考えられます。

いずれにしても、やってみた結果、学習者のレベルに合わせて途中で改善策を講じなければならないときには、問題の所在と修正の理由を学習者によく理解させ納得させる必要があります。学習者自身が理由もわからないままインタビューのやりかたが勝手に変わると、学習者の不信感や無気力を誘うことになってしまうかもしれないからです。

中級レベルの学習者でも、質問の内容や方式によっては回答が聞き取れないということがあります。学習者がどうしてもその内容、その方式でインタビューしたいのであれば、場合によっては、その場では回答の意味がよくわからなくてもしかたがないとあきらめ、インタビュー時にテープレコーダーを持参して回答を録音しあとでテープを何度も聞いて意味を解釈するような方法もとれます。この場合には、相手の回答の意味がよく聞き取れないにしても、インタビューを始めて終わるまでの進行上のコミュニケーション、つまり、まず始めるときの挨拶や依頼、テープレコーダーに録音することの了承、最後の感謝の表現、などはきちんとやらせるようにしましょう。

一問一問のインタビューそれぞれは比較的順調に問いかけることスムーズなやりができたが、それらをつないでスムーズな一連のやり取りを行うとができなかった場合には、色々な原因が考えられます。

「はい」「そうですか」など相づちを打つこと（ことばはなくても頷きや表情等でも構いません）は、やりとりを行う際に相手の発言を促す大変重要な役割を果たします。第1問から第2問に移るときなど、「じゃあ、...」「それでは、...」「次に、...」などが加われればずっと自然な感じになるでしょう。答えてもらったら「わかりました」と一言入れば、相手の受ける感じもよくなります。基本的なやりとりに大きな問題のない学習者であれば、こういう点に注意を促し、練習をします。

## 索引

相手に長く話させない方策...	201
相手を捜して企画を練る...	151
アイデンティティー...	38
アンケート...	159、165
意思疎通が困難...	48
異文化学習...	170、188
異文化学習法...	88
異文化環境と適応...	15
異文化間コミュニケーション...	18
異文化指導と日本語指導の関係...	72
異文化適応...	27
～とコミュニケーション...	18
～と日本語指導...	40
～の段階...	29
～をどう考えるか...	16
～を目的とする方法...	88
(心理面から見た)異文化適応の段階...	32
異文化適応能力...	15、36
～の基本...	37
～の養成...	17
異文化での自己実現のために...	36
～での適応...	27、29、93
～に対する関心を高める方法...	189
異文化不適応...	34
～状態...	35
異文化理解の段階...	100
インタビュー - ...	165
～計画...	173
～項目...	172
～の回答聞き取りの工夫...	200
～の方策...	201
～文...	173
受け身の練習...	57
打合わせ...	165
演技の検討...	135
OHP...	196
教える存在...	52
親に対する軽蔑...	45
～の歴史...	45
会話学習...	194
外国語学習経験...	101
～の需要の多様化...	78
学習...	51
～とは...	50、60
～の過程と指導法...	98
～の言語...	45
～をどう考えるか...	50
学習意欲...	62
～のない学習者に対する指導...	60
学習活動例...	116
学習者主体の学習...	56
～がやる気になる場面、役割の設定...	136

～中心の指導...	8 9
～と作るシラバス...	9 0
～に対する想像力...	5 5
～に適した学習方法...	9 1
～に適した練習...	9 0
～にとっての学習とは...	6 0
～の事情...	6 4
～の性格...	6 7
～の性格等に対する配慮...	1 3 6
～の多様性...	5 4 , 1 0 0
～のニーズ...	1 1 0
～のニーズに応じた指導...	1 1 0
～を知る...	5 4 , 5 5
学習体制...	4 1
学習動機の強さ...	1 8 6
学習面から見た適応...	2 9
学力、学習経験の違う学習者が一つのクラスにいる場合の配慮...	6 8
学歴・職歴...	1 0 1
家庭で中国語を使うことについて...	4 4
～でのコミュニケーション...	4 4
観察評価のポイント...	1 3 4
慣習の相違...	2 1
関連分野との関係...	4 1
教育・学習観の転換...	5 3
教科書...	1 9 4
(万能の)教科書...	1 9 5
教室の役割...	7 6
～の日本語と職場での日本語...	1 1 4
機械的文型練習...	8 5
帰国者に対する日本語指導の目的、内容と指導法...	9 3
～のコミュニケーション...	1 1 7
帰国子女の長所...	4 5
具体的な活動例...	1 5 5
敬語の使い方...	1 2 7
ゲーム...	1 0 8、1 1 8、1 2 9
～を使った指導の特色...	1 0 8
ゲームの具体例1「連想ゲーム」...	1 2 0
～2「すごろく」...	1 2 2
～3「社長に伺ってきて」...	1 2 7
言語以外の能力・知識...	2 7
言語機能...	8 6
言語能力とコミュニケーション能力...	2 7
現場に適した指導法...	8 0
講習会...	1 4 9
口頭法...	8 4
行動達成...	1 9 4
交流会...	1 2 9、1 4 9
～のスタイル...	1 4 9
～の特色...	1 4 9
交流会の具体例1「中国を知ってもらおう」...	1 5 6
～2「日中交際事情についての懇談会」...	1 5 8
語句や表現の補強...	2 0 0
個人差...	1 9

小道具...	1 5 7
コミュニケーション...	2 5
~をどうとらえるか...	2 5
~重視の活動の評価...	1 1 6
~重視の指導法と今までの指導法...	1 0 4
~重視の指導法と文法, 発音, 文字などの指導...	1 0 6
~重視の指導法と4技能...	1 0 8
~上の誤解...	1 8
~と人間関係...	1 8
~に対して開かれた態度...	1 4 9, 1 5 2
~のいろいろな手段...	1 3 0
~法...	8 6
(真の)コミュニケーション...	4 9, 1 6 4
(人にとっての)コミュニケーション...	2 5
(指導者と学習者の)コミュニケーション...	4 8
コミュニケーション能力...	2 7, 9 5, 1 0 6
懇談会...	1 4 9
~を目的とする方法...	8 4
~の学習...	4 0
~の養成...	3 9
~の進め方...	1 5 7, 1 6 2
~のテーマの選び方...	1 5 4
~の雰囲気...	1 6 2
サロン化の原因...	3 8
ジェスチャー...	1 2 1
視覚教材の種類...	1 9 6
自己学習能力の育成について...	5 0
~の養成...	5 2
自己実現...	1 6
自己主張...	4 6
社会的役割...	6 2
出身地...	1 0 1
週1, 2回の指導しかできない場合の工夫...	7 0
宿題の工夫...	6 0
~の評価...	6 1
消極的な学習者に対する対処法...	6 6
職場での日本的なコミュニケーションについて...	4 6
視聴覚教材の利用法...	1 9 8
実践を通じた改善...	8 1
質問形式の工夫...	2 0 2
指摘される欠点...	8 5
指導技術...	8 2
指導者からの働きかけ...	5 6
~間の連絡・分担...	1 9 2
(1クラスを複数の指導者が担当する場合)の分担・連絡...	1 9 2
~と学習者との話し合い...	6 1
~と学習者のコミュニケーション...	4 8
~の中国語能力...	4 9
~の開かれた態度...	1 5 5
~の態度が重要...	1 5 5
~の役割...	9 3, 1 5 0, 1 6 8
~の役割について...	5 3
~の留意点...	1 1 9, 1 3 6, 1 5 1, 1 6 8

指導設計...	8 2
指導の主な流れ...	1 3 3 , 1 5 0
~の実践...	7 8
~の内容と指導法...	9 4
~の目的と指導法...	9 3
~の理念...	1 4
~(週1, 2回の指導しかできない場合)の工夫...	7 0
指導法...	8 2 , 9 2
~を決める際の留意点...	9 2
~のいろいろ...	8 2
~の形成...	9 2
~の体系化...	9 2
(4つの)指導法...	8 2
(その他の条件と)指導法...	1 0 0
指導理念...	8 2
授業記録...	1 9 2
~態度が悪く, 学習意欲のない学習者への対処法...	6 4
~の工夫...	6 4
助詞の使い方...	1 2 6
シラバス...	8 4
調べる活動...	1 6 5
資料調べ...	1 6 5
真のコミュニケーション...	4 9 , 1 6 4
人脈(ネットワーク)...	4 2
心理面から見た異文化適応の段階...	3 2
スムーズなやり取り...	2 0 3
スライド...	1 9 6
生活環境...	1 0 1
生活言語と知的言語の習得...	4 5
生活行動場面...	9 6 , 1 9 4
『生活日本語』...	1 9 4
~の使用法...	1 9 4
『生活日本語』...	1 9 5
生活能力...	4 1
専業主婦に対する指導...	6 2
潜在的な学習能力...	6 8
相違ということば...	1 9
~の発見...	4 7
~の例...	2 0
総合活動(プロジェクトワーク)...	1 0 8 , 1 2 9 , 1 4 9 , 1 6 4
~のタイプ...	1 6 6
~の特色...	1 6 4
~の例...	1 6 4
総合活動の具体例1「住宅事情についてのミニ調査」...	1 7 1
~2「クラス新聞作り」...	1 7 7
総合的・実際的能力...	5 3
総合能力...	9 5
その他の条件と指動法...	1 0 0
達成感...	7 0
体験の概念化...	5 1
対人接触場面...	9 6
多重言語・多重文化...	4 5
単語表...	1 7 5

地域への適応と方言...	1 1 3
チュック用紙...	1 3 3 , 1 7 5 , 1 8 2 , 2 0 2
中国語・中国文化の保持の奨励...	4 4
～の利用...	1 2 9 , 1 9 8
通訳...	4 8 , 1 4 9 , 1 5 2
～を介した懇談会・討論会の意義の理解...	1 5 2
訂正...	1 7 0
～の仕方...	1 3 7
定着と人間関係...	4 3
討論会...	1 4 9
トラブル事例...	1 6 0 , 1 6 1
読解力を目的とする方法...	8 3
動機づけ...	1 9 4
生の方言...	1 1 3
日本語を使わせる工夫はないか...	7 6
日本語学習観...	3 9
日本語教育の多様化...	7 9
日本語教室が溜り場となる問題...	3 8
日本社会での適応...	1 9
～とつなげる...	5 6
日本事情...	1 2 2
～の指導...	1 4 8
日本事情・日本文化を扱った日本語指動活動...	1 8 7
～に関するテーマ...	1 8 6、2 1 2
～に関するテーマの扱い...	1 8 6
～に対する関心...	1 8 8
年齢...	1 0 0
発表活動...	1 6 5
場にふさわしい表現...	7 2
場面・状況に適した発話...	1 1 4
万能の教科書...	1 9 5
非言語コミュニケーション要素...	2 6
非言語手段...	1 4 9
日頃の指動の重要性...	1 5 1
筆談...	1 4 9
ビデオ教材...	1 9 6 , 1 9 8
～使用の目的...	1 9 9
～の使用法...	1 9 9
1クラスを複数の指導者が担当する場合の分担・連絡...	1 9 2
人にとってのコミュニケーション...	2 5
評価と訂正...	1 3 6
雰囲気作り...	1 3 6
文化的集団の規範...	2 4
～指導の例...	7 3
～側面への気づき...	1 8 8
要素の指導...	1 3 3
文化と帰属意識...	2 4
～の構成要素...	2 3
～の相違...	1 4 , 1 9
～の伝承...	2 5
～の要素...	2 3
～変容...	8 3
文法訳読法...	8 3

方言の指導...	1 1 2、2 1 3
マグネットシート...	1 9 6
まとめる活動...	1 6 5
学び方を学ぶ...	5 0
学ぶことへの学習者の関与...	5 3
学ぶ学習者...	5 7
ミニ総合活動...	1 7 1
メッセージ...	2 6
目的を絞ったアドバイス...	1 0 5
目標と学習者の力との格差...	2 0 0
モデル提示...	1 8 1
問題解決の能力...	2 8
役割演技...	6 9 , 7 0 , 1 9 5
～の位置づけとテーマ例...	1 3 7
～の進め方...	1 3 5
～の特色...	1 2 9
役割演技の具体例 1 「誘う」...	1 3 9
～ 2 「引っ越し先で隣人にいろいろ尋ねる」...	1 4 4
役割カード作りのポイント...	1 3 1
～とその作り方...	1 3 0
～の提示方法...	1 3 4
よい人間関係を作るための指導...	4 2
4つの指導法...	8 2
幼児化...	1 5 3
レクリエーション...	1 4 9
練習の課題化...	8 7 , 1 0 5
話題例...	1 6 0